# 料理次元―キュイジーヌディメンション―

濡れせんべい

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ｉＯＳ／ａｎｄｒｏｉｄゲーム「キュイディメ」の二次創作小説です。

原作ゲームの五大陸編シナリオを大幅に加筆、脚色して小説の形に落とし込んでみました。

―以下あらすじ―

料理は魔法である。人が食材を料理に変えるとき、魔法の力「厨力」が生まれる。そして人がその料理を食べるとき、これもまた「厨力」が生まれる。

厨力は人の世界とは別の次元――「キュイディメ」へと送られて、そこで人とは異なる、しかし人と同じ身体と魂を持つ「キュイ」へと生まれ変わる。

人が新たな料理を生み出す度に、キュイディメでは新たなキュイが生まれていく。人が飢えることなく満足に料理を食べられるようになると、キュイディメもまた厨力にあふれ、発展を遂げた。

しかし。いつしか人は料理を機械で生産するようになり、また、生み出された料理を廃棄するようになった。

機械で生産された料理。廃棄された料理。それらから生まれた黒い厨力により、キュイディメは大きな変化を起こそうとしていた……

# 目次


エウロパ大陸
先付①―玉子焼き― 1
先付②―白ご飯― 9
エウロパ01区―カフェモカ― 16
エウロパ02区―クレープ― 24
エウロパ03区―シーザーサラダ― 32
エウロパ04区―パルマハム― 40
エウロパ05区―シャンパン― 50
エウロパ06区―D・スターゲイジーパイ― 58
エウロパ07区―パニーニ― 69
メリケン大陸
箸休め―サーロインステーキ― 78
メリケン01区―フライドポテト― 87
メリケン02区―D・バーガーカン― 93
メリケン03区―ブリトー― 99
メリケン04区―マッシュポテト― 109
メリケン05区―イーター― 117
メリケン06区―ブルー・マルガリーター― 126
メリケン07区―ポップコーン― 136
メリケン08区―ドーナツ― 146
和風島
箸休め―春巻き― 157
和風島01区―天ぷら― 165
和風島02区―オムライス― 172

# エウロパ大陸

## 先付①―玉子焼き―

暗い闇の中を漂っている。意識は朦朧として、すべての感覚が失われたかのようだった。

しかし、唯一味覚だけはわずかに感じることができた。甘味、酸味、そして強い苦味。

その味は料理人――シェフとして各国の料理を研究してきた自分でさえ、経験したことのない味だった。

昔、興味本位で毒性のあるキノコを食した時のことを思い出す。今感じている味は、まさにそれと同じ、生命を消し去るような味だった。

まだ、死にたくはない。

味覚に集中していると、段々と意識がはっきりしてくる。かすかな光、そしてかすかな音も感じられる。

「シェフ！　起きて！　シェフ！」

誰かからの声が聞こえ、自分は目を覚ました。

「シェフ……！」

目を開けると、そこには魔女のような帽子を被った少女が立っていた。彼女は目を開けた自分を見て、安心したような表情を見せる。

「うっ……」

意識ははっきりしてきたが、体は思うように動かない。自分は力を込めて、どうにか上半身だけ体を起こす。

「よかったあ～！　シェフが起きた！」

魔女の少女は歓声をあげる。

「ここは……どこだ……」

周囲を見渡してみても全く見覚えのない場所だ。目の前の少女も知った顔ではない。とりあえず自分は、事情を知っているであろう魔女の少女に、そう尋ねた。

「ここはキュイディメ。そして私はキュイディメの管理人、ウィッチ。はじめまして、シェフ！」
「……」
魔女の少女の言葉が理解できなかったのは、まだ意識がはっきりしていないからだろうか。いや、そうではないだろう。
「……すまないが、水をくれないか」
ともかく、未だに口に残っているこの苦味を消さないと冷静な思考はできない気がした。
「了解っ」
ウィッチと名乗った魔女の少女は、近くのテーブルに置いてあったガラス製の水差しを手に取り、同様に置いてあった木製のコップに水を注ぎ込む。
「はい、どうぞ」
自分はコップを受け取ると、勢いよくそれを喉に流し込んだ。苦味が薄れると同時に、意識もより鮮明になっていく。
「これは……硬水か」
飲んだ水に舌先を擦るような違和感があり、自分はその水が硬水であることに気付いた。
「すごい！　水の味も分かるなんて、流石はシェフ！」
魔女の少女は感動した声をあげる。しかし、硬水と軟水を判別することは難しくない。硬水と分かる人がどれほどいるかは知らないが、この水を飲んで違和感を覚えない人はかなりの少数だろう。
「部屋の内装は明らかに日本のものではない。出てくる水は日本では珍しい硬水。……ここが日本ではないことは分かる」
冷たい水で頭が冴え、やっと状況が整理できるようになる。
「ここは何なんだ。君の言った、キュイディメとは何なんだ？」
そう尋ねると、魔女の少女は考え込む素振りを見せた。
「説明するより、体感した方が早いかもしれないよ。シェフ、まずは私のお願いを聞いてくれない？」
「お願い……？」
「玉子焼き、作って！」

「えっ」

玉子焼きは単純な料理だ。まずは卵を割り、黄身と白身を溶きほぐす。

この時、黄身と白身をしっかりと混ぜないと、焼き上がったときに黄身と白身が分離して、黄色と白の斑模様の美しくない玉子焼きになってしまう。

かと言って混ぜすぎるのも厳禁だ。混ぜすぎるほど、玉子焼きのふんわり感が薄れてしまう。

「砂糖はどこにある？」

隣で見守っていた魔女の少女に尋ねる。

「上白糖？　グラニュー糖？　黒糖？　氷砂糖もあるよ！」

「……上白糖でいい」

自分がそう答えると、魔女の少女は紙の袋を差し出した。

袋の中には白い粉が詰まっている。ひとつまみして口の中に入れると強い甘味が感じられた。

確かに上白糖だ。明らかに近代の技術で製糖されている。その砂糖をもうひとつまみすると、今度は卵の中にそれを投入した。

「他の調味料は？　醤油？　めんつゆ？　出汁の素？」

「……砂糖だけでいい」

「えっ」

「玉子焼きは、卵と砂糖と水だけでいい」

それが、自分の玉子焼きに対する信念だった。

卵と砂糖だけでも、信じられないほど深みのある味を出せる。それが調理と言う名の魔法だ。

自分が料理人を志したのも、この玉子焼きの魔法に魅せられたからだった。

子供のときに母親が作ってくれた、卵と砂糖だけの玉子焼き。これだけの材料で何よりも美味しい料理が作れる。

自分はその時以来、ずっとその魔法に魅せられ続けていた。

卵と砂糖、水を混ぜ終えたらいよいよ魔法の出番だ。ここからの『焼き』が玉子焼きのすべてを決める。
まずはフライパンを熱する。油をしいて、フライパンに十分熱が入ったらいよいよ卵を投入する。
卵の焼ける音と共に、卵の香りが立ちのぼった。
火加減はこの卵の香りでわかる。少し火力が強い。手元のボタンを押して少し温度を下げることにした。
（しかし、なんでＩＨコンロがあるんだ……）
今回使っているコンロは、現代日本では珍しくない、電気で加熱するタイプのコンロだ。
珍しくはないが、この風変わりな世界で、なぜか調理機器だけ最新鋭のものがあるというのは、やはり違和感がある。
先程魔女の少女が勧めていたが、めんつゆや出汁の素が都合良くあるのもおかしかった。出汁の素なんて、それこそ現代日本以外にはそうは存在しないだろう。
（おっと……）
意識が一瞬料理から外れてしまった。ここからが調理の魔法の真髄だ。
わけのわからない場所でわけのわからない人間に作る料理であっても、料理は料理だ。手を抜くことはできない。
自分は全身全霊を捧げて、焼き加減を見守る。玉子焼きの表面は美しい黄色でなくてはいけない。
黒は論外。茶色も失敗作だ。美しい黄色の衣を重ねていったものだけが、玉子焼きを名乗れる。
火が通った黄色の衣を巻き、新しく卵液を流し込む。この単純な、しかし一瞬も気を緩められない作業が続く。
そして、最後の衣が巻き上がった。
「完成だ」
フライパンをコンロから下ろすと、速やかに玉子焼きをまな板の上に移す。
後は包丁で一口サイズに切り、皿に盛り付けるだけだ。

「……ん？」
玉子焼きを皿に盛り付けた瞬間、なぜか玉子焼きが輝き出した。
美しい黄色の衣を纏った玉子焼きは光を反射して輝いて見えることがある。しかし、今起きているのはその程度の光ではなかった。
色で表現するのは難しいが、あえて表現するなら紫色が近かった。その紫色の光が玉子焼きを中心に渦を巻いていく。
……そして。光が収まると、そこには黄色い衣をまとった少女が立っていた。
「はじめましてシェフさん。玉子焼きですぅ。こ、これからよろしくお願いしますぅ」

玉子焼きを作ったら玉子焼きと名乗る少女が玉子焼きから生まれたので、一緒に玉子焼きを食べることにした。
頭がおかしくなりそうになるが、しかしそれは紛れもない現実のようだった。
「はう……シェフさんの玉子焼き、あったかくて甘くて、とろけちゃいそうですぅ……」
玉子焼きと名乗った少女は玉子焼きを食べてそんな感想を漏らす。
「わかった？　シェフ。　これがキュイディメなの！」
魔女の少女は玉子焼きを食べ終えると、いきなりそう宣言した。
「いや、すまない、分からない」
「そんな～！」
魔女の少女は頭を抱える。
「ここが……まあ、自分のいた世界ではないことはとてもよく分かった。しかし、この世界のことは分からない。キュイディメとは何なんだ？」
改めて自分はその質問を投げかけた。
「その玉子焼きちゃんみたいに料理から生まれた存在が暮らす世界。それがキュイディメ。シェフの世界、人間界で料理が作られると、キュイディメでは新しいキュイが生まれるの～」
「じゃあ、今まで自分が作った料理も全て、この世界で人として生きて

いるってことか？」
　そう尋ねると、魔女の少女は首を横に振った。
「本来であればそうだった。でも、１００年くらい前から新しいキュイが生まれなくなったの。キュイが生まれるには『厨力』が必要になるんだけど、人間界からそれが供給されなくなった」
「厨力？」
「人間が愛を込めて料理を作ったり、感謝を込めて料理をいただいたりすると、キュイの力のみなもと『厨力』が生まれるの。でも料理を粗末に扱ったり廃棄したりすると『厨力』は汚れて、使い物にならなくなっちゃう」
　そこまで言うと、魔女の少女はため息をついた。
「人間界の厨力が弱くなった原因は……人間界にいるシェフの方がよく知っているんじゃないの～？」
「ああ……」
　魔女の少女の言葉は自分の胸に強く突き刺さった。
　自分は料理人として料理を粗末に扱ったことはない。しかし、例えば客が料理を残す、あるいは想定どおりの客が来ないで食材が余ってしまう経験は幾度となくあった。
　人間が１００年前より料理を大切にしていないと言われると、それには何の反論もできなかった。
「私はキュイディメで一番厨力が集まる場所……ここで料理を作って、人間たちの代わりにキュイを作ろうとした。でも、私ではうまくいかなかった。だからシェフを呼んだの」
「何で……自分を選んだ」
「私が作った玉子焼きを人間界に送ったの。人間界で一番強い厨力を生み出している人の所に届くよう力を込めて」
「うっ……」
　その言葉で自分の記憶が蘇った。このキュイディメに来る前の記憶だ。
　家に帰るとテーブルの上に玉子焼きが置いてあった。それは自分の作った玉子焼きではない。自分で作った記憶もないし、そもそも見

た目からして不恰好な、明らかに素人が作った玉子焼きだった。
不気味な玉子焼きだったが、かといってそのまま捨てるのも気が引けて、つい一口食べてしまった。
あまりの味に気を失い……気付いたらここ、キュイディメにいた。
「あの玉子焼きは……君が作ったのか」
「そう。美味しかった～？」
全く悪気を感じていない声で魔女の少女は尋ねてくる。
「ちなみに、調味料は何を入れた？」
「え～と、日本の料理だから日本の調味料と思って、砂糖、塩、酢、醤油、味噌。最近日本では緑茶味が流行ってるって聞いたから隠し味に茶葉。健康を考えて、最後に漢方薬も入れたよ～」
「……そうか」
自分を殺そうとした味の正体はひとまず分かった。そして、彼女はキュイを生み出す料理はおろか、そもそも料理が作れないこともよく分かった。

「話をまとめると、自分はこのキュイディメに新たなキュイを生み出すために呼ばれたと言うことか？」
「そのと～り！　これからよろしくね～」
魔女の少女は相変わらず悪気を感じていない声でそう言ってくる。
人間界が料理を大切にしなくなったからキュイディメの世界が大変なことになっている、そのことはよく分かったし、料理人として申し訳なく思う。
しかし、だからと言って勝手に連れ去られ、故意ではないにしろ殺されかけた相手の願いを素直に聞けるほど、自分は人間ができているわけではない。
「あ、あのう……」
自分の隣に座っていた玉子焼きを名乗る少女が口を開いた。
「私、シェフさんに作ってもらえて、一緒に玉子焼きを食べられて嬉しかったです。ありがとうございます」
そう言うと彼女はぺこりと頭を下げる。

「それで、あの……シェフさんが作る他の料理も、シェフさんと一緒にご飯を食べて、お礼を言ったりしたいと思うんです。あの……だから……」

彼女は全身を小さく震わせていた。自分は肩の部分に手を起き、震えを抑えてやる。

「分かったよ。どこまでできるかは分からないけど、やってみる」

「シェフさんっ……！」

自分が宣言すると、玉子焼きは声をあげて自分の胸に飛び込んできた。玉子焼きの優しい甘い香りがふんわりと辺りに漂う。

この自分の胸で泣いている少女が自分の作った玉子焼きだと言うことは、この甘い香りが何より証明していた。今まで何千回と嗅いできた香りだ。

そして、自分に料理の素晴らしさを教えてくれた玉子焼きの頼みを、自分が断るはずはなかった。

# 先付②―白ご飯―

「おはよ～シェフ」
　朝食の準備が終わる少し前に、ウィッチが食堂に現れた。
「ああ…朝早くから申し訳ないが、報告がある」
　自分は隣にいる白い服の少女の肩に手を置く。
「白米を炊いたら新しいのが生まれてしまった」
「し、白ご飯です。よろしくお願いします」

　ウィッチと玉子焼きに白ご飯を加え、今日の朝の食卓は４人で迎えることになった。
「ウィッチ、質問がある」
　食卓に並んだ料理を見渡して、自分は質問を投げかけた。
「白ご飯、味噌汁、焼き鮭、だし巻き玉子、きんぴらごぼう。これだけの料理を作ったが、キュイになったのは白ご飯だけだった。なぜだ？」
「それが分からないから私も困ってるのよ～。私がいくら料理を作ってもキュイは生まれなかったんだから」
「……」
　ウイッチの作るものは料理ではないから当たり前だ、という言葉を自分は飲み込んだ。
　ともかく、料理を作るとキュイが生まれる”こともある”と解釈しておけばいいだろう。
「もうひとつ質問がある。食材はどこから仕入れ……いや。どこから手に入れているんだ？」
　この家には様々な食材が用意されていた。肉や卵、野菜のような生鮮食品も含めてだ。
「ああ、それはユウちゃんに頼んでるの～。今日もそろそろ来るんじゃない？」
「ユウちゃん？」
「ユウちゃんは次元を旅する郵便屋さん。人間界から食材を仕入れて

キュイディメに届けてくれるの」
　ウィッチはユウちゃんと言う人物についてそう説明してくれる。ともかく、その内来ると言うのであれば、詳しい話は本人に聞いてみよう。
「まあ、それでは朝食にしよう。玉子焼き、白ご飯。味噌汁を運ぶのを手伝ってくれるか？」
『はいっ！』
　二人の声がそろった。二人は声がそろったことに驚き、お互いに顔を見合わせ、そして笑いだした。
　先程初めて出会ったはずだが、二人はもう仲の良い友達に見えた。
　玉子焼きと白ご飯は料理として相性のいい組み合わせではあるが、キュイになっても同じことが言えるのだろうか。
　キュイについてはまだまだ分からないことが多かった。

　話にあった『ユウちゃん』がこの家を訪れたのは、朝食の時間が終わって後片付けをしている最中のことだった。
「はじめましてシェフ。私はユウ。次元を旅する普通の郵便屋です」
　玄関から入ってきた小柄な少女は、自分を見つけるなり自己紹介してくる。
「あ、ユウちゃん！　おはよ～」
　ユウの姿を見て、ウィッチはこちらに駆け寄ってくる。
「ほら！　シェフが来てくれたよ！　シェフが！」
「……見ればわかる」
　ユウはそう言うとため息をついた。
「ほら、ユウちゃん。私に何か言うことはないの？」
「……別に、何も」
「え～。あんな料理を人間界に送ってもシェフが食べてくれるはずがない。もし食べたとしてもキュイディメに到着する前に死ぬ。って、散々言ってくれたよね？」
　ウィッチは勝ち誇ったようにそう告げる。
「……シェフがキュイディメに来た今でも、その言葉を撤回する気は

ない」
「ひど～い！　ねえ、シェフも何か言ってやってよ！」
「えっ」
　突然話を振られて自分は返答に困る。心情としてはユウの味方をしたいが、そうすると話が更に揉めそうだった。
「えーと、ユウ……さん。朝ご飯がまだなら、ここで食べていかないか？」
「……え」
　自分の提案が予想外だったのだろう、ユウはしばらく考え込む素振りを見せた。
「迷惑でなければ、私は断る理由はありません」

「……ご馳走様でした」
　ユウは用意した食事を、一言も声を発さないまま食べ終え、最後に頭を下げた。
「シェフはこの世界に残るつもりですか？」
「……そのつもりだ」
　自分は少し間を置いてから、そう告げた。まだ気持ちに整理はついていないが、少なくとも今は、元の世界に帰ろうとは思っていない。
「私の『郵便船』ならシェフを人間界に運ぶこともできます。必要があれば、今日の朝ご飯のお礼に、無料で送迎しましょう」
「……ああ。ありがとう」
　ユウの心づかいに、自分は感謝の言葉を述べる。
「私は料理評論家ではありませんが、とても温かい、料理への深い愛情が感じられる朝ご飯でした。あなたなら、ダークキュイを浄化できるキュイを生み出せる……私はそう思います」
「ダークキュイ？」
　初めて聞く単語を耳にして、自分は疑問の声をあげる。するとユウの顔が一気に歪んだ。
「ウィッチ。もしかしてあなた、まだ説明してないの？」
「これからしようと思ってたの～！」

ユウと一緒になぜか2回目の朝ご飯を食べていたウィッチが、声をあげる。
「全く……この馬鹿は、キュイディメやキュイについては説明しましたか？」
「バカじゃない～！　それはちゃんと昨日説明して、今日これからダークキュイについて説明するつもりだったの～！」
「はいはい。ダークキュイは一言で言うと正常に生まれなかったキュイのことです」
「だから私が説明するの～！」
静かな朝食の時間が、一転して騒がしくなった。
「え～と……ウィッチ。説明してくれるか」
とりあえず場を収めるために自分はそう提案する。
「うん！」
ウィッチは笑顔になり、ユウの軽い舌打ちが聞こえた。

「人間界で料理をすると厨力がキュイディメに届き、キュイが生まれる。ここまでは昨日説明したよ～」
昨日に引き続き、ウィッチの解説が始まった。
「ただし料理を粗末に扱ったり廃棄したりすると、厨力は汚れてしまって、キュイが生まれなくなる。そして、その汚れた厨力からは……ダークキュイが生まれるの」
先程ユウの口から聞いたダークキュイと言う単語が、今度はウィッチから発せられた。
「ダークキュイは汚れた厨力……負の厨力から生まれるキュイ。でも玉子焼きちゃんや白ご飯ちゃんのように会話をすることはできない、魂を持たないキュイなの」
「魂を持たないと言うのは……どう言うことだ？」
「感情を持たず、唯一キュイに攻撃するという意思だけを持っている感じ。ロボットみたいなものかな」
「そんな危険な存在が……この世界にいるのか？」
不安になって、自分は思わず玉子焼きと白ご飯の姿を確認した。

２人は朝ご飯の後、奥の部屋で何かをして遊んでいるようだった。こちらの視線に気付くと、手を振って答えてくれる。
「今はまだダークキュイの数は少ない。でも、日に日にダークキュイは増えていて、逆にキュイの数は段々と減っている。このままではいずれ、キュイディメはダークキュイの世界になってしまうかもしれない」
「そんな……」
　玉子焼きや白ご飯から感じていたキュイディメへの暖かな印象は、その言葉で一気に吹き飛んだ。
「どうにかできないのか？」
　自分がそう尋ねると、ウィッチは口元を少し歪めた。
「人間界の人たちが、昔のように料理に敬意を持ってくれればいいんだけどね～」
「あ、ああ。すまない」
　キュイディメの変質の原因は人間界の食文化の変質によるもの。ウィッチから説明があったとおりだ。
　この場で唯一人間界の住人である自分は、そう言われると平謝りするしかない。
「シェフは悪くないよ！　むしろシェフは、そのキュイディメを救ってくれるかもしれない人なんだから！」
　ウィッチが慌てて首を振る。
「救う……」
「そう。負の厨力から生まれるダークキュイは、それ以上に強い愛のこもった正の厨力から生まれるキュイの力で、浄化することができるの」
「……あの玉子焼きや白ご飯にそんな力があるのか？」
　そう尋ねると、ウィッチは深く頷いた。
「どのキュイにもその力はあるの。ただ、遠い人間界から届いた厨力で生まれたキュイよりも、シェフがキュイディメで直接生み出したキュイの方が、間違いなく強い力を持っている」
「……そうなのか」

自分はもう一度玉子焼きと白ご飯に目を向ける。すると二人はまたこちらの視線に気付き、先程と同じく手を振ってきた。
浄化とは具体的に何をするのか分からないが、あの二人にそんな力があるようには思えない。
「ウィッチ。ともかくシェフには一度、キュイディメの現在の姿を見てもらった方がいい」
黙って話を聞いていたユウが、口を開いた。
「うん。シェフ、今日はこれからエウロパ大陸に行きましょう」
続けてウィッチがそう提案する。
「エウロパ？」
「キュイディメは人間界から流れた厨力で生まれた世界。だから人間界と似た形をしているの。エウロパは、人間界の西欧諸国から流れてきた厨力が主に集まる場所」
「つまり……西洋料理のキュイが住んでいる地区。ってことでいいのか？」
自分がそう尋ねるとウィッチは深く頷いた。
「そのと～り。この次元ハウスから一番近い大陸だから、召喚陣を使えばすぐに行けるよ。玉子焼き～、白ご飯～、出かけるよ～」
『は～い』
２人は元気よく返事をすると、こちらに駆け寄ってきた。
「それでは、私はおいとまします。シェフ、改めてご馳走様でした」
ユウは最後に改めて頭を下げると、立ち上がった。
「ユウちゃんも一緒に行かない？」
「私はただの郵便屋。キュイディメに深く関わるつもりはない。何度も言っているでしょう」
ウィッチの提案を、ユウはあっさりと断った。そしてそのまま、家の外に出ていく。
「相変わらず冷たい～。まあ、それじゃシェフさん、行こう～」
ウィッチはそう言うと、自分の左手をつかんで引っ張った。
「行きましょう～」
玉子焼きもそれを真似して、自分の右手をつかみ引っ張ってくる。

「え、えっと……行きましょう?」
最後に白ご飯が、少し考え込んだ後に、シャツの裾の部分を少しつまんで、引っ張る仕草をした。
「あ、ああ。分かった」
3人に促され、ともかく自分はエウロパ大陸と呼ばれた場所に向かうことになった。

## エウロパ01区―カフェモカ―

「わ～！　すごいですぅ……」

眼前に広がる光景を見て、卵焼きが歓声をあげた。

召喚陣から出ると、目の前を大きな川が流れていた。川沿いにはいくつもの木造の小屋が立ち並び、周辺は石畳で舗装されている。

周囲を見渡すと、野菜や果物が陳列された商店もあった。しかし、店主を含めて、人の姿は見えない。

「人間の世界に比べると随分と静かだけど、こう言うものなのか？」

自分はウィッチに尋ねる。

「元々キュイの数は人間に比べると多くない。それに輪をかけて、最近は数が減ってきている。だけど……それにしても誰の姿も見えないのは不思議かも～……」

ウィッチ自身も少し違和感を覚えているようだ。

「まあともかく、少し歩いてみましょう」

ウィッチの声に合わせて自分は歩き出す。玉子焼きは景色に釣られてあちらへこちらへとふらふら歩いている。

一方、白ご飯はずっと自分の隣を歩いている。特に感動や驚きを感じている様子はない。

「白ご飯はエウロパ大陸に来たことはあるのか？」

そう尋ねてみると、白ご飯はこくんと頷いた。

「キュイの姿ではもちろん初めてです。でも、料理としては西洋にいたこともあります。西洋での私は、ライスって呼ばれているんですよ」

白ご飯は自慢下に胸を張ってみせる。

つまり、キュイは料理の時の記憶を持っているということだろうか。

「白ご飯は西洋生まれなのか？」

白ご飯は今度の質問には首を横に振った。

「私は日本人のシェフさんから生み出されたキュイですから、日本の要素が強い白ご飯です。でも、他の地方の白ご飯の厨力も混ざってい

るから、多少は他の地方の白ご飯の性質もあるんですよ」
「な、なるほど……」
白ご飯の説明は分かりやすかったが、どうも自分はまだキュイという存在が理解しきれていない。

「いやあああっ！」
街並みを数分ほど歩いていると、突然耳をつんざくような悲鳴が聞こえた。
「……ウィッチ！」
「うん！　こっち！」
悲鳴は正面にある小屋の裏手から聞こえた。自分は急いで声のした方に走り出す。
「やっ、やめてください～！　帽子を取らないでください～！」
悲鳴の主は茶色の服に身を包んだ女性だった。それが人でないことは一目で分かった。後ろ髪が途中から、クリーム色の液体になって流れ出していたからだ。
「ぼ、帽子を取られると私は単なるスープになっちゃうんです～！」
後ろ髪が液体の女性は必死に帽子を押さえている。そして、その帽子を取ろうとしているのは……それもまた、明らかに人間ではなかった。
一目見て人間以外の存在だと分かる青い肌。青は料理のタブーとされている色だ。それが料理の敵であることは、直感で分かった。
「このっ……！」
自分はダークキュイと思われる存在に飛びかかった。勢いをつけてぶつかり、襲われているキュイから引き離そうとする。
「だ、だめですぅ～！」
途端、自分の体は後ろに引っ張られた。
「だ、ダークキュイと戦うのは……私たちの役目です……」
自分を引っ張った張本人である玉子焼きは、声を震わせながら自分の前に立った。
「シェフ！　ダークキュイから離れて！」

続けてウィッチの声が響く。
「し、しかし……」
「シェフの厨力はキュイに力を与えるように、ダークキュイにも力を与えてしまうの！」
「え、ええっ……!?」
ウィッチのその言葉を聞き、自分は慌ててその場から離れる。
少し離れてから振り返ると、ダークキュイは標的をこちらに切り替えたようだ。玉子焼きに視線を向け、今にも飛びかかろうとしている。
そして、ダークキュイの足が地面から離れた。
「『夢境』っ……！」
ダークキュイが玉子焼きに飛びかかる。その瞬間、玉子焼きの体から光が放たれた。
「あれは……!?」
玉子焼きから放たれた光は、球状になり薄黄色の膜となって玉子焼きの体を包み込む。ダークキュイは玉子焼きに何度も飛びかかろうとするが、その薄黄色の膜にぶつかっては跳ね返されていた。
「私は皆さんを守るバリアを張ることができます！」
気付くと自分たちの周囲にも薄黄色の膜が張られている。ダークキュイの様子を見るに、確かに奴はこの薄い膜を破ることはできないようだ。
「それで……ここからどうするんだ……!?」
「え、えっと……どうしましょう～」
玉子焼きは何とも頼りない返事を返す。
「わ、私が頑張ります！」
続いて白ご飯がダークキュイに向かって走っていく。そして、その右手を前方に突きだした。
つまりは、単純なパンチを繰り出した。
「ギャギャッ！」
ダークキュイは白ご飯に殴られて声をあげる。ダメージを与えたと言うよりは邪魔をされて怒ったというような雰囲気だ。

「えいっ！」
白ご飯はもう一度殴りかかる。その攻撃はダークキュイには当たっているが、どうも当のダークキュイにダメージを与えているようには思えない。
ダークキュイも反撃で白ご飯に飛びかかろうとするが、玉子焼きのバリアがありうまくいっていない。
どちらも攻め手がない状態だった。何かできることはないかと、自分は周囲を見渡す。
「……うわあっ！」
後ろを振り向くと、目の前、手を伸ばせば届く距離にもう一匹ダークキュイが立っていた。
こちらを襲おうとして、玉子焼きのバリアに止められていたのだろう。バリアが無かったら完全に不意をつかれていたところだった。
「ど、どうすんだ……」
自分には戦う手段がない。玉子焼きや白ご飯はもう1匹の相手で手一杯だ。ウィッチは何かできないのか。
ウィッチの方に視線をやると、その視線の意味を察してかウィッチは大きく首を振る。
「私もキュイじゃないから戦えないよ～！」
「じゃ、じゃあ……逃げることは⁉　転送の魔法でどこかに飛ぶとか！」
このエウロパ大陸にはウィッチの転送の魔法で移動してきた。あれを使えるのであれば、とりあえずこの場からは逃げられる。
「転送は召喚陣のある場所でしか使えないよ～！」
「じゃあ、走って逃げよう！」
自分はウィッチにそう伝える。ともかく囲まれたままではどうにもならない。一旦敵から離れるべきだ。
「逃げる必要はありませんよ。シェフ様、ウィッチ」
その時、自分の背後から声が聞こえる。振り向くとそこにはワインレッドのマントに身を包んだ女性が立っていた。
片方の手にはパイプ、もう片方の手にはなぜかコーヒーカップを

持っている。そして彼女はそのコーヒーカップを、勢いよく振り上げた。
「愚か者に知性に満ちた裁きを……！」
その声とともに、コーヒーカップから黒い液体が飛び散った。強いコーヒーの香りが周囲に立ち込める。
飛び散った黒い液体からはコーヒーの香りの他にチョコレートの風味も感じられた。カフェモカ……だろうか。
明らかにコーヒーカップの容量を超えた量のカフェモカが、辺り一帯に撒き散らされた。
ダークキュイの身体もカフェモカで濡れている。自分たちは玉子焼きのバリアがあるからか、カフェモカはかかってはいなかった。
「『モカアサルト』っ！」
最後に彼女が声をあげると、撒き散らされたカフェモカが、まるで爆発物のように次々と破裂する。
「……!?」
爆音と爆風を感じ、思わず自分は目を閉じてしまう。
数秒後目を開けると、先程まで目の前に立っていたダークキュイは、身体の半分程度が黒い霧のように変化していた。
やがて身体の全てが黒い霧になり……その黒い霧も空気に溶け、消えた。

「初めましてシェフ様。カフェモカと申します。以後お見知りおきを」
カフェモカを撒き散らした女性は、こちらの予想どおりカフェモカと名乗った。つまり、カフェモカのキュイと言うことだろう。
「お久しぶりです、ウィッチ。相変わらず殺意に満ちたコーヒーを淹れているんですか？」
「淹れてない！　……じゃなくて、エウロパは今何が起こってるの？」
ウィッチの質問にカフェモカはすぐには答えず、パイプを燻らせる。
「それは私にも分かりませんね。突然街に大量のダークキュイが現れ

たので、街の皆を避難させた後、こうして片端からダークキュイを浄化していったわけです」
「も、もう他にダークキュイはいないのか？」
　自分がそう質問すると、カフェモカは両手をあげてみせる。
「街の反対側から殲滅してきましたので、当面の危険は去ったと考えます。最も、ダークキュイが大量発生した原因が分からない以上、根本的な問題は解決していませんが」
　カフェモカはそう言うと、手元のコーヒーを口に含んだ。
「あ、あのう……」
　自分たちの様子を遠巻きに伺っていた女性が声をあげた。最初にダークキュイに襲われていた、後ろ髪が液体の女性だ。
「マッシュルームスープ。あなたは避難しなかったんですか？」
　カフェモカはその女性をマッシュルームスープと呼んだ。その名前を聞いて、自分はその女性の頭の帽子がマッシュルームを模していることに気付く。
「はうう……ご、ごめんなさい～。逃げる途中に変なダークキュイに見つかっちゃって……」
「変な……？」
「普通のダークキュイよりももっと私たちの姿に近くて。こ、言葉も話していたんです」
　マッシュルームスープがそう伝えると、カフェモカは目を見開いた。
「言葉！　ダークキュイがですか!?」
「ひいっ！　ご、ごめんなさい～」
　カフェモカの勢いに押されてか、なぜかマッシュルームスープは謝りだした。
「ああ、失礼。大きな声を出しすぎました。どんな言葉を話していたんですか？」
　カフェモカが改めて質問すると、マッシュルームスープも落ち着きを取り戻す。
「星を見ているって言ってました……」

「星を？　この真昼間から？」
　カフェモカは空を見上げる。自分も合わせて空を見上げたが、当然星など見えるはずがなかった。
「私のことに気付かなかったみたいで、一人で話していました。それと……最後にエゲレスって言ってました」
「エゲレス……ですか。ふむ」
　カフェモカはそこで一旦話を止める。
「エゲレスって……イギリスのこと？」
　自分は隣のウィッチに尋ねてみる。
「ここエウロパ大陸の端にある島のこと。シェフの想像どおり、人間界のイギリス周辺の厨力が集まっている場所よ」
　ウィッチがそう説明すると、カフェモカは再び口を開いた。
「エゲレスは元々ダークキュイの力が強い場所です。人間界にいたシェフ様なら、ご存じでしょう」
「あ、ああ」
　イギリス料理の評判の悪さは当然知っていた。他国の食文化を否定したくはないが、料理に手間と時間をかけるほど良い厨力が生まれるのであれば、イギリスの厨力はかなり低いだろう。
「今までにない新しいダークキュイが現れ、エゲレスに向かっている……ふむ」
　カフェモカは再びパイプを燻らせる。
「シェフ様はどうお考えになりますか？」
「え……」
　突然話を振られ自分は狼狽する。
「この世界のことは詳しくないけれど……街を襲った、何者か分からない敵がいるなら、追いかけるべきなんじゃないか？」
　少し考えてからそう答えると、カフェモカは満足気に頷いた。
「同意見です。シェフ様、目的が同じであるならば……シェフ様の旅に、私も同行させては頂けませんか？」
「一緒に？　それは……願ってもないことだ」
　自分はウィッチや玉子焼き、白ご飯の様子を伺ってから、そう返事

をする。
　そもそも先程のダークキュイとの小競り合いですら、彼女がいなかったらどうなっていたか分からない。
　むしろこちらの方が同行をお願いしたいくらいだった。
「それではよろしくお願いします、シェフ様、ウィッチ」
　カフェモカはそう告げるとゆっくりと頭を下げた。そして続いて、玉子焼きと白ご飯の方に歩いていく。
「私はシェフから生まれたキュイではありませんが、仲良くしてくださいね」
　カフェモカは二人の方に手を置いた。
「は、はい！」
　二人は目をキラキラと輝かせながら返事をした。自分たちが倒せなかった相手を一瞬で倒した人物だ。憧れの感情を抱いてもおかしくないだろう。
　玉子焼きたちには申し訳ないが、自分も少し安堵の感情を抱いていた。

## エウロパ０２区―クレープ―

カフェモカを仲間にして、自分たちは一旦次元ハウスに戻ってきた。

次の目的地であるエゲレス島にはカフェモカのいた街からも直接向かえるが、ウィッチの転送で移動した方が早いようだ。

またカフェモカ曰く、現在のメンバーでは戦力が足らないとのことだった。次元ハウスに戻ってきた自分は、カフェモカから詳しい説明を受ける。

「ではシェフ様。僭越ですが私カフェモカが、キュイたちの性質について説明させていただきます」

「は、はい。よろしくお願いします」

思わず自分は姿勢を正してしまう。

「まずは主食です。白ご飯のように主食から生まれたキュイは耐久力があり、長時間戦うことができます。ですがその代わりに攻撃力が低く、ダークキュイと一対一で戦うと、負けはしませんが勝つこともできません」

「な、なるほど」

自分は先程の戦いで見た白ご飯のパンチを思い出す。確かにあれは傍目から見ても全く威力は無さそうだった。

「そして玉子焼きは副菜のキュイです。副菜は名前のとおり、他のキュイを引き立てる力に長けています。玉子焼きのように味方にバリアを張ったり、他のキュイの力を高めることができます。しかし自分自身で戦うことは苦手としています」

先程の戦いで見せた玉子焼きのバリアはダークキュイの攻撃をものともしていなかった。しかし確かに、あれだけではダークキュイを倒すことはできない。

「つまり……玉子焼きも白ご飯も弱くはないが、どちらも敵への攻撃力に欠けていると言うことか」

自分がそう呟くと、カフェモカは満足気に頷いた。

「そのとおりです。そして私たち飲み物のキュイは攻撃力に長けてい

ます。しかし敵からの攻撃に非常に弱く、仲間がいない状況で戦い続けることはできません」
「それは、白ご飯や玉子焼きの助けが必要になるってことか？」
　自分の問いかけにカフェモカは頷いた。
「大半のキュイには得意分野と苦手分野があります。お互いの苦手分野を補うように仲間を集めることで、私たちキュイは最大限の力を発揮できます」
「……キュイの組み合わせ、か」
　白ご飯に合う攻撃力の高いキュイを配置する。カフェモカを引き立てるキュイを配置する。それはどことなく料理の献立を考えるのと似ている気がした。
「さて、今の私たちに視点を戻しますと、ダークキュイに攻撃できるのが私一人というのは不都合があります。私が戦えない状況になってしまうと、それだけで次の手が打てなくなってしまいます」
「ああ……確かに、そうだ」
　カフェモカがいなくなったら、それこそ先程の戦いのように何もできなくなってしまう。
「カフェモカのような飲み物のキュイを仲間に加えるべきなのか？」
　そう尋ねると、カフェモカは首を横に振った。
「同じ飲み物よりも、攻撃に秀でた別のキュイを仲間に加えた方が、あらゆる局面に対応しやすいでしょう。私はデザートをお勧めします」
「デザート？」
「デザートのキュイは単体の相手への攻撃力は私たち飲み物よりも高いです。しかし、私が先程の戦いで見せたような、広範囲の攻撃を苦手としています」
　カフェモカはまだ見ぬデザートのキュイについてそう説明してくれた。
「敵が少ないならデザート、多いなら飲み物の出番と言うことか」
「はい。言葉を話すダークキュイが何者かは不明ですが、もしそれが通常のダークキュイよりも凶悪な存在であれば
、私よりデザートの方が戦いに向くでしょう」

「分かった。それで……デザートを仲間にするには、とうすれば？」
そう尋ねると、カフェモカは困った顔をする。
「ダークキュイに対抗できるほど厨力を残しているデザートのキュイは、私の知る限りエウロパ大陸には残っていません。シェフ様に新しく生み出してもらうしかないでしょう」
「そうか……分かった」
デザートを作ることはできるが、それでキュイを生み出せるかどうかは分からない。しかしそれしか方法がないのであれば、やるしかないだろう。
「どんなデザートを作ればいいんだ？」
「人間界で有名な料理ほどキュイディメに多くの厨力が流れ込みますので、強いキュイになります。ただシェフ様が直接料理するのであれば、一定以上の知名度がある料理であれば何であっても強いキュイが生まれるでしょう」
「有名なデザートか……」
自分の頭の中で色々なデザートが頭を駆け巡る。
「それと、エウロパ大陸には人間界の西欧諸国の厨力が集まっていますので、西欧の料理から生まれたキュイの方が、エウロパ大陸では活躍できるでしょう」
カフェモカはそう付け加える。有名な西洋のデザート。
「分かった。早速始めよう」
考えていても仕方ない。自分は自分にできること……料理をするだけだ。
有名な西洋のデザートと聞いて、最初に思い浮かべたデザートを自分は作ることにした。

ボウルに小麦粉、卵、牛乳、砂糖を加えてかき混ぜていると玉子焼きが近寄ってきた。
「今日も玉子焼きを作るんですか？」
「いや、今日はクレープを作る」
「クレープさんですかぁ！」

クレープと聞いた玉子焼きは歓声をあげた。
「好きなのか？　クレープ」
「はい！　私と材料も作り方も似ていますから、お友達です！　ちなみに、玉子焼きに小麦粉や牛乳を入れる人だっているんですよ」
「そ、そうなのか」
自分は返答に困りとりあえずそう返事をした。材料や作り方が似ているキュイ同士も仲が良いと言うことか。
「私も何か手伝いましょうか？」
「……それじゃ、農園でクレープに挟むフルーツを取ってきてくれないか？　イチゴ、オレンジ、バナナ、キウイとか、その辺りを何個か」
「はーい。わかりましたぁ」
玉子焼きは元気よく手をあげると、次元ハウスの外に出ていった。
次元ハウスの裏手には農園が広がっている。野菜類、果物類はそこで収穫することもできた。
そして不思議なことに、その農園で取れる野菜や果物は全てが「旬」だった。どの野菜もどの果物も、ちょうど今が一番の食べ頃になっている。
最もキュイディメに来てからは不思議なことばかりで、その程度の出来事に驚くことはなくなっていた。
「こんなものか」
クレープの生地が完成した。この後は生地をしばらく休ませることになる。
本来はこの時間にフルーツを取ってくる予定だったが、玉子焼きの手伝いのおかげで時間が空いた。
「……そうだ」
クレープの他にもう1品作ろう。確か次元ハウス内の食材保管庫にあれがあったはず。
そう思い立って自分は食材保管庫に向かった。
「お待たせしましたぁ～」
クレープの生地を焼き終えたところで、玉子焼きが農園から帰って

きた。両手にかごをかかえ、そのかごの中にはいくつもの果物が入っている。
「ありがとう。もう少しでできあがるから、みんなを呼んできてくれないか」
「はーい」
玉子焼きは相変わらず良い返事を返してくれる。
「さて……」
自分は先程焼き終えたクレープに目を向けた。残すは盛り付けだ。
クレープは何より見た目が大切なデザートだ。薄いクレープ生地を純白のクリームと色とりどりのフルーツで飾り付けていく。そう、それはまるでドレスやアクセサリーを作るような作業だ。
イチゴ、オレンジ、キウイを並べ、周囲にクリームを絞る。そして中央にバニラのアイスクリームを乗せ、仕上げにチョコレートソースを全体にかけた。
「あ……」
最後のチョコレートがかかった瞬間、そのクレープは淡く輝き出した。それは玉子焼きや白ご飯が生まれた時と同じだった。キュイが生まれる。
光は次第に強くなり、やがてその光は人の姿を形作っていく。そして、光は止まった。
「シェフさ……シェフ様。えーと……始めまして、クレープでございます」
光の中から現れた女性……クレープのキュイは、そう告げるとスカートの裾をつまみ、挨拶する。
「あ、ああ。始めまして」
自分も挨拶を返す。三度目とはいえ、自分の料理から人が生まれることには、まだ慣れていない。
クレープのキュイはまるでクレープ生地のような黄金色のスカートを履いていた。そしてスカートには本物にしか見えないフルーツがいくつも添えられている。
「これから人数分のクレープを作るところだ。作り終わったクレープ

を食卓に運んでくれないか？」
　クレープと出会ったばかりだが、今は料理中だ。もう少しで玉子焼きたちも戻ってくるだろう。まずはともあれ、クレープを完成させよう。
「うん。……じゃない、はい。承知いたしました～」
　クレープは自分の頼みに対して、嫌な顔ひとつせず了承してくれる。他のキュイと同じように、やはり自分の言葉には素直に従ってくれるようだった。

「おいしい～」
　クレープにかぶりついた玉子焼きは、歓声をあげた。
「美しい黄金色の表面。それを彩るフルーツとクリーム。とても優雅なデザートでしょう？」
　クレープは満足気な表情をすると、自身もクレープに手を伸ばす。フォークを使ってクレープの一部を口に運んだ。
「おいしい！……いえ、とても美味しゅうございます、ほほほ」
　クレープは先程から言葉遣いが変だが、少なくとも自分の作ったクレープに満足しているのは表情から分かった。
　玉子焼きや白ご飯もそうだったが、どうもキュイにとって自分の基となった料理を食べることは喜ばしいことのようだ。
　この辺は人間には理解できない感覚だ。人間は人肉料理を出されたら間違いなく嫌悪感を抱くだろう。いや、古代の中華では歓迎されたこともあったようだが……。
　それなら。自分はクレープを食べている玉子焼きたちを尻目にキッチンに戻った。そして用意していたもう一品を食卓に運ぶ。
「え～と……カフェモカ、さん」
　自分は他のキュイとは少し離れて、静かにクレープを食していたカフェモカに声をかけた。
「カフェモカを淹れてみたんだけど……どうかな」
　自分はそう伝えると、カフェモカの前にコーヒーカップを置いた。強いコーヒーの香りと、そして微かなカカオの香りが辺りに漂う。

「あら。これはこれは」
　カフェモカはコーヒーカップを手に取る。そして香りを楽しむかのように飲み口に鼻を近付けた。
「素晴らしい。モカの豆を使いましたね」
「あ、ああ。その……この豆が一番あなたの好みに合うかと思ったんだ」
　カフェモカはエスプレッソコーヒーにミルクとチョコレート、またはココアを加えたコーヒーだ。
　しかし元々モカとは豆の種類である。この豆で淹れたコーヒーはカカオの香りが強かったことから、転じてカカオを足したコーヒーをモカと呼ぶようになった。
　今回淹れたコーヒーはコーヒーにミルクとチョコレートを加えた今のカフェモカだが、コーヒー豆についてはモカ産のものを使っている。
「ああ……美味しい。頭が冴え渡っていきます」
　カフェモカは自分の淹れたカフェモカを口に運び、そして小さく息を吐いた。
「いや、しかしこれは困りましたね。これでは私もシェフ様の料理になってしまうではありませんか。うふふ」
　右手で頬の部分を抑えつつ、カフェモカはそう呟く。笑みが浮かぶのを抑えられないといった様子だ。
　ともかく、キュイに同じ料理を振舞うと喜ぶことは間違いないようだ。人間には分からないが、そういうものなのだろう。

「言葉を話すダークキュイかあ……」
　カフェモカから現在の状況を聞かされたクレープは考え込む。
「それが本当の話なら、私一人増えたところで分が悪そう」
「ええ。そのとおりです、クレープ」
　カフェモカはクレープの呟きに反応する。
「ダークキュイは何も考えず、ただ目に入ったキュイを襲うだけの存在でした。もし彼らが私達のように意思疎通し、協力してキュイに襲

いかかってきたら……厳しい戦いになるでしょう」
カフェモカはそう言うと目を閉じた。
「なら、もっと仲間を増やした方がいいのか？」
「そうですね。ただ、敵の姿を知る前に闇雲に対策しても仕方ありません。まずは今いるメンバーで、そのダークキュイの正体を掴みましょう」
「う～ん……」
カフェモカの答えに、クレープは納得しきれないような表情を浮かべた。
「そうですね。クレープの不安も分からないではありません。エゲレスに向かう前に、シャンパーニュに寄りましょうか」
「……そうだね！　それがいいよ」
シャンパーニュという単語を聞いて、クレープの顔が明るくなった。
「シャンパーニュと言うのは……フランスの？」
「ええ、フランス北部のシャンパーニュ地方のことです。シャンパーニュにはエウロパ大陸でも一二を争う力を持ったキュイがいます。彼女に力を貸してもらいましょう」
カフェモカはそう説明する。シャンパーニュ地方のキュイと聞いて、自分の脳裏にはひとつの料理しか浮かばなかった。
「それでは皆を集めましょう。次の目的地はシャンパーニュです」
すっかりリーダーとなったカフェモカが、そう号令した。

## エウロパ０３区―シーザーサラダ―

「優雅に散りなさいっ」
クレープの声と同時に、イチゴやキウイのような形をした厨力の塊が、ダークキュイの周囲に現れた。
そしてその塊は光に形を変え次々にダークキュイに衝突していく。強い衝撃音が響き、それが静まった頃にはダークキュイは最早その姿を留めていなかった。
「すごいですぅ！」
玉子焼きがぴょんぴょんと飛び跳ねる。
「えーと……お粗末様でした」
クレープはスカートの裾を少し持ち上げ、お辞儀する。
キュイの戦いのことは自分にはよく分からないが、クレープがまるで敵のダークキュイを相手にしていなかったことはよく分かった。
「妙ですね……」
喜んでいる玉子焼きとは裏腹に、カフェモカは首を傾げる。
「どうかしたのか？　カフェモカ……さん」
自分が声をかけるとカフェモカは薄く笑った。
「他のキュイのように呼び捨てでお呼びください。私はもう、シェフ様のカフェモカ、なのですから」
「あ、ああ」
思わず自分はカフェモカから目を離してしまう。
他のキュイは自分の料理から生まれた所を見ているからか、どことなく自分の分身のような感覚がある。
しかしカフェモカとは最初から人と人として出会っている。今から他のキュイと同じように接するのは、難しい注文だった。
「妙というのは？」
自分が話を戻すと、カフェモカはまた考え込む仕草をする。
「ここシャンパーニュはシャンパンのキュイが統治している区域です。シャンパンは自分のことよりも領内の平和維持を優先する騎士道精神に溢れるキュイです。彼女のお膝元でダークキュイに遭遇す

るなどと言うことは、本来あり得ません」
「何かが起きている……ということか。言葉を話すダークキュイとも、関係があるのか？」
「無関係では……ないでしょうね」
少しの沈黙のあと、カフェモカは思い立ったように歩き出す。
「急ぎましょう。今すでに、何かが起こっているかもしれません」

シャンパンの館は、小さな田舎町の片隅にあった。
道は舗装されておらず、目の前の館以外には大きな建物もない。周囲はのどかな田園風景が広がっていた。
「さて、入りましょう」
カフェモカは正面の鉄格子の扉に、手をかける。
「勝手に入っていいんですか？」
白ご飯が尋ねると、カフェモカは首を降ってみせる。
「シャンパンはそんなことを気にするようなキュイではありませんよ」
その言葉と同時に、カフェモカは扉を開いた。鉄のきしむ音が辺りに大きく響く。
扉の向こうは一面の花壇となっていた。人工的に整えた花壇というよりは、自然のままに花を咲かせているような印象を受ける。
ただ、手入れを怠っているわけではないということは、咲き乱れる花々の美しさからよくわかった。
花のアーチを潜り抜けると、館の玄関が見えてくる。するとその時、玄関の扉が勢いよく開いた。
「……カフェモカ殿！」
こちらの姿を見て声をあげた女性は、頭に草の冠を付けていた。オリンピックでよく見る、オリーブの葉でできたあの冠だ。
「こんにちは、シーザーサラダ。シャンパンに用があるのですが、入っても構いませんか？」
カフェモカは彼女のことをシーザーサラダと呼んだ。
シーザーサラダは北米大陸生まれの料理だ。そのキュイがここ、エ

ウロパにいるのは料理人として少し不自然に思えた。
　オリーブの冠や赤いマントと言った格好を見ると、シーザーサラダと言うよりは古代ローマの政治家、シーザーの面影が強く出ているような気がする。
「シャンパン様は……今は不在だ」
　シーザーサラダは神妙な顔をしてそう告げる。
「では、待たせてもらっても良いですか」
「いや、その……いつ戻られるかは私にも分からない」
「……どう言うことです？」
　カフェモカは首をひねる。
「シャンパン様はダークキュイを追ってエゲレス島に向かった。どの程度の遠征になるかは分からないが、少なくとも数日で戻ってくることはないだろう」
「シャンパンが……？　このシャンパーニュ地方を置いて、エゲレスに遠征？」
「少し長くなるが、経緯を話してもよいだろうか？」
　シーザーサラダはそう前置きすると、先日、ここシャンパーニュ地方であった出来事を話し始めた。

「シャンパン様！　東部草原地帯、異状なしです！」
　シーザーサラダはその日も、異常が無かったことをシャンパンに告げた。
　1日3回の見回り。それを毎日続けていて、最後に異常があった……ダークキュイを発見し、戦いになったのはおよそ半年前のことだ。
　異常が無いのが当たり前。それでも1日3回の見回りを欠かすことはない。それがシャンパンの信念であった。
「お疲れさま、シーザー」
　シャンパンは優しく声をかける。その声にほんの少し曇りがあることをシーザーサラダは見逃さなかった。
「何か……ありましたか？」

「……いや。ブルギニョンの帰りが少し遅いんだ」
「ブフがですか？」
シーザーサラダは周囲を見渡す。
ブフ・ブルギニョンは西部の田園地帯の見回りを任されていた。
彼女の担当する地帯はこの館から最も近く、範囲も最も狭い。普段であれば、シーザーサラダが館に戻ってくる時間には既に彼女も館に戻っているはずだった。
「様子を見てきます」
「……いや。私も行こう」
シャンパンは少し間をおいてから、立ち上がった。
館の外はもうかなり陽が落ちていて、薄暗くなってきていた。
とは言え、周囲が暗くなるまで後1時間はかかるだろう。この明るさならブルギニョンを探すのに支障はない。
シーザーサラダを前にして、二人は田園地帯のあぜ道を進んでいく。
「シーザー。あれは何だ……？」
後ろのシャンパンが、正面右奥に見える畑を指した。その畑の中央部には、黒い霧に覆われた人影のようなものが見える。
その黒い霧は、ダークキュイが発する負の厨力にとてもよく似ていた。
「まさか……」
「急ぐぞ！」
シャンパンはそう叫ぶと、シーザーサラダの脇をすり抜けて走り出した。シーザーサラダも慌ててその後を追う。
近寄るに連れて、人影の姿が段々と明らかになってくる。それは想像していたダークキュイの姿とは少し異なっていた。
足元まで伸びたグレーの髪。セーラー服のような黒い上着。そして彼女の周囲には魚の骨が浮かんでいた。
奇妙な格好であるが、その姿形は普通のキュイとほぼ変わりが無かった。身体から流れ出ている負の厨力がなければ、ダークキュイとは思えなかっただろう。

「しゃ、シャンパン様……気をつけてくだ……」
その時ブルギニョンの声が聞こえた。
「ブルギニョン！」
ブルギニョンはそのダークキュイから少し離れた場所に倒れ込んでいた。シャンパンは急いでブルギニョンの元に駆け寄る。
その時、目の前のダークキュイが突然光を発し始めた。
「シャンパン様っ！　危ないっ！」
シーザーサラダがそう声を上げるとほぼ同時に、ダークキュイから紫色の強い光が放たれる。
紫色の光はいくつものの塊に分かれ、四方八方に高速で飛ばされていく。
「くうっ……！」
その内のひとつがシーザーサラダの身体を貫いた。シーザーサラダの全身には強い衝撃が走る。意識が遠のき立っていることすらおぼつかない。
この威力の攻撃を広範囲に行う。その相手は明らかに普通のダークキュイよりは強かった。
「……何をするっ！」
シャンパンはダークキュイに向けて叫ぶ。
「……空を……見上げるの……」
「……！」
ダークキュイが言葉を話した。その事実にシャンパンはうろたえる。
「故郷……エゲレスの空は……もっと北？」
「エゲレスだと……？」
シャンパンは声をかけつつ、懐からシャンパンの瓶を取り出す。それはシャンパンの武器であった。
何者かは分からない。ダークキュイであるかどうかすら、不明瞭だ。
しかしブルギニョンを傷つけ、そして今また自分たちに攻撃を行ったと言うだけで、戦う理由としては十分すぎた。

「えっ……」
シャンパンが瓶を構え、それをダークキュイに向けようとしたところで……そのダークキュイは突然姿を消した。
先程までダークキュイが立っていた場所には、残り香のように微かな黒い霧が漂っている。そしてそれも、十数秒するとその場から消え去った。
そして、すべてが夢だったかのように、周囲にはいつもと変わらぬ風景が戻ってきた。
しかし夢ではないことは明らかだった。シャンパンも、シーザーサラダも、ブルギニョンも。その身体に受けたダメージは残っていたからだ。

「シャンパン様はその後、パニーニとパルマハムを連れて、そのダークキュイを追ってエゲレスに向かった。私はブルギニョンの看病だ。彼女は攻撃を2回受けていて、私よりも損傷が大きい。完治までしばらくはかかるだろう」
長い話を終えて、シーザーサラダは大きなため息をついた。
話の中のダークキュイは、自分たちが追っている言葉を話すダークキュイと同一人物なのだろうか。少なくとも無関係ではなさそうだ。
「実は私たちも今、その言葉を話すダークキュイのことを追っているの」
「なんだって……!?」
ウィッチが説明すると、シーザーサラダの目が大きく見開かれた。
「昨日の朝、私の街も襲われました。私自身はそのダークキュイを目撃してはいませんが……目撃者の語った人物像と今のシーザーサラダの語った人物像はほぼ同じです」
「……そうだったのか」
シーザーサラダはカフェモカの話を聞いて、納得したように頷いた。
「何が目的なのかは分かりません。ただ、危険な存在であることは明らかです。急ぎ、エゲレスに向かわねばなりません」

「……そうだな。エゲレスのキュイが心配だ。シャンパン様が間に合ってくれれば良いのだが……」
「シャンパンはここを何時ごろ経ったのですか？」
「領内の安全を確認し、仮眠を取って夜明け前に出ていかれた。時間で言えば、ちょうど半日くらい前のことだ」
「半日……ですか」
カフェモカはそう呟くと目を閉じた。
「順調に進んでいれば、今頃はエゲレス島の南端、コーンウォールにたどり着いた頃でしょうか」
「コーンウォール？」
「……ああ。シェフ様の世界とは違って、エゲレス島に渡るにはコーンウォールを経由するしか方法がないのです。シェフ様の感覚だと、遠回りに思えるでしょうが」
自分の言葉に、カフェモカはそう答える。
「と言っても私の転送なら直接ロンドンにも、スコットランドにもいけるよ～」
ウィッチは自慢気に自分の能力を語ってみせる。
「まあしかし、私たちもコーンウォールに向かいましょう」
「え～」
ウィッチの顔が続いては膨れ面になった。
「シャンパンとの合流を優先しましょう。ウィッチ、コーンウォールへの転送の準備をお願いします」
「は～い……」
ウィッチは仕方ないと言った様子で立ち上がる。
「……あの。どうかしたんですか？」
自分の隣に座っていた玉子焼きがそう尋ねてくる。自分が考え込むような表情をしていたのが気になったのだろう。
「……いや。なんでもないさ」
自分は玉子焼きの肩を軽く叩くと、立ち上がった。
コーンウォール。その名前に自分は何か思うところがあった。カフェモカが話したように、地理的な話で疑問を持ったわけではない。

しかし具体的に何を考えたのかは自分自身もよく分からなかった。
何か引っかかりを感じたのだが、うまく説明できない。
胸に小さな疑問を残しつつ、自分はコーンウォールに向かった。

## エウロパ０４区―パルマハム―

エゲレス島。
言葉を話すダークキュイを追ってこの島にやってきた自分は、なぜか今こうして玉子チャーハンを作っていた。
「……よし」
大型の中華鍋を振るうのは久しぶりだったが、どうにか４人前のチャーハンを一度に作ることができた。
出来たてのチャーハンを皿に盛り、キュイたちが待っている部屋に料理を運ぶ。
「お待たせ。玉子チャーハンだ」
「わあ……！」
目の前に置かれたチャーハンを見て、真っ先に歓声を上げたのは白ご飯だ。
白ご飯はエゲレス島での戦いでのダメージが大きく、服のあちこちが破れ、素肌が見えてしまっている。
「いただきます！」
白ご飯はれんげでチャーハンをすくい、それを口に運ぶ。
「美味しいです～」
二口、三口。チャーハンを食べるごとに、白ご飯の身体がほのかに光り始めた。
すると白ご飯の戦いで受けた傷が段々と治っていく。身体の傷だけではない、破れてしまった服まで元に戻っていった。
キュイは料理を食べるとダークキュイから受けたダメージを回復できる。
そのことは既に聞いていたが、実際にそれを目の当たりにするのは何とも不思議な感覚だった。
「ねえシェフ。私のごはんは？」
戦闘に参加せず全くダメージを受けていないウィッチが、そう尋ねてくる。
「……今から作るよ」

自分は調理場に戻ることにした。
中華料理店の調理場を使うことができたので、一度に大量のチャーハンを作ることはできた。
とは言えそれでも自分の腕では４人前が限界だ。ウィッチと自分の分は元々後から作るつもりだった。
それに、あの様子だとキュイたちのおかわりも用意した方が良さそうだ。もう一度４人前のチャーハンを作ることにしよう。
「そう言えば、自分がここで料理をしてもキュイが生まれることはあるのか？」
手持ち無沙汰で調理場までついてきたウィッチに、自分はそう尋ねる。
「次元ハウスのように厨力が集中している場所じゃないと無理だと思うよ。絶対に無理とは言い切れないけど～」
「……そうか」
自分はウィッチの答えに頷き、少し考えてからまた質問する。
「今作ったチャーハンは、ご飯は次元ハウスで炊いたものを使っているが、それでも結論は同じか？」
「う～ん。その程度じゃ無理かな。調理の大半を次元ハウスでして、最後の仕上げだけを別の場所ですれば、キュイが生まれるかもしれない」
ウィッチは悩みながらもそう答える。
「それがどうかしたの？」
「ああ、いや。素朴な疑問を持っただけだ」
今の質問に自分自身深い考えがあったわけではない。
ただ、エゲレス島に入ってからのダークキュイとの戦いは激しいものだった。
自分にも何かできることはないか。それを今までよりも強く考えるようになった。今の疑問も、自分にできることを確認するための質問だ。
「……さて」
食材の準備が終わる。料理をしている間は雑念を払い料理に集中

しよう。それが今現在の自分にできる、唯一のことだった。

食事の時間が終わり、少しゆったりとした時間が流れる。しかしエゲレス島に来た目的を考えると食後の休憩をしている場合ではなかった。

「さて、それでは状況を整理しましょうか」

すっかりキュイたちのリーダーとなったカフェモカが、休憩時間の終わりを告げる。

「エゲレス島のコーンウォールに転送した私達ですが、転送直後から多数のダークキュイに襲われました」

「大変でしたぁ……」

玉子焼きがぽつりと呟く。

玉子焼きは身体へのダメージは少なかったものの、戦いが終わった後にはその場に倒れ込むほどだった。玉子焼きのバリアは相当な力を使うものなのだろう。

「エゲレス島とは言え、これほど大量のダークキュイがいるのは明らかに異常です。この場所で何かが起きていていることは間違いないでしょう」

「そして、シャンパンさんがまだこの場所に訪れていないこともわかりますね……」

白ご飯がそう付け加えると、カフェモカは頷いた。

「シャンパンが先に到着していれば一帯のダークキュイはすべて倒されていたでしょうからね」

「その……シャンパンさんは、そこまで強いのか？」

自分はそんな疑問を投げかけた。

「先程私たちが戦った程度のダークキュイの集団なら、無傷で倒してしまうでしょうね。強さのレベルが違います」

「ふえ……」

カフェモカの答えを聞いて玉子焼きが変な声を漏らす。とは言え、自分も驚きのあまり声を上げそうになった。

「それほどなのか……」

「ただしシャンパンは私と同じ飲み物のキュイなので、単体の敵と戦うのを苦手としています。もし言葉を話すダークキュイが、戦闘能力も他のダークキュイより飛び抜けて高かった場合は……シャンパンと言えど、遅れを取るかもしれません」
カフェモカのその言葉のあと、沈黙が流れた。
「ま、まあ相手が一人なら、デザートの私が倒してやるよ！」
皆の重い雰囲気を吹き飛ばすためか、はたまた自分の不安を振り払うためか、クレープは大声でそう宣言した。
「ともかく、シャンパンとの合流を優先しましょう。この場所からエウロパ大陸方面に向かえば、途中でシャンパンの一向とすれ違えるはずです」
カフェモカのその方針に、異論を唱えるものはいなかった。

人気のないコーンウォールの市街地を出て、自分たちはエウロパ大陸に繋がる広大な草原に足を踏み入れた。
「エゲレス島には普通のキュイは住んでいないのか？」
自分はそんな疑問を投げかける。
「いなくはない。でも、ダークキュイの多いこの地であえて暮らそうとするキュイはあまりいないかな。この地が故郷のイギリス料理のキュイくらいだと思う」
「故郷……」
その単語には聞き覚えがあった。そう、言葉を話すダークキュイは、故郷のエゲレスに向かうと言っていたそうだ。
それはつまり、言葉を話すダークキュイはイギリス料理のキュイだと言うことにならないだろうか？
イギリス料理……空を見上げる……。
「皆さんっ！　下がってくださいっ！」
突然白ご飯が大きく顔を上げた。
顔を上げると、自分たちの前に一体のダークキュイが立っている。普通のダークキュイの姿形ではあるが、普通のダークキュイよりもひと回りサイズが大きい。

「玉子焼きっ！　バリアを！」
カフェモカがそう指示するとほぼ同時に、ダークキュイは自身の頭から生えている、髪のような触手を素早く動かした。
「ぐっ……」
その触手の先端は目では追えない速度で、白ご飯の腹部にぶつけられた。その一撃で、白ご飯はその場に倒れ込む。
「『夢境』っ！」
玉子焼きのバリアが自分たちの周囲を包む。そのバリアが張られた直後、追撃の触手が白ご飯に向かって飛んできた。
バリアが間に合い、次の触手は白ご飯の身体に当たる前に、バリアに阻まれた。
「このやろうっ！」
クレープは激昂して、厨力を溜め始める。敵のダークキュイに攻撃するつもりなのだろう。
「クレープ！　止めろっ！」
思わず自分はそう叫んでいた。
クレープの必殺技はもう何回もこの目で見てきた。玉子焼きのバリアもだ。
今のままではクレープの必殺技の溜めが終わるより先に、玉子焼きのバリアが消えてしまう。
そうなった時、バリアなしで敵の触手攻撃に耐えられるキュイがこちらにはいなかった。一番耐久力のある、白ご飯が倒れてしまったのだから。
「シェフ様の言うとおりです！　クレープ、白ご飯を連れて下がりましょう！」
カフェモカも自分の言葉に賛同してクレープに指示する。
「分かった！」
クレープは溜めていた厨力を開放する。そして倒れている白ご飯に近寄り、抱え起こした。
「す、すいません……大丈夫です……」
白ご飯はゆっくりと立ち上がる。かなりのダメージを受けている

ようだが、一人で立つことはできるようだった。
「バリアがそろそろ限界ですぅ！」
　玉子焼きの悲痛な叫びが聞こえる。
「距離を取りましょう！　後方に！」
　カフェモカが交代を指示する。まずはクレープが白ご飯を支えながら後ろに下がっていった。
「玉子焼きっ！　今から3数えます！　数え終わると同時にバリアを解いて後方に下がってください！」
「は、はいぃ！」
「3！　2！　1！　今です！」
　カフェモカのカウントダウンが終わると同時にバリアが解ける。
「目くらまし程度にしかならないでしょうがね……『モカアサルト』っ」
　カフェモカはダークキュイに向けてコーヒーを撒き散らす。そのコーヒーはダークキュイに当たると同時に、爆発を引き起こした。
「シェフ様、ウィッチ。下がりますよっ」
「あ、ああ！」
　カフェモカに合わせ、自分たちもダークキュイに背を向け走り出した。
　走りつつ、後方の様子を確認する。カフェモカの言葉どおり、カフェモカの攻撃はダークキュイの足を多少止めることはできたが、それ以上ではない。
　少しの間を空けて、ダークキュイは何事も無かったかのようにこちらを追いかけてきた。
「巨体であれば足は遅いかと思いましたがね……！」
　カフェモカは顔をしかめた。こちらも全力で走っているが、敵のダークキュイとの差は開かない。走る速度はほぼ同じに見える。
　同じであれば逃げ切ることもできるが……それは全員が全力で走れる場合だけだ。
　心配したとおり、数分走ると先に逃げたクレープと白ご飯、玉子焼きの姿が確認できてしまう。

「敵はっ!?」
「追ってきている!」
クレープの問いに自分は答える。
「逃げることはできません! クレープ、スキルの準備を!」
「わ、分かった!」
クレープは不安な表情を浮かべたまま、再び厨力を集め始める。
多少距離を取ったが、敵のダークキュイがこちらに向かって来るまで1分もないだろう。
そこまでにクレープの溜めが終わるのか。また、終わったとしてもそのクレープの攻撃で相手が倒せるのか。
不安はあったが、かと言ってそれ以外の方法は考えつかない。
「来た……!」
敵のダークキュイの姿が見える。触手を振り回し、明らかに臨戦態勢といった雰囲気だ。
「私のバリアはまだ使えません~!」
玉子焼きが怯えた声を上げる。今までの戦闘を見ている限り、玉子焼きのバリアは2~3分に一度しか使えない。
再びバリアを張れるようになる前に敵の攻撃がこちらに届いてしまうだろう。
敵の姿が目前に迫ったその時、クレープが声を上げる。
「いけるっ! 『糖分の代価』っ!」
クレープの声と同時に、ダークキュイの周囲にいくつものフルーツが浮かび上がった。そしてそのフルーツは光に転じ、ダークキュイの身体を次々に貫いていく。
「やったか……!?」
自分を含めた全員がその攻撃の行く末を見守った。
クレープの攻撃によりダークキュイの身体からは大量の黒い霧が放出される。ダークキュイの身体を構成している歪んだ厨力が崩れている証拠だ。
攻撃が終わる。ダークキュイの身体にはいくつもの穴が開き、左腕は完全に消失していた。

倒した。そう思った瞬間、ダークキュイの触手が突然動き出した。
「『夢境』っ！」
玉子焼きは咄嗟にバリアを張る。それは玉子焼きの好判断だった。敵の触手がクレープの身体を貫く寸前で、バリアがクレープの身体を包んだ。
「そ、そんな……」
クレープはその場にぺたりと座り込む。
「ギュイイイ！」
ダークキュイは叫び声を上げつつ、見境なくこちらを触手で攻撃してくる。
ダメージが大きいことに間違いはないだろうが、明らかに敵はまだ戦意を失ってはいなかった。
「ど、どうしましょう～！」
玉子焼きはこの日何回目になるか分からない悲痛な声を上げた。
「クレープ！　もう一度スキルを！」
カフェモカはそう叫ぶ。しかし、今からクレープが厨力を溜めても、玉子焼きのバリアが切れる前に攻撃することはできない。
そもそも、クレープ自身が敵を倒せなかったショックからか、半分放心状態になっていた。
敵もダメージを受けている。白ご飯の状態次第ではどうにか逃げ切れるかもしれなかった。
クレープの傍らに座り込んでいた白ご飯の様子を伺うと、白ご飯はゆっくりと立ち上がった。
「私が……もう一度敵の攻撃を受けます……！」
「な、なにを……！」
自分は思わず白ご飯に駆け寄っていた。
「立つのがやっとじゃないか！」
「敵の攻撃を受け止めるのが……私の役割です……！」
白ご飯は自分が止めても全く引く気は無いようだった。
しかし、クレープがまだ攻撃体制に入っていない以上、敵の攻撃を受け止めても何にもならない。

無理矢理にでも止めるしかない。自分が白ご飯の肩に手を伸ばすと……自分より先に、何者かの手が白ご飯の肩に触れた。
「大丈夫。後は私に任せなさい」
気付くと白ご飯の前に一人の女性が立っていた。
赤ぶちの眼鏡と頭にまとった白いベールが印象的な女性だった。
ハムのような赤い布地、野菜のような緑の布地を服の上に巻いていることから、何かのキュイであることは自分にも想像はつく。
「あっ……危ないですぅ！」
玉子焼きのバリアは、仲間ではないその女性を守ってはいない。
ダークキュイはそれを知ってか知らずか、二本の触手を両方ともメガネの女性に向ける。
触手は二本とも眼鏡の女性の腹部にぶつけられた。
ドンッと強い衝撃音が響く。しかし、眼鏡の女性は微動だにしなかった。
「この程度の攻撃で……私は引かん！」
眼鏡の女性は触手を振り払い、ダークキュイを睨みつける。
「ギュ……」
ダークキュイは小さく声を上げる。
ダークキュイには顔はあるが表情はない。しかし、攻撃を防がれたことについて、少なからず動揺している様子は見て取れた。
「クレープ！　今の内に攻撃を！」
新しい状況にいち早く対応したカフェモカがそう告げる。
「必要ない。……ハム！」
眼鏡の女性はカフェモカの指示を止めると、ハム、と声を上げた。
「いっくよ～！」
大きな声がダークキュイの方向から聞こえる。気付くと、ダークキュイの後ろにいつの間にかもう一人の女性が走り寄っていた。
「『ハムコンボ』！」
ニットの上にエプロンを付けているその女性は、手に持っている何か……おそらくはハムの塊で、ダークキュイに殴りかかった。
1回、2回。一撃を加えるごとにダークキュイの身体は黒い霧へと

姿を変えていく。
「ラストっ」
ハムを持った女性が5回目の攻撃をダークキュイに加えると、ダークキュイはその身体の全てを黒い霧に変え、その場から消失した。

## エウロパ０５区―シャンパン―

「パニーニ、パルマハム。助かりました」
自分たちの危機を救ってくれた2人のキュイに、カフェモカは声をかけた。
ハムを持っているキュイがパルマハムなのだろう。そうなると、眼鏡をかけたキュイがパニーニと言うことになる。
確かに眼鏡のキュイの服装は、パンに野菜やハムを挟んでいるような雰囲気があった。
「構わない。それより、怪我はない？」
「あっ……」
パニーニにそう言われるまで、自分は白ご飯のことを失念していた。
「白ご飯……大丈夫か」
自分は座り込んでいる白ご飯に駆け寄る。
「は、はいぃ……」
白ご飯は頷いて見せるが、明らかにダメージは大きそうだ。
「厨力の大半が失われてる……早くご飯を食べさせた方がいいよ～」
ウィッチがそう提案する。
「ここから街に戻るまで1時間はかかるが……」
「街ならここから歩いて数分のところにもあるよ」
遠目でこちらの様子を見ていたパルマハムがそう告げる。
「そうか。じゃあ申し訳ないけれど……案内してくれるか、パニーニさん、パルマハムさん」
「もちろん」
こちらのお願いにパルマハムは快く返事を返してくれる。
「ほら、じゃあ白ご飯、背中に乗って」
自分はその場に屈むと白ご飯に背中を向ける。
「え、わ、悪いです……」
「皆を守って怪我をしたんだ。遠慮する必要なんてない。ほら」
「は、はい……」

白ご飯は遠慮がちに自分の背中に乗った。
見た目どおり、白ご飯の身体は軽い。この小さな身体で皆を守ったのだから、本当に遠慮する必要はなかった。
「シェフさんの背中……あったかいです……」
白ご飯がそう小さく呟く。それと同時に、少し背中の重みが増した。少しはリラックスしてくれたようだ。
「それでは、出発しましょう」
パニーニとパルマハムを先頭にして、自分たちは歩き出した。
「ここに来る前にシャンパーニュに寄って、シーザーサラダから大体の事情は聞きました」
前を歩くパニーニたちにカフェモカは声をかける。
「シャンパンはどうしたのですか？」
「今向かっている街で休息を取っている。その街には想像を絶する量のダークキュイがいたのよ」
「想像を絶する……？」
「……数百くらいだったかしら。幸い先程のような大型のダークキュイは少なかったから、シャンパンのスキルで一網打尽にしたけれど、シャンパンはかなりの厨力を使ったはず」
パニーニはそう説明する。
「それでシャンパンの厨力が回復するまで、私たちが周囲を偵察していたってわけ」
パルマハムがパニーニの説明にそう付け加えた。
「それで、あなたたちはなんでこんな所にいるの？」
パルマハムは質問に答えると、今度は逆に質問を返してきた。
「あなた方と同じ理由ですよ。自分の街を襲った不可思議なダークキュイを追いかけているだけです」
「そっか……シャンパーニュ以外も襲われたんだ……」
カフェモカの説明を聞いて、パルマハムの表情は曇った。
「あなたたちは今回現れたダークキュイについて、どの程度の情報を得ている？」
続いてパニーニが質問してくる。

「言葉を話すこと、エゲレス島が目的地らしいことしか知りませんね。あなた方と似た情報しかありません」
カフェモカはそう答えると、お手上げと言った仕草を見せた。
少し間を置いて、パニーニはこちらを振り向く。
「ところで後ろの方々は、ウィッチと……シェフ。そしてシェフが生み出した新たなキュイ……で良いかしら？」
「あ、ああ。そのとおりだ」
全てを見透かしたようなパニーニの質問に自分は狼狽える。
「ウィッチが人間界からシェフを召喚して、新たなキュイを生み出そうと計画していたことは知っている。そして今、ウィッチの傍らに人間と見知らぬキュイがいる。そこから想像しただけよ」
パニーニはこちらの表情を伺って、そう説明してくれる。
「パニーニだ。よろしく」
そして改めて、自分たちに向けて名を名乗った。
「た、玉子焼きですぅ。よろしくお願いしますっ」
「……クレープです。よろしく」
玉子焼きは普段どおり少し慌てた様子で、クレープはいつもとは裏腹に元気のない声で、それぞれ名乗り返した。
「白ご飯です……さ、先程はありがとうございました……」
最後に背中の上の白ご飯が、かすれた声でお礼を言う。
「白ご飯。あなたは主食としての役割を立派に果たした。名誉の負傷です。しばらくはゆっくり休みなさい」
「は、はい……」
意図せずねぎらいの言葉をかけられて、白ご飯は少し戸惑ったような返事を返す。
「白ご飯はよく頑張ったよ」
本来ねぎらうべき立場なのはこちら側だ。それを思い出して、自分もまた白ご飯にそう声をかけた。
「……頑張って、少し疲れちゃいました」
白ご飯はそう言うと自分の背中に顔を押しつける。
「硬い背中で申し訳ないが、ゆっくり休んでくれ」

自分は白ご飯にそう伝える。それから少しすると、小さな寝息が聞こえ始めた。

パニーニたちに案内されて到着した港町。

この街の酒場で、自分はついにシャンパンに対面した。

人づての話を聞く限りでは屈強な戦士に思えたシャンパンは、しかし実際に対面してみると、背は高いが華奢な女性だった。

つばの広い帽子や腰に巻いた白いマントは、騎士と言うよりもむしろ貴族を連想させる。

しかし、雰囲気と言うか、上手く言葉にできないが強者が持っている凄みのようなものは自分にも感じられた。

「シェフ殿たちと私たちの目的が同じであるなら……カフェモカの言うとおり、手を組むべきだな」

シャンパンはこちらの状況を聞いて、そう答えた。

「パニーニ、パルマハム。異論はないか？」

そして傍らに控える自分の仲間にそう尋ねる。

「私はシャンパンの決定に従います」

「仲間は大いに越したことはないね」

パニーニもパルマハムも、シャンパンの判断に同意した。

「助かります。これだけの戦力が揃えば、言葉を話すダークキュイがどれほどの力を持っていようと、勝利は固いでしょう」

カフェモカがそう告げると、シャンパンの顔が少し曇った。

「そうであればいいがな……」

「何か問題が？」

「私は件のダークキュイと対面し、攻撃を受けている。……あのダークキュイは、少なくとも私よりは強い。対面してそれだけは分かった」

「……なんと」

カフェモカは絶句する。パニーニもパルマハムもその話は初めて聞いたのだろう、目を見開いて驚いていた。

「幸い、敵意は強くないように見えた。戦って、倒せれば問題はないが

……勝てない場合は、引くことも考えるべきだ」
「……肝に銘じておきましょう」
シャンパンの言葉に、カフェモカはそう答える。そしてしばらく沈黙が続いた。
「真剣な話の中申し訳ないが」
空気を変えようと、自分は口を開いた。
「仲間のキュイが一人怪我をしている。今から彼女のために料理を作りたいが、構わないか？」
「ああ、もちろん、構わない」
シャンパンは自分の問いに頷いてくれる。
「……あなた方の分も一緒に作ってもいいだろうか」
「それは願ってもないことだ。こちらからお願いする」
そう言うと、シャンパンは頭を下げた。

キュイは自分と同じ料理を作ると喜ぶ。
とは言え肉の塊からハムを作っている時間的余裕はない。シャンパンに至っては尚更不可能だ。
少し考えて、自分はロゼのシャンパンを使った牛肉煮込みを作ることにした。要するに、シャンパンを使ったブフ・ブルギニヨンだ。
そして付け合わせにハムとパンのクルトンを乗せたシーザーサラダ。
シャンパンの仲間で、今この場にいないキュイたち。
それを今ここにいるキュイの食材で再現するというテーマだ。
その試みは想像以上に上手く行ったようだ。
シャンパンもパニーニもパルマハムも、まるで自分の料理を食べたときのキュイと同じように、喜びを隠しきれない表情をしていたからだ。
自分は胸を撫で下ろす。しかし、それとは別に新たな問題が起こっていた。
「どこに行ったんだ……」
食事中のキュイたちを尻目に、自分は酒場の扉を開け外に出る。

夕食の時間なのに、クレープの姿が見当たらないのだ。
ウィッチの話によると、自分が料理をしている間にふらりと酒場の外に出ていったらしい。
この街に来る前からクレープの様子は少しおかしかった。様子がおかしくなったのはあの巨大なダークキュイとの戦いからだ。
おそらく、ダークキュイを一撃で倒せなかったことにショックを受けてしまったのだろう。
そのことは自分も感づいてはいたが、怪我をした白ご飯にかかりきりでクレープのことまで気にしてやれなかった。
本来は白ご飯をねぎらうと同時に、クレープのフォローもしてやらなければいけなかったのだ。
「下手糞だなっ……」
自分の生み出したキュイたちの面倒を上手く見てやれない自分自身への苛立ちが募る。
数分ほど周囲を探すと、小さな噴水の傍らのベンチに腰掛けているクレープの姿が目に入った。
「クレープ……」
自分が声をかけても、クレープは顔を上げない。
それ以上の言葉が出て来ず、自分もひとまずクレープの隣に座った。
「やっぱり……私はだめなんだ」
クレープは顔を下げたまま、呟いた。
「あれは、敵が強かっただけだ……クレープの責任じゃ、ない」
自分がそう伝えるとクレープは首を振った。
「違う、そうじゃない……私が、だめなだけなんだ……」
クレープから鼻をすする音が聞こえる。
「クレープって元々は庶民のおやつだったんだ。でもある日お姫さまの目に止まって、優雅で気品のある宮廷料理に生まれ変わったんだ」
クレープは自身の料理の成り立ちを話し始める。
「でも、やっぱりクレープは優雅な高級デザートにはなれなかったんだよ。シェフも日本の人だから知ってるでしょ？　今のクレープは

まるでファストフードみたいに売られて、庶民のおやつに戻っちゃった」
「ああ……」
　屋台形式のクレープ屋は街のあちこちで見かける。それが高級料理かと言われたら、間違いなくそうではない。
「立派な料理から生まれた優雅で強いデザート。そうなれるように振る舞ってきたけど、やっぱりうまくいかなかった。所詮私はクレープ……力のない、庶民のおやつなんだよ……」
　クレープの話は途中から涙声になっていた。
「……クレープ。顔を上げろ」
　自分に何が言えるのかは分からない。しかし今のクレープの言葉は、料理人として見過ごせる内容ではなかった。
「庶民のおやつで何が悪いんだ」
「え……」
「確かに、一流の料理人が手間ひまかけて作る高級料理と比べると、庶民料理は出来の悪いものが多いだろう。でも、高級料理と同じように、愛を込めて作られる庶民料理だってあるはずだ」
　そこまで話して、自分はひと呼吸置く。
「自分は高級料理を作るときと何ら変わらない気持ちを込めてお前を……クレープを作った。それは断言できる」
「……わかってる。わかってるよ。シェフが大切にクレープを作ってくれたから、私は生まれたんだ。……だからシェフのクレープの名に恥じないように、立派なキュイになりたかったんだ」
　クレープはうつむいたまま、そう答える。
「クレープは高級料理のように美しく振る舞うこともできる。それでいて、庶民にとっても親しみのあるデザートだ。高級料理にも庶民料理にもなれる。それは欠点なんかじゃない。それがクレープの魅力なんだよ」
「シェフ……」
「だから……あまり自分のことを悪く言わないでくれ。クレープを好きなみんなが悲しむ」

最後のその言葉が、一番クレープに伝えたいことだった。
料理人は自分の作った料理を否定してはいけない。それは材料となった食材にも、料理を食べてくれる人にも失礼だからだ。
それが自分の持論だった。だからこそ、自分の生み出したキュイにも同じ気持ちを持ってほしかった。
「……うん。ごめん、もう言わない」
クレープは少し間を置いて、小さな声でつぶやく。そしてゆっくり顔を上げた。
自分の今の話がクレープの心をどの程度楽にしたかは分からない。ただ、クレープの表情は先程よりは落ち着きを取り戻していた。
と、その横顔が段々とこちらに傾いてくる。
「少しだけ、こうしていていいかな？」
自分の肩にクレープは頭を乗せてくる。ほとんど重みは感じられない。
「……ああ」
それでクレープの心が落ち着くのであれば、自分に断る理由はなかった。

## エウロパ０６区―Ｄ・スターゲイジーパイ―

クレープとの会話の後、数十分は過ぎただろうか。周囲はすっかり暗くなり、クレープは隣で微かな寝息を立てている。
何の気なしに空を見上げると、いくつもの星が瞬いていた。
（星を見上げる……か）
星空を見上げて、自分は言葉を話すダークキュイのことを思い出す。
キュイディメに来て何度かダークキュイと遭遇しているが、彼らは言葉が話せない以前に、まともな感情を持ち合わせていないように思えた。
例えば動物は言葉を話せないが動きから感情を推し量ることはできる。しかしダークキュイの動きからは、全く感情を見い出せないのだ。
だからこそ、ダークキュイをキュイたちが倒し、消滅させている光景を見ても、自分の心はさほど傷まなかった。
しかし、感情を持ち、それを言葉で表現できるダークキュイがいたら。そしてそのダークキュイとキュイたちが戦ったら。それはもはや人間同士の殺し合いと大差ないのではないか。
自分は星空から視線を外し、横で寝息を立てているクレープの顔を見る。
（そんな戦いをさせたくはないんだが……）
自分は小さくため息をついた。自分に戦える力がないのが何ともどかしい。
「……シェフ」
その時、突然クレープが目を開けた。
「どうした？」
クレープの表情は強張っていた。普段と違うその表情を見て、自分にも嫌な予感が走る。
「負の厨力を感じた。あっちの方に……ダークキュイがいるかもしれない」

クレープは右手に伸びている大通りの先を指し示した。
「……分かるのか？」
「ダークキュイから漏れ出る厨力はわずかだから、普通は分からないよ。それなのに……感じられる」
クレープは不安そうな表情でそう呟いた。
「行ってみましょう」
十数秒ほど間を開けて、クレープは立ち上がった。
「いや、待てクレープ。先にみんなと合流しよう」
自分はそう言うと、他のキュイたちが休んでいる酒場の方向に目をやった。
するとこちらから呼びに行くまでもなく、こちらに向けて走ってくる皆の姿が見える。
「シェフ様、クレープ。無事ですか？」
「ああ」
カフェモカの問いに自分は頷いてみせる。
「こんなに強い厨力は……感じたことがないよ～」
ウィッチの声も珍しく震えていた。
「言葉を話すダークキュイが現れたのか？」
「……シャンパーニュに現れた時はここまでの厨力は発していなかった。しかし、これほどの厨力を生み出せる存在に、他に心当たりがないのも確かだ」
自分の質問に、シャンパンはそう答える。
「ともかく、様子を見に行くしかないでしょ」
「……そうね。細心の注意を払って、向かいましょう」
パルマハムの提案にパニーニは頷くと、先頭を切って歩き出す。

右手の大通りを進むと、その先は大きく開けた広場だった。正面には波止場、さらにその先には何隻もの船が見える。
そして、その広場の中央に、一人のキュイの姿が見えた。
「奴だ……！」
その姿を見てシャンパンは声を上げる。

「あれが……言葉を話すダークキュイ、か」
自分も始めてそのダークキュイに邂逅する。
長いグレーの髪、セーラー服、周囲に浮かぶ魚の骨。その姿はシーザーサラダが話してくれた外見の特徴と一致していた。
そしてその姿を見て、自分の心に浮かんでいたいくつものピースがかちりと嵌まる。
「スターゲイジーパイ……？」
自分はその料理名を思わず口に出していた。
「……なんだって？」
シャンパンたちが声を上げた自分の方に振り向く。
それが決定的な隙となってしまった。皆が振り向いた瞬間、ダークキュイから紫色の光がこちらに向けて発せられたからだ。
紫色の光はいくつかの塊になって、まるで弾丸のように高速でこちらに飛んでくる。
「……！」
声を上げる間もなく、自分たちはその光にぶつかる。そして、自分以外の全員が、強い衝撃音とともに後ろに吹き飛んだ。
「えっ……」
突然の出来事に自分の頭は真っ白になる。
少しして、人間である自分はキュイの攻撃の影響を受けないことを思い出し、そして自分以外の皆はあのダークキュイの攻撃を受けたことに気付いた。
「みんな……」
自分は皆が吹き飛ばされた方を向こうとして、しかし思い留まった。攻撃を仕掛けてきたダークキュイが、こちらに歩いてきたからだ。
「私の……名前を……呼んだ……？」
そのダークキュイは、辿々しい声でそう話しかけてくる。
「……スターゲイジーパイ。じゃないのか？」
改めて先程の料理名を告げると、ダークキュイの瞳が輝く。
「すごい……！」

その反応を見るに、自分の想像は正しかったようだ。
スターゲイジーパイはここ、コーンウォール地方の郷土料理で、魚……ニシンを入れたパイだ。星を見上げるかのように、ニシンの頭を空に向けて飾り付けるのが特徴である。
イギリス料理、魚、空を見上げる。そのキーワードから答えを導き出すことは、この料理を知っていれば難しくはなかった。
「あなたは……シェフ？」
ダークキュイ……いや、スターゲイジーパイは自分にそう尋ねてくる。
「……そうだ」
「運命的……！　一緒に星空を見上げましょう……！」
スターゲイジーパイはそう言うと、自分の腕を引っ張る。
「ちょ、ちょっと待て……！」
自分は抵抗するが、スターゲイジーパイの力はかなり強い。段々と彼女の方に引きずられていく。
その時、スターゲイジーパイの周囲にいくつものフルーツが現れた。
「シェフから離れろっ……！　このクソ野郎っ！」
その声と同時にフルーツは色とりどりの光に姿を変え、スターゲイジーパイの身体を貫いていく。
「……痛い」
スターゲイジーパイはそう声を上げたが、身体にはあまりダメージを受けていないようだった。
彼女は自分から手を離すと両手を胸のあたりに持っていく。そして身体全体から紫色の光が溢れ出した。
「玉子焼きっ！」
カフェモカの声が飛ぶ。
「はいっ！」
紫色の光が周囲に放たれると同時に、玉子焼きの黄色いバリアの膜が自分を包み込んだ。
自分は元よりダークキュイの攻撃を受けない。他の皆の様子を確

認しようと後ろを振り向くと、どうやら今回の攻撃は玉子焼きのバリアで防げたようだ。
「邪魔……」
自分の攻撃が防がれたのを見て、スターゲイジーパイは何かを指し示すかのようにこちらに向けて指をさす。
すると周囲を飛び交っていた骨の魚が向きを揃え、一斉にこちらへと向かってきた。
「今度は私の出番かなっ」
パルマハムはその言葉と同時に自分の横をすり抜け、先頭に立った。
パルマハムと魚の一群がすれ違う。
『ハムコンボ』っと！」
パルマハムは右手に持ったハムを振り回す。それは適当なようでいて、的確に魚を撃ち落としていった。
ハムを振るごと、魚を落とすごとにパルマハムの動きは加速していく。
そして魚を全て落としたパルマハムは、そのままの勢いでスターゲイジーパイに向かっていった。
「最後の全力スイングっ！」
パルマハムはハムを両手で持ち、全身を使ってそれを振り回す。そしてスターゲイジーパイの腹部にそれを激突させた。
「……っ！」
直撃を受けたスターゲイジーパイの身体は吹っ飛ぶ。比喩表現ではなく、本当に5メートルほどは吹っ飛んだだろう。
「パルマハム！　深追いするな！」
吹っ飛んだスターゲイジーパイにさらなる追撃を加えようとしていたパルマハムを、シャンパンが止める。
「りょーかい」
あっさりとパルマハムは歩みを止める。
吹き飛んだスターゲイジーパイは、しかしさしたるダメージもないようですぐに立ち上がった。

すると、スターゲイジーパイの身体から黒い霧のようなものが立ち昇っていく。
その黒い霧はこちらには向かってこない。スターゲイジーパイの周囲に段々と広がっていく。
その黒い霧はまるで人型を作るように集まっていった。
そして、霧が消えた後、その場には数十匹のダークキュイの姿が現れた。
「ダークキュイを生み出しただと……!?」
シャンパンは信じられないと言った表情で叫ぶ。
「……全く、全てにおいて常識外れのダークキュイですねえ」
カフェモカは両手を上げる仕草をしたあと、手に持ったパイプをくるりと回す。
「前向きに考えましょう。相手の膨大な厨力が分散してくれて、私やシャンパンは戦いやすくなりました」
「……そうだな!」
シャンパンは手に持っていた瓶を激しく何回かに振る。そして瓶の口を敵の一団に向けた。
『勝利の酒』っ!」
シャンパンが叫ぶと同時に、瓶の口から薄い黄色の光が放たれた。
その、まさにシャンパンゴールドのようなきらめきを持った光は放射状に広がり、敵の一団を丸ごと飲み込む。
そして敵に当たったその光は、炭酸の気泡が弾けるように次々と破裂していく。
破裂音が静まったとき、数十匹いたダークキュイは、スターゲイジーパイを除いて全て消滅していた。
「すごい……」
玉子焼きが感嘆の声を漏らす。
今のシャンパンの攻撃はスターゲイジーパイの攻撃と比較しても遜色はないように見えた。圧倒的な強さだ。
しかし、やはりスターゲイジーパイはあまりダメージを受けた様子はない。

スターゲイジーパイの身体が再び紫色の光に包まれていく。
「玉子焼きっ！」
「はいっ！」
カフェモカの指示を待つまでもなく、玉子焼きは身構えていた。
「……『夢境』！」
スターゲイジーパイが前方に紫色の塊をばら撒くと同時に、玉子焼きはバリアを張る。
紫色の塊はバリアに衝突し、次々に消えていった。
「2回目行くよっ！『糖分の対価』！」
バリアが消えると同時に、クレープは溜めた厨力をいっきに放出する。その厨力はスターゲイジーパイの身体を何回も貫いた。
「くぅ……」
クレープの攻撃を受け、スターゲイジーパイはよろめく。表情は苦痛に歪んでいた。
「効いているな……！」
シャンパンはそう声を上げた。彼女の言うとおり、クレープの攻撃であればスターゲイジーパイも無傷ではいられないようだ。
「……怒った」
スターゲイジーパイはそう呟くと、右手を正面につき出す。それは先程骨の魚を飛ばしたときと同じ動きだった。
パルマハムは腰を落として相手の出方を伺う。
スターゲイジーパイの周囲を飛び交っていた骨の魚は、一団となりこちらに向かってきた。
パルマハムは魚の一団目がけて走り出す。先程と同様に全て撃ち落とすつもりなのだろう。
しかし、パルマハムの目前で、魚の一団はまるでパルマハムを避けるように左右に分かれた。
「しまった……！」
魚は2つの集団に分かれ、左右からこちらに向かってくる。
「狙いはクレープと玉子焼きですっ！」
相手の攻撃の意図に気付いたのはカフェモカだった。

カフェモカの言葉どおり、骨の魚はパニーニの後ろで力を溜めているクレープと、最後方の玉子焼きに向かって飛んでくる。
パニーニは魚の動きを見て、クレープの身体を庇うように後ろに下がった。
「……パニーニ!」
パニーニに骨の魚が直撃する。しかしパニーニの身体はその場から一歩も下がることはなかった。
「後方は!?」
パニーニの声に釣られて、自分は後ろを見る。
「玉子焼きっ……!」
玉子焼きは地面にうつ伏せに倒れ込んでいた。自分は慌てて玉子焼きに駆け寄る。
仲間から離れた最後方にいた玉子焼きは、それ故に骨の魚の突撃を全て自分の身体で受けてしまっていた。
「だ、だい……まだ、たたかえ……」
息も絶え絶えに玉子焼きはそう答え、立ち上がろうとする。しかしそう話したところで意識が途切れたのか、それ以上言葉を発することはなかった。
玉子焼きの戦闘力は高くない。もうこの戦いを続けることはできないだろう。
玉子焼きのバリアが使えなくなった以上、逃げるべきだ。……そう考えて声を発しようとした瞬間、自分の視界は紫色一色に染まった。
あえて玉子焼きを狙ったスターゲイジーパイが、相手が倒れた隙を狙わないはずがなかったのだ。
スターゲイジーパイの攻撃を止めるバリアはもう無かった。パニーニの影に隠れていたクレープを除き、全員が紫色の塊の直撃を受け、吹っ飛ぶ。
「カフェモカ! パルマハムっ!」
その場から動かなかったパニーニ、膝をついたシャンパンと異なり、カフェモカとパルマハムは倒れたまま、起き上がろうとしない。
「い、いや……」

ダメージを受けていないクレープが、その場に膝をついた。遠くから見ていても分かるくらい、身体が震えている。
「クレープ、立ちなさい。もう一度攻撃するのよ」
パニーニが振り向かずにそう告げる。
「無理……無理だよ！　あんな奴に勝てるわけない！」
クレープは座り込んだまま、大きく首を振る。
「もう、引ける状況では、ない……戦うしかないんだっ」
シャンパンは自分を奮い立たせるように声を上げた。
仲間がこれだけ倒れてしまった状況では、シャンパンの言うとおりもう逃げることはできない。……倒れた仲間を見捨てるのであれば、話は別だが。
「次の攻撃でみんなやられちゃうだけだよ……」
クレープは泣き言を言いつつも、立ち上がった。戦うしかないことを彼女も理解したようだった。
「私は何があってもあなたの前から動かない。クレープ、あなたは敵の攻撃のことは気にせず、全力で攻撃し続けなさい」
「……分かったよ」
クレープは頷くと、再び厨力を溜め始めた。
「……この」
スターゲイジーパイはクレープが厨力を溜め始めたのを見て、骨の魚をクレープに向けて突撃させる。
「『勝利の酒』……！」
シャンパンはその骨の魚に向けて先程の攻撃を再び放った。シャンパンの厨力を浴び、骨の魚は全てかき消える。
しかし、その直後スターゲイジーパイは、もう一度骨の魚の集団を飛ばしてきた。
「くっ……」
その攻撃を止める術はもうこちらにはない。全ての魚はパニーニの身体に衝突する。しかし、パニーニは宣言どおり一歩もその場から動かなかった。
「いくよっ……！　『糖分の対価』！」

クレープの3回目の攻撃が発動する。
この攻撃で敵が倒れてくれないか。仲間の誰しもがそう願ったに違いない。……しかし、実際は倒せないだろうと誰もが想定していたことも間違いない。
今までのクレープの攻撃は確かにスターゲイジーパイにダメージは与えているようだったが、かと言ってあと一撃で倒せるようにはとても見えなかったからだ。
「うう……」
クレープの厨力の直撃を受け、スターゲイジーパイの身体から黒い霧が漏れ出す。
「厨力が消え始めた……!」
ウィッチが声を上げた。
ダークキュイの身体はあの黒い霧……負の厨力で作られている。つまり身体を保てないほど深刻なダメージを受けたという証拠だ。
「……負けない……!」
始めて、スターゲイジーパイが声を張り上げた。そして彼女の身体を紫色の光が包んでいく。
「うううう……」
クレープは再びを厨力を溜め始めたが、スターゲイジーパイの攻撃よりも先に次の攻撃をすることはできそうにない。
「私は！　何度攻撃を受けようが、戦闘が終わるまでお前を守る！」
パニーニが声を張り上げる。
「……信じろ。クレープ」
「……うん！」
クレープは深く頷くと、目を閉じた。周囲の状況を無視して、より集中を深めたのだろう。
程なく、スターゲイジーパイから紫色の塊が射出される。
「……！」
それは今までのように、四方八方に散らばる攻撃ではなかった。全ての塊が、一直線にクレープを、そしてその前に立ちはだかるパニーニに向けて飛んでくる。

あの塊は一発だけでもキュイの身体が吹き飛ぶほどの威力だ。それが１０、２０とパニーニの身体に衝突していく。
自分はその先の悲惨な光景を想像し、思わず目を逸らしてしまっていた。
衝突音が次々に響き、そして衝突音が止まったあと、周囲は不気味なくらい静かになった。
自分はパニーニの様子を確認しようと、顔を上げる。
……パニーニは宣言どおり、その場から一歩も動いていなかった。
「何度だって！　やってやんよ！」
クレープはそう叫びながら、溜め込んだ厨力を爆発させる。
そしてクレープの厨力がスターゲイジーパイの身体を貫いた。スターゲイジーパイの身体から漏れ出す黒い霧が、さらに激しくなる。
スターゲイジーパイはその攻撃を受けて、まるで戦闘意欲を失ったかのようにこちらから視線を外した。
「……諦めた。またね……シェフ」
その最後の言葉とともに、スターゲイジーパイの姿はその場から消える。
倒したのであれば、もっと大量の黒い霧を放出していてもおかしくない。逃げた、という方が正しいのだろう。
とは言え、どちらにせよ戦闘が終わったことに間違いはなかった。
「パニーニっ……！」
そして、戦闘が終わると同時に、パニーニの身体はその場に崩れ落ちた。

## エウロパ07区―パニーニ―

言葉を話すダークキュイ……スターゲイジーパイとの戦いは終わった。しかし、その戦いの結末は、まだ明らかになってはいない。

スターゲイジーパイの姿が消えたときに、その場に残った負の厨力は僅かなものだった。それは彼女が消失したわけではなく、転送、つまり逃げただけであることを示していた。

とは言え、相当のダメージを与えたことも間違いない。

あのダークキュイに一般の常識が通じるかはさておき、あそこまで厨力にダメージを受けたキュイは、最低でも数週間は回復に務める必要があるそうだ。

少なくとも数週間はエウロパ大陸が再度襲われることはないだろう。

……しかし、その代償はあまりにも大きかった。

スターゲイジーパイとの戦闘の後、パニーニは二度と起き上がることはなかった。

側にいたクレープが慌てて駆け寄った時点で、パニーニの身体からは既に大量の白い霧……正の厨力が吹き出していた。

それはキュイの生態が分からない自分が見ても、一目で致命傷と分かるものだった。

シャンパンに身体を抱え起こされ、パニーニは最後にわずかに口を開いて……しかし、声を発することは無く、身体全体が白い霧となって、消失した。

消失したキュイは、長い時間、とても長い時間をかけて厨力を回復させ、再びキュイとして生まれ変わる。

しかし、人間界から流れ込む厨力が減ってしまった現在では、新しくキュイが生まれることは無い。

だからこそシェフである自分が呼ばれた。キュイディメに来たときウィッチから説明を受けたとおりだ。

それはつまり、シェフである自分ならば。キュイを生み出せる自分なら、消失したパニーニを復活させることもできるのではないか。

自分はそのことを皆に提案して、次元ハウスに戻ってきた。

パニーニを作った経験はある。と言うより、パニーニは本来、具材をパンで挟んだものの総称だ。サンドイッチと違いはない。

しかし近年のパニーニはホットサンド、即ち具材を挟んでから焼いたパンを指すことが多い。

パニーニ……彼女の服にも焦げた網目の模様があった。

今回の目的はあのパニーニを復活させることだ。つまり、彼女の印象と寸分違わぬパニーニを作る必要がある。

具材はハム、チーズ、レタス、ゆで玉子だけにして、調味料は加えない。彼女の高潔な雰囲気とケチャップやマヨネーズは合わない気がしたからだ。

パンについても小麦粉、イースト、食塩だけを材料にして、余計なものは加えないことにする。

パン作りには時間がかかる。特に今回はイーストの量を抑えたため、発酵だけで数時間はかかるだろう。

自分の料理を……パニーニの復活を待っているシャンパンたちには申し訳ないが、だからと言って手を抜くことはしない。

パンを発酵させ、オーブンで焼き上げた頃にはもう日が昇っていた。結局夜通し作業していたことになる。

常温で冷ましたパンにナイフを入れ、その間に用意された具材を挟んでいく。後はこのパンの表面を改めて焼き上げれば、パニーニの完成だ。

「……」

自分の力でパニーニを復活させられるのかどうか。

不安はあったが、しかし自分が彼女に相応しいパニーニを作ることができれば、復活させられるだろうという確信はなぜかあった。

具材を挟んだパンを2枚の焼き網で挟み、オーブンに入れて上に重しを乗せる。

中の具材まで火を通す必要はない。表面に焼き目が付き、香ばしい香りが漂ってきたらそれで完成だ。

オーブンからパンを引き上げ、焼き網を外し、ナイフで斜めにパンを切り分ける。
「……完成だ」
具材として入れたチーズは熱を持ってとろけているが、形は崩れていない。レタスも芯を失ってはいない。自分の意図したとおりの火加減だ。
その時、完成したパニーニからキラキラと光が漏れ出した。それがキュイの生まれる兆しであることは、もう自分にも分かっている。
「パニーニ……」
自分はまだキュイの形になっていない、白い光にそう呼びかける。
光は人の形を作り、そして消える。光の消えた後には、見知った顔のキュイが立っていた。
「……半日ぶりね、シェフ。……まずは礼を述べておくわ。ありがとう」
そのキュイはよく知った声、よく知った口調でそう告げる。
「……礼なんていらないさ」
自分は感無量で、ただそう返事を返すことしかできなかった。

こうして、エウロパ大陸での冒険は無事に幕を閉じた。
シャンパンやパルマハムは復活したパニーニの姿を見て、涙を流して喜んだ。いや、最も喜んでいたのはクレープだった気がする。
復活したパニーニを囲んで、皆で自分が作ったパニーニを食す。やっと平和な時間が戻ってきたことを、自分は実感した。
「……さて、これからのことについて話しましょうか」
和やかな空気が落ち着いたところで、カフェモカが声を上げる。
「言葉を話すダークキュイと遭遇し、私たちはどうにか敵を追い払うことに成功しました。しかし、消滅させることまではできませんでした」
カフェモカは残念そうに首を振る。
「あのダークキュイが次にいつ襲いかかってくるかは分かりません。私たちは情報収集と戦力増強に努め、次の襲来に備えるべきです」

カフェモカのその言葉に、シャンパンは大き頷く。
「シェフ殿の生み出したキュイの力は素晴らしい。このまま仲間のキュイを増やしてもらえれば、あのダークキュイが再び襲ってきても、優勢に戦えるはずだ」
シャンパンの言うとおり、スターゲイジーパイとの戦いでは玉子焼きやクレープの力が大きく役に立った。
そしてまた、あの戦いは戦力不足を痛感する戦いでもあった。新しいキュイを生み出すのは、急務だろう。
「情報収集は私たちに任せてくれ。エウロパ大陸を回って、言葉を話すダークキュイの情報を集めてみよう」
シャンパンはそう提案する。もちろん、こちらにも異論はなかった。
「……シャンパン」
その時、パニーニが神妙な表情で口を開いた。シャンパンはパニーニの方を向いて、笑みをこぼす。
「分かっている。シェフの元に残りたいのだろう？」
「ええ。……申し訳ないけれど」
「謝ることはない。新しい主ができたのは喜ばしいことだ。……正直、羨ましいよ」
シャンパンの言葉は、最後の部分だけ小声になった。
シャンパンの了解を得てから、パニーニはこちらに向きを変える。
「シェフ。玉子焼き。白ご飯。カフェモカ。クレープ。あなたたちが良いのなら、私を仲間に入れてほしい」
「パニーニっ……！」
クレープが喜びを隠しきれない表情で声を上げる。
「もちろんですぅ！」
玉子焼きも大きな声でパニーニの言葉に賛同した。
「……パニーニは、それでいいのか？」
自分はパニーニの心境が掴めず、そう尋ねる。パニーニのことを詳しく知っているわけではないが、彼女とシャンパンの間には深い絆があったように見えたからだ。

「今の私はシェフの料理から生み出されたキュイ。シェフに忠誠を誓うのが当然のことよ」
パニーニは自分の疑問にそう答える。
「あの～」
ウィッチがおずおずと手を上げる。
「私の名前が呼ばれなかったんだけど～」
ウィッチがそう尋ねると、パニーニは目を閉じて首を横に振る。
「あなたはシェフでも、シェフが生み出したキュイでもないでしょう？」
「シェフを呼んだのはわ～た～し～！」
ウィッチは頬をふくらませる。しかしパニーニはそれ以上ウィッチを相手にしなかった。
「シェフが生み出したキュイではない私には、いささかコメントに困る話題ですが……私も引き続きシェフ様にお供したいと考えています」
カフェモカは改めてそう告げる。
「私たちの役割は戦力増強。シェフ様にキュイを生み出してもらうことはもちろん、今の私たちもより成長する必要があります」
「クレープ、玉子焼き、白ご飯。あなたたちは強い厨力を持っているけれど、実戦経験に乏しいからうまく力を使えていないわ。次の戦いまでに戦闘経験を積みましょう」
カフェモカの言葉に続けて、パニーニはそう提案する。
「戦闘経験……具体的に何をするんだ？」
疑問に思って自分はそう尋ねる。
「仲間を2チームに分けてチーム同士で戦うのが一番有効でしょうね。普段の仲間を敵として見ることで学ぶことも多いわ」
パニーニはそう答える。いわゆる武道の稽古のようなことをするのだろうか。
しかしカフェモカやクレープのように厨力を爆発させる攻撃は、稽古だからといって手加減することはできるのだろうか？
「……危なくないのか？」

「ああ。私たちキュイはダークキュイの攻撃以外ではダメージを受けません。正の厨力に正の厨力をぶつけても、見た目こそ怪我はしますが数分で元通りになります」
　自分の不安にカフェモカがそう答えてくれる。やはりキュイの生態にはまだまだ謎が多い。
「さて、それでは方針も固まったようだ。私たちは一旦シャンパーニュに戻る。何か情報が手に入ったらすぐに連絡しよう」
　シャンパンはそう告げて立ち上がる。それに合わせてパルマハムも腰を上げた。
「それじゃまたね。……パニーニ！　たまには遊びに来てよ！」
「……ええ。もちろん」
　パルマハムの言葉に、パニーニは少し寂しげに頷いた。

　シャンパンとパルマハムがエウロパ大陸に戻り、次元ハウスは静けさを取り戻した。
　時刻としては昼下がりだが、夜通しパニーニを作っていた自分としては、既に眠気が限界だ。
　他の皆も寝ずに自分の料理を待っていたのだろう、今は次元ハウスのあちこちで寝息を立てている。
　唯一、生まれたばかりのパニーニは疲労がないのだろう、次元ハウスの片隅で本を広げていた。
「パニーニ。少しいいか？」
　眠気はあったが、それよりも今はパニーニと話すべきだった。
「何か用？」
　パニーニは本を閉じて、こちらを見る。
「……シャンパーニュに戻らなくて、本当に良かったのか？」
　自分のその問いかけに、パニーニは少しの間沈黙する。そして大きくため息を吐いた。
「今でこそダークキュイは珍しい存在ではなくなったけど、ダークキュイが現れた直後はキュイディメ中が大混乱に陥ったわ」
　パニーニは自分の問には答えず、昔のことを話し始める。

「キュイには人間のように寿命がない。ダークキュイの襲来によって、キュイは初めて消滅……死の概念を知ったの。怖かった……誰もが底知れない恐怖を覚えた」
パニーニの話す混乱、恐怖は自分にもよく実感できた。
生まれたときから死がつきまとっている人間であっても、初めて死に対面したときは大きな恐怖を感じるものだ。
その恐怖を世界中の全員が同時に感じたら……それはパニックになるだろう。
「そんな最中、ダークキュイと戦うことを提唱して、実際にダークキュイを打ち破っていったキュイがいたわ。彼女は全てのキュイに希望を与えた」
「……シャンパンのことか？」
自分がそう尋ねると、パニーニは頷いた。
「私もシャンパンに救われた一人よ。シャンパンがいなかったら、ダークキュイと戦うなんて考えることもできなかった。……そして私はシャンパンに忠誠を誓い、彼女と共に戦うことにした」
そこまで話すと、パニーニはもう一度ため息をつく。
「今の話を聞いて、シェフはシャンパンに忠誠を誓える？」
「え？」
予想外の質問に、自分は返答に困る。
「素晴らしい行動だとは思うし、協力したいとも思うが……」
「シャンパンのために自分の人生を捧げられるかと言えば、捧げられないでしょう？」
自分の答えを最後まで聞かず、パニーニはそう続ける。しかし、自分の答えもパニーニの言葉とずれてはいなかった。
「……私も同じ気持ちなのよ」
パニーニはそう呟くと、苦々しく笑った。
「私は前のパニーニの記憶を受け継いでいるけれど……新しく生まれた、別のパニーニなの。同じ情報を持っていても、感情まで同じにすることはできないわ」
「……そうなのか」

パニーニのその言葉は、自分にとって少なからずショックだった。
パニーニを復活させたと喜んでいたが、結局あのパニーニを助けることはできなかったことになる。
「シャンパンもパルマハムも多くのキュイの消滅に触れてきた……今の私が前のパニーニではないことも、察していたはずよ」
そう言うとパニーニは、寂しそうな目で空を見つめる。
その表情はパニーニの説明とは裏腹に、まだシャンパンへの感情が残っているのではないかと想像させるものだった。
「……完全に同じパニーニではなくとも。新しいパニーニとして、シャンパンたちと改めて関係を作っていく道もあるんじゃないか？」
「そうね。シャンパンやパルマハムとの記憶は残っている。楽しかったことも思い出せる……。シャンパーニュに戻っても、うまくやっていけたとは思うわ」
パニーニは目を閉じて、情景を想像するようにして呟く。そして目を開けて、さらに告げた。
「でも、私はシェフに生み出されたキュイ。これからはシェフに忠誠を誓います」
パニーニは自分の目を見て、はっきりとそう告げる。
「その……確かに今のパニーニを生み出したのは自分かもしれない。でも、だからといって生みの親に従わなければならないって決まりは、ないんじゃないか？」
自分がそう答えると、パニーニは沈黙し、その後に今日一番の大きなため息をついた。
「シェフ……。あなたは自分に懐いている玉子焼きや白ご飯の姿を見て、自分が生みの親だから仕方なく付き従っているんだ、とでも考えているんですか？」
「い、いや、そんなことは……」
「……私も同じ気持ちなのよ」
パニーニは小さな声でそう言うと、立ち上がった。
「お疲れでしょう、シェフ。私は少し外を散歩しますから、ゆっくり休んでください」

そしてパニーニは、こちらの返答を待たずに次元ハウスの外に出ていった。

## メリケン大陸
## 箸休め―サーロインステーキ―

エウロパ大陸での冒険が終わり、当面の目的は新たなキュイを生み出すこととなった。

とは言え、やることはいつもと同じように料理を作るだけだ。

キュイを生み出すためだけに四六時中料理を作るのは料理への冒涜だろう。むしろダークキュイが発生しそうだ。

エウロパ大陸での戦いから一週間が過ぎたが、新しく生まれたキュイは1人だけだった。

「お兄ちゃん。何してるの？」

自分の背中に声がかかる。振り向くとそこにはこげ茶色で網目模様の服を着ている少女が立っていた。

彼女はサーロインステーキのキュイで、つい3日前に仲間に加わった。

自分のことをお兄ちゃんと呼びたいと言ってきたので、断る理由もなくそのままにしている。

玉子焼きや白ご飯のような見た目が幼いキュイは元から妹のような存在として見てきたので、お兄ちゃん呼びされることにもあまり抵抗はない。

「……ごはん？」

サーロインステーキは調理台に置いてあった、どろりとした白米を見てそう尋ねる。

「いや、米麹だよ」

「こめこうじ？」

「う～ん、日本で食品を発酵させる時に使うんだ。今回はこれでお酒を作ろうと思ってる」

いま自分が挑戦しているのは日本酒の醸造だ。

シャンパンを見て、酒のキュイは強いのではないかと思ったことと、日本では法令の都合上作れなかった酒類に挑戦してみたかったか

らだ。
「お酒かあ。さっちゃんは飲めないなあ」
「さっちゃんはお酒を飲んだことはあるのか？」
サーロインステーキのことはさっちゃんと呼ぶ。それがサーロインステーキ本人の希望だった。
「料理だった頃は焼き上がる前によくお酒をかけられてたよ」
「あ、ああ。フランベか」
フライパンに酒を少量入れて火柱を立たせる技法、フランベはステーキを焼く際にはお馴染みの技法だ。
「酒をかけられるのは嫌だったのか？」
「ううん。ふわあってして、いい気持ちだったよ。今は子どもだから飲めないけど、大人になったら飲んでみたいな」
「そ、そうか」
どうにも返答に困る会話が続く。
キュイの年齢は未だによくわからない。古く歴史のある料理のキュイほど年齢が高いようだが、正確なところはこうして本人に確認するしかなかった。
「さっちゃんも何か手伝おうか？」
「そうだな。料理は終わってしまったから、洗い物を頼んでもいいか？」
「はーい！」
サーロインステーキは元気よく返事をすると洗い場に向かう。
彼女はパルマハムと同じ主菜のキュイだ。戦闘のときは手に持ったフォークで敵を叩きつける。
訓練の様子を見ている限り、動きは危なっかしいがスピードとパワーは他のキュイとは段違いだ。心強い味方になってくれるだろう。
しかし、サーロインステーキ1人が増えたところで、あのスターゲイジーパイに勝てるようになるとも思えなかった。
さらなる仲間が必要だが、新たなキュイはなかなか生まれてこない。
（しかし、あれは何だったのだろう……）

自分は４日前のことを思い出す。普通の食パンを焼いたらキュイが生まれるときのように食パンが光りだしたのだ。
しかし結局、その食パンからキュイが生まれることはなかった。あの現象は何なのか、ウィッチに聞いて見たが心当たりはないようだった。

昼食が終わってから夕暮れまでの間、キュイたちは戦闘の訓練をする。以前パニーニが提案したとおり、キュイを２チームに分け実戦さながらに戦っていた。
自分も用がない時は訓練の様子を見学するが、今日は別にやりたいことがあった。
「……よし」
自分は準備を終えると、次元ハウスの書斎にいたウィッチに声をかける。
「ウィッチ。夕食にはまだ早いが、料理を作った。もし良ければ一緒に食べないか？」
「食べる～」
ウィッチは即答すると、自分より先に食堂の方に歩いていった。自分もウィッチの背中を追いかける。
ウィッチは食堂に着くと周囲を見渡して、首を傾げた。
「他のみんなも呼んでこようか？」
「いや、今日の料理はウィッチと２人で食べようと思っている」
「ええ～!?」
自分がそう言うと、ウィッチは大袈裟に驚いた。
「そ、それは困るなあ。私もシェフのことは嫌いじゃないけど～」
「……ああ。すまないがロマンチックな話では全く無い。この料理を見れば分かるだろう」
自分はテーブルの上に先程焼き上げた料理を乗せる。
「うわ、グロテスク～」
ウィッチはそれを見てそんな声を上げる。
その料理はきつね色に焼き上がったパイだった。しかし普通のパ

イとは違って、パイの中から外に顔を出すように、いくつもの魚の頭が飾り付けられている。
「スターゲイジーパイだ」
自分はその料理の名称をウィッチに告げる。
「ああ……これがそうなんだ～」
ウィッチはそのパイをまじまじと見つめた。
ウィッチが見守る中、自分はパイにナイフを入れる。パイを四等分し、その内の一片を小皿に盛り付ける。
「抵抗が無ければ、食べてみてくれ」
自分はその小皿をウィッチの前に差し出した。
「いただきま～す」
ウィッチは先程グロテスクと呼んだ料理を、全く気にする素振りもなく口に運んだ。
「おいしい！」
「そうか、それは良かった」
自分も別の一片を小皿に盛り付け、ウィッチの隣の椅子に座り、パイを口に運ぶ。
魚油の香りとパイ生地の香ばしい香りが口に広がった。中身は普通の魚のパイと同じだ。見た目を気にしなければ、誰でも美味しく食べられる料理だろう。
「でも、キュイたちは食べたがらないかもね～……」
ウィッチはパイを運びつつ、そんな言葉を漏らす。
「やはりそうか……」
自分がウィッチだけを呼んだのも、他のキュイたちが嫌がることを考慮したからだ。
それはこのパイの見た目が悪いからといった理由ではない。
スターゲイジーパイはそれこそ先日、キュイたちと激しい戦いを繰り広げた相手である。敵だった相手の料理を目にしたら、嫌でも辛かった戦いの記憶が蘇ってしまうだろう。
またいずれ戦いが始まるにしろ、今の平穏を自分から崩したくはなかった。

「なあウィッチ。スターゲイジーパイ……あのダークキュイは、本当にダークキュイなのか？」
　自分は同様にキュイたちの前では口に出せなかった疑問を、ウィッチに尋ねてみることにした。
「ダークキュイなのかって言われたら、ダークキュイだとしか言えないよ～」
　ウィッチは軽い口調でそう答える。
「しかし……他のダークキュイと違い、あのキュイは会話もしていたし、こうして元となった料理も存在する」
「う～ん」
　ウィッチはパイを食べる手を止める。
「キュイを攻撃して消滅させた。それだけでもうダークキュイであることに疑いはないの」
　先程よりは真面目な口調で、ウィッチは説明する。
「キュイを消滅させる力……負の厨力を持っているキュイのことを、ダークキュイと呼んでいるんだから」
「いや、それは分かるが……」
　自分の質問の意図とウィッチの答えがずれていたので、自分は改めて質問する。
「ダークキュイだとしても。他のダークキュイとは違って、意思疎通を図ることはできると思うんだが」
「それは、私もそう思うよ」
　ウィッチは頷くと、再びパイに手を伸ばす。
「それなら、話し合えば戦わずにすむ可能性もあるんじゃないか？」
「う～ん。無理かな」
　ウィッチは少し考えてから、そう答える。
「キュイの力の源である正の厨力と、ダークキュイの力の源である負の厨力は互いに打ち消し合うの。同じ空間に存在しているだけで、既に戦っているのと同じ」
　ウィッチはカップに水差しから水を注ぐ。
「グラスの中にお湯と氷を入れて、同じ水なんだから戦うなって言っ

ているのと同じかな。キュイとダークキュイが共存しようとしたら、たぶんどちらの存在も消えてなくなる」
「……そうなのか」
ウィッチの例え話は、キュイとダークキュイとの間の溝が自分が思うより遥かに深いことを示していた。
「おかわりしていい？」
「あ、ああ」
自分はパイをもう一切れ、ウィッチの皿に乗せた。
「シェフはどうして……このパイを作ろうと思ったの？」
今度はウィッチがそう質問してくる。
「……スターゲイジーパイは見た目が独特で、あまり良い印象を持っていない人も多い料理だ。でも、悪い料理ではない。立派な料理だ。それを示したかった」
自分の感情をうまく言葉にするのは難しかった。
スターゲイジーパイという料理そのものに問題があってダークキュイが生まれたわけではない。料理人として、そこだけは自身の料理で証明したかった。
「どんな料理にも変わらぬ愛情を注ぐ。シェフのそういうところ、私は好きだな～」
「あ、ああ。ありがとう」
ウィッチに自分の感情を肯定されることで、自分は少し気が楽になった。
「でも、あのダークキュイ……スターゲイジーパイを含めた全ての料理、全てのキュイを助けようとすると、逆に全てが消えてなくなってしまうかもしれない。それだけは忘れないでほしいな～」
「……肝に命じておくよ」
ウィッチの言葉に、自分は深く頷いた。

キュイたちの訓練が終わると夕食の時間だ。人に限らず、キュイたちも激しい運動のあとはお腹が空くようだ。
最近はかなり夕食の量を増やしているが、それでも毎回綺麗さっぱ

り完食してくれる。
夕食のあと、就寝までの間はキュイたちは思い思いに過ごす。一人の時間を楽しむキュイも、他のキュイと雑談に興じるキュイもいる。
自分は夕食の片付けをしながらそれとなくキュイたちの様子を伺っていたが、ここ数日は白ご飯の姿を見かけないのが気になっていた。
少し思い当たるふしがあり、その日自分は夕食の片付けを終えたあと、キュイたちの訓練場に向かった。
「やっぱり、ここにいたか」
自分は訓練場の片隅の石段に座っていた白ご飯の姿を見つけ、声をかける。
「あ、シェフさん」
白ご飯の呼吸は整っておらず、顔も紅潮している。それは白ご飯が直前まで激しい運動をしていたことを物語っていた。
「一人で訓練していたのか？」
自分がそう尋ねると、白ご飯はこくりと頷いた。
「私は、他のキュイより強くないから。他のキュイより、もっと頑張らなくちゃいけないんです」
「……そうか」
自分は白ご飯の隣に座る。
キュイは料理の種類によって得意分野が異なる。主食である白ご飯は他のキュイよりも耐久性に優れていた。
しかし、同じ主食であるパニーニが仲間に加わった。白ご飯にとっては自分と同じ長所を持つ仲間ができたことになる。
そして、キュイたちの訓練の様子を見る限りでは、仕方のないことではあるが、やはり長年の戦闘経験を持つパニーニの方が、白ご飯よりもあらゆる面で強かった。
白ご飯がそのことで気を病むのも無理はない。
いや、しかし白ご飯はそのようなことで思い詰める性格には思えなかった。
「パニーニのことを……気にしているのか？」

自分はどちらにも取れる表現で尋ねた。
「……はい。私がもっと強ければ……パニーニさんが倒れることも、そしてみんなが傷付くこともなかった」
白ご飯はそう答える。やはり、白ご飯の悩みはもうひとつの方だった。
スターゲイジーパイとの戦いに、唯一白ご飯だけは参加していない。その前の戦いでの損傷が激しかったからだ。
もう一人、敵の攻撃に耐えられる盾のような役割を持てるキュイがいれば。パニーニが一人で全ての攻撃を引き受ける必要はなかった。
「……そうだな。確かに白ご飯がもっと強かったら、結果は変わっていたかもしれない。でも、それは白ご飯だけじゃなくて、みんなに言えることだ」
「それは……はい」
白ご飯は少し躊躇したあと、頷いた。
「だからみんなで訓練してるんだからな」
「はい。でも……私は他のキュイより弱いから、もっと頑張らないといけないんです」
「ちょっと待った」
自分は白ご飯の言葉を遮る。
「頑張らないといけない、なのか。頑張りたい、なのか。白ご飯の気持ちはどっちなんだ？」
「え……」
自分の問いかけに白ご飯は言葉に詰まった。
「強くならないといけない、と思っているなら。白ご飯が一人でそこまで背負う必要はない。みんなで頑張っていけばそれでいいんだ」
あのパニーニであっても、一人では限界があったのだ。どんなに頑張ろうとも、一人で到達できる地点は決して高くない。
「強くなりたい。そう思っているなら、応援するよ」
「……」
白ご飯は沈黙したまま、自分の言葉を反芻する。
「私は……強くなりたいです」

「分かった。それなら無理のない範囲で、これからも頑張れよ」
「はい」
白ご飯は素直に頷いた。
やる気があるのであれば、もちろん自主的な訓練を止めるつもりはない。ただもう一言、言っておくべきことがあった。
「白ご飯が強くなりたい理由は……仲間を守りたいからだろ？」
「……はい」
「その仲間の玉子焼きが、最近白ご飯が遊んでくれなくてさみしいって言ってたぞ」
「……え」
白ご飯は自分の言葉に目を丸くする。
「仲間を大切に思うなら、仲間と一緒に過ごす時間を作るのも、大切なことじゃないか？」
「……そうですね。ごめんなさい、気をつけます」
白ご飯はそう言うと、ばつが悪そうに笑ってみせた。
「それじゃ、今日はもう次元ハウスに戻るか？」
「はい。今日は玉子焼きと、寝るまでゆっくりお話します」
自分は白ご飯のその言葉に安心して、白ご飯とともに次元ハウスに戻った。

## メリケン01区―フライドポテト―

昼食の準備をしていた自分の耳に、低く鈍い機械の駆動音が微かに響いた。
「郵便船か」
自分は湯を沸かしていた鍋の火を止め、郵便船を出迎える準備をする。
次元ハウスには倉庫や農園に大量の食材が蓄えられていて、外部から仕入れを行わなくとも料理の材料に困ることはなかった。
とは言え、古今東西あらゆる食材が保管されているわけでもない。郵便船による仕入れは、次元ハウスにはなくてはならないものだった。
「こんにちは、シェフ」
いつもの静かな声で、郵便船の配達人、ユウがこちらに挨拶する。
「こんにちは……そちらの方は？」
ユウの隣に金髪で赤い服、黒いスカートの少女が立っている。その少女はこちらが視線を向けると、1歩前に出た。
「こんにちは～。メリケン大陸から来たフライドポテトのキュイです。よろしく～」
フライドポテトと名乗った少女はそう挨拶すると、手に持っていた巨大なきつね色の棒を軽く振った。
その棒の先は赤い色で染められている。おそらくフライドポテトを模しているのだろう。
「あ、ああ。よろしく」
とりあえず自分も挨拶を返す。
「彼女がシェフたちに話したいことがあるというから、郵便船に乗せてきた。言葉を話すダークキュイについての話」
「なんだって……!?」
その話を聞いて、胸の鼓動が一気に強くなった。
「私たちのメリケン大陸が、ダーケスト……言葉を話すダークキュイに襲われているの！　シェフたちの力を貸して！」

フライドポテトはそう言うと、深々と頭を下げる。
こうして平穏な日々は終わりを告げ、新たな戦いが始まった。

自分はウィッチとキュイたちを食堂に集めた。
フライドポテトの話はまだ詳しく聞いていないが、全員で聞くべき話だと考えたからだ。
「え～、それでは……おほん。メリケン大陸の現状について説明します」
キュイたち全員の視線を受け、フライドポテトは幾分緊張した面持ちになる。
「2か月くらい前に、メリケン大陸の小さな街がダークキュイに襲われたんだ。まあ、エウロパと比べるとメリケンはダークキュイの数が多いから、街への襲撃はそこまで珍しいことじゃない」
「メリケン大陸はダークキュイの数が多いのか？」
自分はフライドポテトの緊張をほぐそうと、簡単な質問をする。
「うん。ダークキュイと戦えるキュイの数が少なくて、退治しきれていないんだ」
「メリケン大陸……人間界のアメリカは歴史の浅い国です。食文化が成熟していないからか、昔からメリケン大陸ではあまりキュイは生まれません」
フライドポテトの言葉にカフェモカがそう付け加える。
「ダークキュイの襲撃は珍しくない。ただ……普通のキュイのような格好をしたダークキュイが、他のダークキュイに命令して街を襲わせていたって目撃情報があったんだ」
「……！　それは……」
カフェモカは目を見開く。その目撃情報が本当なら、その命令していたダークキュイも、スターゲイジーパイのような特殊なダークキュイである可能性が高い。
「それ以降も何回か街がダークキュイに襲われた。どの襲撃でも、言葉を話し、ダークキュイを操る特殊なダークキュイの姿が目撃された。私はそのダークキュイを『ダーケスト』と名付け、後を追うこと

にしたの」
「『ダーケスト』？」
「あ、いや……呼び名があった方が分かりやすいと思って、適当に付けてみたんだ」
「『ダーケスト』……悪の親玉っぽい感じでいいんじゃない～？」
　ウィッチがその名称について肯定の声を上げる。
「ネーミングセンスはともかく……私たちがエウロパ大陸で戦ったダークキュイと似た性質を持ったダークキュイが新たに現れたのであれば、名前を付けた方が話しやすいでしょう」
　カフェモカがそう付け加えた。確かに、普通のダークキュイとは違う部分が多すぎるあのキュイのことは、別の名称で呼ぶ方が混乱はなさそうだ。
「私はメリケン大陸中を追いかけ回し、ついにそのダーケストを発見したの。でも……全く相手にならなかった」
　フライドポテトは肩を落とす。
「そのダーケストの特徴を詳しく教えてくれないか？」
「銀髪に黒い上着と黒いスカート。頭にハンバーガーのパンズみたいな、円形の金属の塊を付けているのが一番の特徴かな」
「銀髪に黒い服と言うのは、あのダークキュイと似ていますけど……」
　クレープは首を捻る。スターゲイジーパイと似た服装ではあるが、彼女は頭に金属の塊を付けてはいなかった。
「自分のようなダークキュイは他にもいるって言ってたから、シェフたちが倒したダーケストとは別個体だと思うよ」
「またさらりと、頭の痛くなる新情報が飛び出しましたね……」
　カフェモカは頭を抱える。他にもいる、と言う言葉は確かに重い。
　それはスターゲイジーパイとメリケンのダーケストだけではなく、他にもダーケストが存在している可能性を示しているからだ。
「ちなみに、そのダーケストはどんなこと話してたの～？」
「むっか～……」
　ウィッチの質問に、フライドポテトはなぜか顔をしかめる。
「フライドポテトのことを散々バカにして。今思い出してもイライラ

する～！」
　フライドポテトは怒り心頭といった面持ちで、手に持ったフライドポテトをぶんぶんと振る。
「……ともかく。私たちが戦ったダーケストと、メリケンのダーケストは別個体の可能性が高い」
　パニーニがそう話をまとめた。
　スターゲイジーパイがフライドポテトのことをバカにしている光景も全く想像できない。パニーニの言うとおり、別の存在なのだろう。
　いずれにせよ、メリケン大陸がそのダーケストに襲われている以上、放っておくわけにはいかなかった。

　フライドポテトの話が終わり、続いてカフェモカが皆の前に立つ。
「それではメリケン大陸に現れた新しいダーケストについて、私たちはどう対応すべきかを考えましょう」
　カフェモカはそう言うと、軽く咳払いをした。
「まず最初に考えるべきことは、私たちはメリケン大陸に向かうべきか否かです」
「ええっ!?」
　フライドポテトが声を上げる。メリケン大陸のキュイであるフライドポテトにとっては聞き捨てならない問いであったろう。
　しかし、それは確かに検討しなければならない問題であった。
「スターゲイジーパイ……エウロパのダーケストが、また活動を再開する可能性も少なくはない」
　自分がそう告げると、カフェモカは頷いた。
「スターゲイジーパイが再びエウロパ大陸に現れたら、シャンパンたちと共同して戦う約束だったはずです。私たちがメリケン大陸に向かってしまったら、その約束を果たせません」
「そんな……」
　フライドポテトの顔が曇る。
「愚問ね、カフェモカ。現れるか分からないダーケストの存在を気に

して、現に今、街を襲っているダーケストを放置するですって？
……馬鹿馬鹿しい」
カフェモカの言葉を受けて、真っ先にパニーニはそう言ってみせる。
エウロパと、そしてシャンパンと誰よりも関わりが深いパニーニが、そう言ったのだ。
「あなたの胆力には感動すら覚えますよ、パニーニ」
カフェモカは感嘆の声を上げる。
パニーニが感情に囚われない正論を述べたことで、特に議論になることもなく全員の意見はあっさりまとまった。
「では私たちは、今後はメリケン大陸のダーケスト退治を最優先目標にして行動することとしましょう」
「あ……ありがとう」
フライドポテトはその言葉を聞いて皆に頭を下げる。
「次の問題はメリケン大陸を襲っているダーケストを倒せるだけの戦力をどう用意するか、です」
「訓練で皆の力も伸び、サーロインステーキという新しい仲間も加わった。……それでも、まだ戦力は不足しているでしょう」
カフェモカの言葉に、パニーニがそう付け加える。
スターゲイジーパイと死闘を繰り広げた時と違って、今はシャンパンとパルマハムがいない。
その代わりに白ご飯が戦線に復帰し、サーロインステーキが新たに加わったが、楽観的に見積もっても戦力が増えたとは言えなかった。
「あの～。もちろんメリケン大陸のキュイも一緒に戦うよ」
暗くなった空気を吹き飛ばすように、フライドポテトは声を上げた。
「カリフォルニアにファストフードの仲間が集まってる。少なくともそこのみんなは力を貸してくれるよ」
「ファストフードの仲間……何人くらいいるんだ？」
「複数のダークキュイを相手にできるくらい強いキュイは４人。主食が１人、デザートが２人、そして前菜、つまり私が１人」

自分の質問にフライドポテトはそう答える。
「デザートが2人いるのはありがたいですね」
カフェモカは喜びの声を上げた。
ダーケストのような単体の相手にはデザートの攻撃が最も有効だ。そのデザートが2人も仲間に加わってくれると言うのであれば、実に心強い。
「それだけ仲間が増えれば……勝てるんじゃない？」
クレープが少しだけ不安そうに、しかし強い声でそう言った。
「全くです。まずはそのファストフードの皆様と合流すべきでしょう。異論はありませんか？」
カフェモカはそう尋ねると、周囲を一瞥する。もちろん、その言葉に反論する者はいなかった。
「それではフライドポテト、案内を頼めますか」
「うん！」
フライドポテトは元気よく返事をする。
「ところで、ここらかメリケン大陸にはどうやって行くの？　私は郵便船で来たんだけど……」
フライドポテトは会議の輪から外れた場所で1人コーヒーを飲んでいた、郵便線の持主であるユウに視線をやった。
「私が送り届けても構いませんが。おそらく、そこの魔女の転送の方が速いですよ」
ユウは視線の意図を察してそう答える。
「カリフォルニアなら次元ハウスと転送陣を繋いであるから、今すぐにでも移動できるよ～」
ウィッチは普段通りの軽い口調でそう答えた。
「じゃあ、お昼を食べたら出発するか」
「はーい」
玉子焼きが元気よく手を上げる。
こうして、今度はメリケン大陸での冒険が始まることになった。

# メリケン０２区―Ｄ・バーガーカン―

転送の終わった自分の目に飛び込んできたのは、まずは一面の荒野だった。

「ここが……メリケン大陸なのか？」

思わずそんな言葉が口に出てしまう。

カリフォルニア州と言えば世界有数の大都市圏だ。しかし今正面に広がっているのは、見渡す限りの荒野と岩肌、そしてまばらに点在する木製の小屋だけである。

そう、イメージとしては西部劇の世界に近い雰囲気だった。いや、西部劇の舞台もアメリカ西部なのだから、ある意味では間違っていないが……。

「メリケン大陸……シェフの世界でのアメリカは食文化の歴史が浅いから～。キュイディメの世界では後進国なんだよ」

ウィッチがそう説明してくれる。

「これでもメリケン大陸の中では栄えている街なんだよ」

「……そうなのか」

自分は改めて周囲を見渡す。木製の小屋と小屋の間は百メートルは離れているだろう。

そしてその小屋が荒野のあちこちに二十、三十程度点在している。正直に言ってしまえば、エウロパ大陸で見たどの街よりも規模は小さかった。

「メリケン大陸にようこそ～」

その時、突然どこからか声が響いた。

周囲を見渡すと、自分たちの眼前にいつの間にか不思議な楕円形の物体が浮かんでいる。その黒い物体は、物体と言うよりは空気のような掴みどころのない雰囲気だった。

そしてそこから、一人の女性が現れた。

「シェフ、そして次元の魔女。待ってたわ～」

その女性はこちらに親しげに話しかけてくる。髪の色は銀髪、緑の髪飾りを付けていて……頭に２つの巨大な金属の塊をぶら下げてい

た。
「このっ……！」
フライドポテトが突然声を上げ、手に持っていたフライドポテトの棒をその女性に向けて投げつける。
フライドポテトはまるで投げ槍のように高速で銀髪の女性目掛けて飛んでいった。
しかし、フライドポテトが届く直前、銀髪の女性は頭の金属の塊を振り回す。フライドポテトはその金属の塊に衝突し、あえなく吹き飛ばされた。
「ノーノー。ポテトなんかじゃハンバーガーには勝てないって、この前教えたじゃなーい？」
銀髪の女性は大げさに両手を上げてみせる。
「こいつだよっ……こいつがメリケン大陸のダーケストだ！」
「ええっ!?」
フライドポテトのその言葉を聞いて、思わず自分は数歩後ずさる。
「みんな、下がれっ！」
パニーニは自分とは逆に1歩前に出て、他の皆に後ろに下がるよう指示を出す。
「ノーノーノー！　ミーは今日戦いに来たわけじゃないのよ～。無駄な争いは止めましょ～」
「……どう言うことです？」
「戦いじゃなくて話し合いをしたいの。ともかく話を聞いてくれない？」
銀髪の女性……メリケンのダーケストはそう提案してきた。
「シェフ。クレープ。玉子焼き。どうすべきですか？」
「……そうだな。まずは話を聞いてみよう」
カフェモカの質問に自分はそう答える。
カフェモカはなぜ自分の他にクレープと玉子焼きの名を呼んだのか。それは、油断せずにいつでも攻撃する、バリアを張る準備を整えておけと言いたかったのだろう。
クレープはそれを察知して、軽く頷いた。後ろを振り向くと、玉子

焼きも小さく頷いて見せる。
「まずは自己紹介。ミーの名前はバーガーカン。そこのポテトちゃんの言葉を借りるなら、スターゲイジーパイと同じ、ダーケストよ～」
「バーガーカン？」
「缶詰に入ったハンバーガーのこと。ファストフードの王様を最も優れた保管方法で処理した、ファストかつエターナルな料理よ～」
メリケンのダーケストは自身のバーガーカンのことを説明する。
缶詰料理というのは数多い。パンの缶詰は保存食として世界中に広まっているし、ハンバーガーの缶詰と言うのも存在はしている。
「私はハンバーガーがファストフードの王様だとは認めてないけどね！」
フライドポテトがそんな声を上げる。
「そうね。ホットドッグ、フライドチキン、ドーナツ、サンドイッチ。ファストフードのライバルは多い。そっちのパニーニやクレープもファストフードとも言えるわ」
バーガーカンは腕組みをして考え込む姿勢を見せた。
「でもフライドポテトちゃんはどこでも脇役だから～。ざんね～ん」
「むっか～！」
フライドポテトは手に持っていたフライドポテトを振り上げる。
「まあまあ、落ち着いて」
ウィッチが止めに入った。確かに、話が脱線しすぎだ。
「ミーたちをキュイのカテゴリーに当てはめるのは無理があるけど、ミーは主食のキュイよ。スターゲイジーパイと違って並外れた攻撃力はないから安心して？」
バーガーカンはそう言いつつウインクしてくる。
「嘘では……ないと思う」
バーガーカンの説明に、フライドポテトが肯定の言葉を返した。
「……そうなのですか？」
「このダーケストは何回も街を襲ってきたけど、いつも攻撃は召喚したダークキュイ任せだった」
自分がなぜそう考えたかを、フライドポテトは説明する。

「だから、こいつはダークキュイを召喚する能力があるだけで、直接戦えば勝てるんじゃないかって……そう思ったんだ」
「それでミーを探し出して、フライドポテトで攻撃したけど、この合金のパンズには傷ひとつつけられなかったのよね～」
バーガーカンは頭の金属の塊を手で持ち、上下に揺らしてみせる。
その円形の金属が何か分からなかったが、なるほど、言われてみれば確かにハンバーガーのパンズのようだった。
「このパンズはどんな攻撃でも貫けない。スターゲイジーパイに集中攻撃させてもほぼ無傷だったわ～」
「……それほどですか」
カフェモカは驚きの色が隠せない表情でそう呟いた。
「その代わり攻撃力はないから、ダークキュイを召喚して代わりに戦ってもらうのよ」
「召喚って、どうやってるの？」
ウィッチが首を傾げる。
「次元の魔女らしい質問ね～。正確には召喚ではなく、周囲の負の厨力を集めて０からダークキュイを作り出しているの。自分の厨力から作り出すこともできるわ」
「つまり、負の厨力が多い場所ほどダークキュイを多く召喚できるということですか？」
カフェモカの質問に、バーガーカンは素直に頷いた。
「そう。ここカリフォルニアはメリケン大陸の中では負の厨力が弱い場所。ユーたちを倒せるほどのダークキュイは召喚できないわ～」
「それはつまり……この場で戦えば私たちが勝てる。と言うことか？」
パニーニはバーガーカンの方に一歩足を進める。
「ワオ！好戦的な主食さんね～。でも残念、ミーのパンズはユーたちの攻撃では破れないわ～。戦ってもお互いに相手を倒す手段がない、引き分けになるのよ」
「無駄な戦いになる……ということですか」
「イエス！　ミーが戦いではなく話し合いにきた理由、分かってもら

えた？」
バーガーカンはそう言うとこちらにウインクしてみせる。
バーガーカンの言葉が全て真実とは思えない。ダーケスト云々の前に、口調が軽すぎてどうにも信用できる相手には思えなかった。
しかし、バーガーカンがダークキュイを召喚して襲ってきていないのは事実だ。また、バーガーカンがこちらの攻撃を全く恐れていないのも確かだ。
今のこの場が膠着状態になっているのは疑いようがないだろう。
「そこでミーから提案があるの。ポテトちゃん、デスバレーって知ってるかしら？」
バーガーカンはフライドポテトに声をかける。
「……カリフォルニアの東にある山間地帯。負の厨力がすごく強くて、地元の私たちでもまず近寄ることはないよ」
フライドポテトは苦々しい表情で答える。
「そう。デスバレーの負の厨力なら、ユーたちを倒せるダークキュイを召喚できるわ～。だからユーたちにはデスバレーに来てもらって、そこでミーと戦ってもらいたいの」
「……はあ!?」
話を聞いていたクレープが声を上げる。
「全くこちらにメリットのない提案ですね……」
カフェモカも呆れた様子でため息を吐いた。
「そうでもないのよ～？　ミーにはユーたちと戦わないって選択肢もあるんだから」
「……自分たちと戦うのが目的ではないのか？」
バーガーカンの言葉が気になり、自分はそう質問した。
「ミーの目的はユーたちの逆。キュイを倒し、ダークキュイを救うことよ～。ダークキュイを倒して回るユーたちは倒せるものなら倒したい。でも、倒せないなら無理して戦う必要もない。ユーたちのいない所でキュイを襲い続けるわ～」
「……なるほど」
カフェモカは悩ましげな表情で呟いた。

自分たちとしてはバーガーカンを放置することはできない。キュイを倒すと言うなら、止めなければならない。
そう考えると確かに、相手が逃げずに戦ってくれるというのは、それだけでメリットだ。
「理解してくれたみたいね～。　色々と考える時間も必要だろうから、3日後のお昼頃にまたこの街に来るわ。ミーの提案にイエスかノーかは、その時答えてちょうだい」
バーガーカンは一方的に提案を投げかけ、一方的に話を終わらせようとする。その流れをパニーニが止めた。
「今すぐ戦う。と言う選択肢もあるな」
「ワオ。私はいいわよ～。そこのクレープちゃん、攻撃してみたら～」
パニーニの煽りをバーガーカンは全く意に介さず、煽り返す。
「このっ……！」
クレープはその言葉に乗せられ、自らのスキルを放った。
「『糖分の対価』っ！」
バーガーカンの周囲にいくつものフルーツが舞い、それは光線に姿を変えバーガーカンの身体を貫いていく。
いや、光線が当たる前に、バーガーカンは自らの身体を全て鋼鉄のパンズに挟み込んでいた。
……そしてバーガーカンの言葉どおり、その鋼鉄のパンズは、クレープの攻撃でも傷ひとつつかなかった。
「このとおり倒せないし、そしてカンタンに逃げられちゃうの～」
気付くとバーガーカンの身体は、彼女が登場した時と同じ、楕円形の黒い空間に包まれている。
「それでは3日後に。シーユー！」
その言葉とともにバーガーカンの姿は消え、ほどなくして黒い空間も消えた。

## メリケン０３区―ブリトー―

バーガーカンとの邂逅からおよそ一時間後。自分たちはフライドポテトの仲間たちと対面していた。

「まあ、少なくとも敵の提案に乗る必要は全くないね」

フライドポテトの仲間の一人、ブリトーがそう意見を述べる。

ブリトーはこのカリフォルニアの街のリーダーだそうだ。アスリートのようにがっしりとした体格をしており、褐色の肌が眩しい。

「こちらの戦力で倒せない相手なら、相手の本拠地に乗り込むのは殺されに行くようなもんだ。倒せる相手なら、次にダーケストがやってきた時に倒しちゃえばいい」

ブリトーのその言葉には反論のしようがなかった。そもそも自分たちが倒せない相手なら、戦うという選択肢すらない。

「カフェモカせんせー。それでその缶詰バーガーは、私たちで倒せそうなの？」

続いてドーナツが手を上げてそう質問した。

ドーナツもカリフォルニアの街の一員だ。背は高いが体は華奢で、ブリトーとは正反対の印象を受ける。

「少なくともあのパンズの盾を貫けるキュイはいないでしょう。つまり、盾を避けて本体に攻撃するしか方法はないでしょうが……」

「盾は強いが本体は脆い。なんて都合の良い話はないかな？」

最後に声を上げたのはポップコーンだ。ブリトーやドーナツに比べると少し幼く見えるが、子どもと言うほどでもない。

体格のあるブリトーや長身のドーナツと比較すると、相対的に小さく見えてしまうだけだろう。

「スターゲイジーパイ……他のダーケストと戦ったときは、私の全力の攻撃を何発も直撃させて、やっと倒せた。だから、不意をついて本体に攻撃を当てても、そこまでのダメージにはならないと思う」

クレープは自身の体験をそう話した。

本体に一撃当てるだけで倒せるなら、そもそも一人で敵前にやってこないだろう。クレープの予想はおそらく正しい。

「そうだとすると、捕まえるしかないか。ポップコーン、得意のマジックでどうにかできない？」
「ええ～。無茶振りすぎ～」
　カリフォルニアの街のキュイたちは見た目こそ多様だったが、性格は一様に気さくだった。敵と戦う話をしているのに、良くも悪くも空気が軽い。
「前のダークストとの戦いの時に考えたのですが。持久戦をするのが一番かもしれません」
　カフェモカは手元のパイプをくるりと回すと、口にくわえる。
「キュイである以上、存在するだけで厨力を消費します。また、前の戦いを顧みるにダークキュイの召喚はかなり厨力を消費していたようでした」
「ガス欠を狙うってことかい？」
　ブリトーの言葉にカフェモカは頷く。
「メリケン大陸は負の厨力が多いとはいえ、それでもまだ正の厨力が優勢です。長期戦になればなるほど、敵のほうが弱っていくでしょう」
「なるほど～。その手の戦いなら私の出番かな？」
　カフェモカの話にドーナツはそう呟いた。
「ドーナツは、デザートなのに長期戦が得意なの？」
「短期決戦よりは長期戦の方が好きだよ。……とりあえず、戦い方を考える前にお互いの力を教えあった方が良くない？」
　ドーナツはそう告げる。確かに、お互いがどんな力を持っているのかを知らないことには、共闘することなどできるはずもない。
「……それじゃ、お互いのスキルを見せ合いっこします？」
「見せ合いねえ……。それなら実戦形式にしようか。カリフォルニアチームとシェフ連合で対決だ！」
　ブリトーは高らかにそう宣言する。
「ええ～……」
　玉子焼きは自分の提案があらぬ方向に向かってうなだれる。争いが苦手な玉子焼きは、次元ハウスの練習試合もあまり乗り気ではな

かった。
しかし、お互いの力を知ると言うならこれ以上分かりやすい方法もないだろう。
ブリトーの言葉に他の仲間からは異論は出ず、自分のキュイたちとカリフォルニアのキュイたちは練習試合をすることになった。

カリフォルニアの街の中心から少し外れると、途端に建物が少なくなり一面に荒野が広がる。
その荒野が今回の練習試合の舞台だ。
カリフォルニアチームはブリトー、ドーナツ、ポップコーンにフライドポテト。
一方のこちら側はサーロインステーキ、クレープ、玉子焼き、カフェモカの４人が戦うことになった。
パニーニと白ご飯は見学だ。主食のキュイは基本的に味方の壁になる役割であり、特殊な力は持っていない。
お互いの力を知る目的である今回の対決で、人数合わせで抜けるのであれば主食の二人がいいだろう。とパニーニが提案した。
「ねえねえシェフ。どっちが勝つと思う？」
ウィッチがとても気楽そうに尋ねてきた。
「それは……当然、自分のキュイを応援するよ」
当たり前の答えを自分は返す。
「単純な厨力の量で言えば、こちらの圧勝でしょう。メリケン大陸は正の厨力の量が少ない地域。当然そこに住むキュイも厨力が少なくなる。かたやこちらは無尽蔵に厨力を生み出すシェフから直接作られたキュイよ」
パニーニがそんな分析をする。
「じゃあパニーニはこちらの勝ちに賭ける？」
「ただ、実戦経験が少なすぎる。カフェモカがそれをどこまでカバーできるかにかかっているわ」
パニーニはウィッチの顔を見ず、そう答えた。ウィッチの話に付き合っていると言うより、シェフである自分に考えを伝えているように

聞こえる。
「準備はできたかい？」
ブリトーの大きな声が響く。
「だいじょーぶでーす！」
それ以上の声でサーロインステーキは返事を返した。
「それじゃ試合開始だ。そっちが好きなタイミングで始めていいよ」
「はーい！」
返事をするやいなや、サーロインステーキは敵陣に向けてダッシュした。
パルマハムもそうだったが、主菜のキュイはやはり良く言えば大胆、悪く言えば向こう見ずな戦い方をする。
「いっきまーす！」
サーロインステーキは自分の身の丈ほどもあるフォークを振り上げ、ブリトーに振り下ろす。
「おっと。サーロインのさっちゃんは元気一杯だねえ」
ブリトーは右手を前に出し、その攻撃を受け止める。
「えいっ！　えいっ！」
サーロインステーキは左右から何回もフォークを振り回す。残念ながらその姿は剣豪というよりは、暴れ回る子どもと言った方がまだ近かった。
「うう……『ミディアムレア！』」
普通の攻撃は通用しないと分かったのか、サーロインステーキは頭上でフォークをくるくると回した。
次の瞬間、ブリトーの周囲に火柱が立つ。ブリトーの姿が見えなくなるくらいの火炎の柱だ。
火柱は数秒ほど立ち昇り、煙を残して消える。……そして、何も変わらないブリトーの姿が再び現れた。
「……良い火加減だ。でも、この程度じゃ焦げないねえ」
ブリトーは涼し気な声で火柱の感想を伝える。
「ごめんなさーい！　勝てなかったー！」
サーロインステーキは大声で謝ると、ブリトーから距離を取った。

ブリトーはそれを追わず、お互いは再び一定の距離を取って対峙する。
「流石はカリフォルニアのリーダーですね……」
カフェモカがそんな感想を漏らす。攻撃を苦もなく耐えるその姿は、どこかパニーニと重なるところがあった。
「クレープ！」
「うん！　任せといて！」
カフェモカの声がかかる前に、既にクレープはスキルの発動準備に入っていた。
次元ハウスの練習試合で、唯一パニーニを倒した経験があるのは、クレープのスキルだけだ。つまり、ブリトーもクレープであれば倒せる可能性はある。
「……痛っ！」
その時、クレープが声を上げた。何が起きたのかは一瞬過ぎて分からない。
「ドーナツビーム♪」
ドーナツの声が響く。クレープに注目していたため、今度のドーナツの攻撃は肉眼で捉えられた。
ドーナツはとても小さい厨力の弾を飛ばしているようだ。ドーナツの手元が光り、その光は次の瞬間にはクレープの身体にぶつかっている。
「いたっ！　いたっ！　痛いっ！」
光をぶつけられたクレープは声を上げる。微妙に呑気なその悲鳴を聞く限り、威力は些細なものなのだろう。
しかし、無視できるレベルでもないようだ。クレープはスキルの発動を中断してしまっている。
「え、ええっと……？　クレープさん、大丈夫ですか!?」
玉子焼きがどうしたものかとクレープの様子を伺った。
おそらく、バリアを張るべきか悩んでいるのだろう。その攻撃はバリアを張って守るには、余りにも軽すぎた。
「……いえ、上です！」

カフェモカが叫ぶ。気付くと上空には無数の黄金色の棒……おそらくはフライドポテトが浮かび上がっている。
「フライドポテト・メテオっ！」
そのフライドポテトが一斉に空から降り注いだ。
「『夢境』っ！」
玉子焼きは、今度は躊躇なくバリアを張る。無数のフライドポテトは玉子焼きのバリアにぶつかり、消滅していった。
「シールド持ちかあ」
「シールドじゃないかも。相殺ではなく一方的に無効化したように……見えた」
「……じゃあ、何をやっても倒せなくなったのかな？」
ポップコーンとドーナツは玉子焼きのバリアについてそんな感想を述べる。
「と、言うことは」
ドーナツは再び小さな厨力の弾をクレープに向けて撃った。しかし当然、玉子焼きのバリアでかき消える。
「ごめんブリトー。あなた死んだよ」
「あっさり言うねえ……」
ドーナツの言葉にブリトーは苦々しく笑う。
「『糖分の対価』！」
クレープのスキルが発動した。ブリトーの周囲に様々なフルーツが浮かび上がる。
そしてそこからいくつもの厨力の光線が放たれ、ブリトーの身体を貫いた。
「くぅっ……」
ブリトーの身体がその場に崩れ落ちる。
「こりゃ……凄まじいよ。私の負けだ」
最後にその言葉を残して、ブリトーは顔を地面に付けた。
「ブリトー……あなたの犠牲は忘れないよ」
ドーナツは玉子焼きのバリアが途切れたのを見て、厨力の弾を再び発射させた。

「痛いっ！　いた、いたいですぅ！」
　次の標的は玉子焼きになった。敵の中で最も恐ろしい能力を持っているのは玉子焼きであると言うことに、ドーナツも気付いたのだろう。
「さっちゃんに任せて！」
　サーロインステーキが再び敵陣に突撃する。
「前衛がいなくなったら、そう来るよねえ」
　ドーナツはなぜかサーロインステーキではなく、ポップコーンの方を見る。
「そうだねえ。ではポップコーン・マジックのお披露目っ」
　ポップコーンは背を向けて後ろに走り出した。続いてドーナツも攻撃を止めてポップコーンの後を追う。
「えっ？」
　サーロインステーキはポップコーンたちの後を追おうとして、ポップコーンのいた場所にカラフルな筒のような物体が置かれていることに気付いた。
　その筒のような物体は、映画館で売られているポップコーンの入った容器のように見える。
「『サルート』！」
　ポップコーンが声を上げると同時に、大きな破裂音が響いた。ポップコーンが出来る時の、あの音だ。
　そしてポップコーンの置いていった筒からは、破裂音と同時に無数の巨大なポップコーンが飛び出す。
「ふえええええ!?」
　そのポップコーンは正面にいたサーロインステーキの身体を直撃した。防御する時間もなく至近距離で直撃してしまっている。
「だめだ～……」
　サーロインステーキの身体はその場に倒れた。
　お互いに前列のキュイが倒れ、残り3人となった。
「ポテト。前列やって♪」

「え～……まあ、仕方ないか」
ドーナツの言葉に従い、フライドポテトは前に出る。
フライドポテトのスキルは周囲にフライドポテトの雨を降らせるものだったが、それとは別に彼女は1本のフライドポテトを常に手に持っている。
あのフライドポテトを剣のように扱えれば、接近戦も可能だろう。
「仕方ありませんね……」
カフェモカはため息を吐いて前に出た。
こちらのキュイはまるで接近戦ができそうにない。コーヒーを投げて戦うカフェモカも接近戦は不得意だろうが、それでもクレープや玉子焼きよりはましだろう。
クレープや玉子焼きは、そもそも1人で戦った経験すらないからだ。
「『モカアサルト』っ」
カフェモカはフライドポテトに向けてコーヒーを飛ばす。
「おっ……とっと」
フライドポテトはコーヒーを避けようと後ろに飛んで、身体がよろける。直撃は避けたが、足は完全に止まった。
カフェモカも足が止まった相手に接近戦を挑めるキュイではない、一定の距離を保ったままお互いの攻撃は止まった。
「夢……境……！」
その時、突然玉子焼きがバリアを発動させた。
「玉子焼きっ？」
カフェモカが後ろを振り向くと、玉子焼きは地面に両ひざをつけていた。
「ご、ごめんなさい……もうこれで最後ですぅ……」
玉子焼きは絞り出すような声でそう告げる。傍目から見ても相当なダメージを受けているようだった。
「私の攻撃ってなぜか過小評価されるんだよね～」
「見た目が地味すぎるんだよ～」
ドーナツとポップコーンがそんな軽口を叩く。つまりは、ドーナツ

のあの攻撃は牽制のようでいて、玉子焼きの体力を削っていたのだろうか。
「……クレープ。バリアが切れる前にもう一度スキルを使うことはできますか」
「間に合うよ！　……誰を狙う!?」
クレープの問いにカフェモカは少し間を空けて答えた。
「ドーナツを狙ってください！」
「りょーかい！『糖分の対価』！」
クレープが叫ぶと同時にドーナツの周囲に色とりどりの果物が浮かぶ。
「え～。私～？」
「ドーナツ……あなたの犠牲は忘れないよ」
ポップコーンが別れの言葉を告げると同時に、ドーナツの身体はクレープのスキルに貫かれた。
「あ～……これはすごい……よ」
ドーナツはその場に崩れ落ちる。主食のキュイすら一撃で倒せる力を持ったスキルだ。デザートのキュイに耐えることは不可能だろう。
「……甘いですよっ！」
ドーナツの倒れる姿を見ていた自分は、カフェモカの声が響くまで場の状況に気付かなかった。
ドーナツが倒れるまでは同じ位置にいたフライドポテトとポップコーンが、左右に別れて両側からカフェモカの後ろ……クレープを狙おうとしている。
しかしカフェモカのコーヒーで、再び足止めされた格好だ。
「ポップコーン。あなたのスキルは先程見ましたが……あれは、近距離でないと効果が薄そうですね？」
「うっ……」
カフェモカの指摘にポップコーンはうろたえる。
「フライドポテト。あなたのスキルは……全体を広く攻撃できますが、敵を一撃で倒せるほどの力はないですね？」

「うっ……」
今度はフライドポテトが図星をつかれた顔をした。
「つまり……私がこうして一定の距離を保っていれば、あなたたち二人にはもう私たちを倒す手段はない」
「……ん～。そだね……負けだ」
フライドポテトは手に持ったポテトを上空に放り投げて、カフェモカに背を向ける。
「なんちゃって！」
上空に舞い上がったポテトは突然何かの力を受けたようにくるくると回り出す。そしてクレープ目がけて勢いよく飛んでいった。
「えっ……！」
クレープがフライドポテトの攻撃に気付いたとき、ポテトは既にクレープの眼前に迫っていた。
「……えいっ！」
クレープは思わずそのポテトを指差す。すると、クレープの指先からまるで先程のドーナツのように、小さな厨力の弾が飛んだ。
その弾はポテトを砕くほど強くはなかったが、ポテトの方向を変える程度の力はあった。軌道を変えられたポテトは、くるくると回りクレープの後方に突き刺さる。
「ドーナツさんの真似したらできちゃった……。クレープビーム♪……なんちゃって」
そのクレープの言葉は、先程のカフェモカの台詞で弱った相手の心を折るには十分だった。
かくして、練習試合はこちらの勝利に終わった。

## メリケン０４区―マッシュポテト―

「えいっ！　えいっ！」
クレープの指先からいくつもの厨力の弾が放たれる。それは少し離れた場所にある木の杭に当たると、消えていった。
「ん～……まだ力入りすぎてるかな。厨力を込めすぎると速度も精度も落ちちゃうよ～」
横で見ていたドーナツがそんな感想を伝える。
「少し休憩したらどうだ？」
自分は盛り上がっている二人に割って入った。
ドーナツの技を学びたいというクレープの希望で、練習試合が終わってから二人はずっとこの場所で練習している。
「ほら、ドーナツを作ったぞ」
「……わあ！」
自分がドーナツの盛られた木製の皿を差し出すと、ドーナツは歓声をあげた。
「いただきまーす」
シンプルなドーナツ、中にクリームを詰めたドーナツ、生地にチョコレートを練り込んだドーナツ。
色々なドーナツを用意したが、ドーナツが選んだのは表面をカラフルにデコレーションしたものだった。
「おいしい！」
「そうか、よかった。クレープは食べないのか？」
「食べまーす」
クレープはこちらを振り返ると、中にクリームの入ったドーナツを選んだ。
「……しかし、どうしてドーナツの技を学ぼうと思ったんだ？」
自分は素朴な疑問を投げかける。
「そだねー。クレープは私の真似しなくても、強いスキルもってるじゃん？」
ドーナツも自分と同じ疑問を口にした。

「えっ……う～ん」
クレープはその質問を聞いて、言葉に詰まる。
「その……スタイリッシュでおしゃれな戦い方だと思って……」
「あ、ああ」
想像外の答えが返ってきて、今度はこちらが返答に困る。
今後の戦いで役に立つと言うのではなく、単純に憧れから真似したくなったということだろうか。
「まあ、クレープのスキルのような時間のかかる攻撃は、一人で戦うときには向いてないから。隙の少ない攻撃も覚えておいて、損はないよ」
ドーナツがそうフォローする。
「ところで、カフェモカせんせーの作戦はそろそろ決まった？」
「ああ、もう少ししたら皆を集めて説明するようだ」
練習試合の結果を受けて、今はカフェモカが3日後のバーガーカンとの戦いをどうすべきか検討している。
先程ドーナツを差し入れたが、もうある程度の戦術は固まっているそうだ。
「じゃあドーナツ食べ終わったら、カフェモカせんせーのところに行こうか」
「う、うん」
ドーナツの言葉に、クレープは微妙な表情をする。おそらくはもっとドーナツの技を練習したいのだろう。
しかし、3日後の戦いに直接役に立つわけでないのなら、やはり作戦会議を優先すべきだった。

「彼を知り己を知れば百戦危うからず、と中華の故事にありますが」
カフェモカはそう前置きして話し始める。
「まずはバーガーカンの立場に立って考えてみます」
「敵さんも、まさか私たちがほいほいデスバレーに乗り込んでいくとは思ってないだろうねえ」
ブリトーの言葉にカフェモカは頷く。

「バーガーカンも自分の提案にこちらが乗ってくるとは全く考えていないでしょう。そうなると、なぜバーガーカンはあんな提案をしてきたのでしょうか」
「……あえて相手に3日間の猶予を与えると言うことは、その3日間は、敵側にとっても必要な時間なんでしょうね」
パニーニがそう呟く。確かに、3日と言うのは猶予を与えるにはあまりにも長すぎる。
「敵が私たちに勝てる戦力を用意するのに3日かかるとすれば。あのような提案をしてきた意図も分かりますね」
「なるほど……それじゃ相手の準備が整う前に、こっちからデスバレーに奇襲をかければいいんじゃない？」
クレープがそう提案するが、カフェモカは首を横に振る。
「それでこちらが優位に立てるなら、交渉の時に自分の本拠地の場所を話したりしませんよ。本拠地でならいつでも戦える自信はあるのでしょう」
「相手が3日後に向けて準備してるなら……3日後には戦わない方がいいってことですか？」
次は玉子焼きがそう提案する。
「それはこの街の住民としては、賛同したくないねえ」
「あ……そ、そうですね、ごめんなさい……」
玉子焼きは頭を下げる。自分たちはこの街から逃げれば3日後にバーガーカンと戦う必要はないが、この街の住民はこの街から逃げるわけにもいかない。
「どこか別の街に避難することはできないのか？」
「一番近い隣街まで移動するにも数日はかかる。移動中に襲われる危険も考えれば、この街に留まるのが一番安全だよ」
自分の疑問に、ブリトーはそう答えた。
「……ともかく、3日後にこの街でバーガーカンと戦う。これはもう決定事項になってしまいました。そしてそれはバーガーカンの狙いどおりかと思われます」
カフェモカがそうまとめる。

「相手の思うままに動いてるってのはいやな感じだね～」
　ドーナツがそんな感想を漏らす。おそらく全員がドーナツと同じ感想を持ったとは思うが、しかしどうしようもなかった。
「3日後に戦うことは仕方ありませんが、真っ向勝負をするのは危険でしょう。そこで、最初にも話しましたが持久戦を提案します」
　カフェモカが自分の作戦を説明し始める。
「バーガーカンがどのような戦い方をしてくるか想像がつきません。そこで、どのような戦況になっても対応できるよう、可能な限りパーティを分割します」
「具体的には？」
「パニーニとクレープ、サーロインステーキと玉子焼き、白ご飯と私、カフェモカ。この3パーティが別々に行動します」
　カフェモカのその言葉に、皆がざわついた。
「戦力の分散は愚策。とも故事にはあったはずだけど」
　パニーニがそう呟く。
「正面から戦うのであれば、愚策でしょう。ですが今回は持久戦です。逃げ回るのであれば、少人数の方が有利でしょう。これも故事にありますよ」
　カフェモカはパニーニの言葉にそう反論した。
「逃げ回って、敵の厨力が尽きるのを待つというわけか……」
　パニーニは納得半分、不満半分といった様子だ。
「敵の出方が分からない現状では、それが最善だと私は考えます」
　カフェモカが改めてそう告げると、それに反論するものはいなかった。
「あの～私たちはどうすればいいのかな？」
　ポップコーンが声をあげる。
「カリフォルニアの皆さんには、この街の住民を守ってもらいたいと考えています」
　カフェモカはポップコーンの質問にそう答えた。
「バーガーカンがこの街の力のないキュイを狙う可能性もあります。逃げ回るにしても、そこにだけは一番の戦力を置かなくてはなりませ

ん」
「……了解した。でも、流石に４人は多すぎだねえ」
ブリトーはそう言うと、ドーナツの方を向いた。
「ドーナツ。あんたも自由行動でいいよ。好きにしな」
「りょーかい。じゃ、好きにやるよ～」
ブリトーの言葉に、ドーナツは肯定の返事をした。
「……一人で大丈夫なのか？」
自分は不安になって、そう尋ねる。デザートのキュイは打たれ弱いのが特徴で、主食のように盾になるキュイがいてこそ活躍できるからだ。
「私は元々一匹狼だからね～。ダークキュイとは何年も一人で戦ってきたから、心配はいらないよ」
ドーナツは平然とそう答える。確かに、彼女が先程見せた攻撃は、デザートらしからぬ隙のない攻撃に見えた。
何より、ドーナツとの付き合いが長いカリフォルニアの仲間が全く心配していないのだ。自分が心配しても仕方ないだろう。

小屋の外に出ると、もう日が沈みかけている。
「バーガーカンと最初に対峙するのは私と白ご飯にします」
「わ、私がですか？」
カフェモカの言葉に白ご飯は目を丸くした。
「敵の出方が分かりませんからね。もしバーガーカンが戦うそぶりを見せたなら、パニーニとクレープの隊も戦闘に加わってください」
「私たちは戦わなくていいの？」
サーロインステーキが疑問の声をあげた。
「サーロインステーキと玉子焼きは、バーガーカンが逃げた場合に追いかける役目です。足の早いサーロインステーキなら追いかけるのはたやすいでしょう」
「ふむ……バーガーカンの動きに合わせて前に出す隊を変えるということ？」
「直接対決でサーロインステーキが倒れてしまった後にバーガーカン

が逃げた場合、こちらには追いかける手段がありません」
　カフェモカは戦うメンバーを変える理由について、そう説明する。
「サーロインステーキはとにかくバーガーカンを追いかけ続けてください。ただ、あなたの攻撃ではバーガーカンを倒すことはできません。あなただけでバーガーカンと戦うことはしないように」
「は、はい！」
　サーロインステーキは大きな声で返事をする。その声は少しだけ震えていた。
「クレープは言うまでもありませんね。あなたは切り札です。直接対決になるまではできる限り戦いを控えてください」
「う、うん」
　クレープもそう返事を返す。
「じゃあ私は～？」
　気の抜けた声でドーナツが尋ねた。
「最初は私がやるつもりでしたが……ドーナツは戦況を見て、戦力が必要な隊に協力してください。サーロインステーキが戦闘の中心になったらサーロインステーキを、クレープが中心になったらクレープの補佐をお願いします」
「責任重大な仕事だね。私に任せていいの？」
　ドーナツの言葉に、カフェモカは手元のパイプをくるりと回す。
「私の見立てでは、あなたは私以上に戦況を把握する力があると思います」
「えー。随分と過大評価されちゃったなあ。まあ、私なりにやってみるよ」
　ドーナツは相変わらず気の抜けた声でそう答える。
「それで、カフェモカせんせーは何をするの？」
「司令塔の役目に専念します。戦況に応じて各隊に指示を出しますので、各隊はそれに従って動いてください」
　カフェモカはそう言うと、玉子焼きとパニーニ、ブリトーとドーナツに小さな水晶のようなものを手渡した。
「これは？」

「特定の厨力を発信・受信できる通信機器です。人間界でいうトランシーバーのようなものですね。この魔法石に厨力を込めれば、周囲の水晶にもその厨力が伝わります」
カフェモカはそう言うと、水晶を握りしめる。
「……なるほど。便利なものだね」
ブリトーはそんな感想を漏らした。厨力のない自分には、皆の水晶が少し光ったことしか感じられないのだが、トランシーバーのようなものだと言うのであれは、今の方法で会話ができるのだろう。
「後はこの街の住民をどう守るかですが……これについてはブリトー、あなたにお任せして良いですか？」
「ああ」
ブリトーは頷くと、カフェモカの隣に立って皆の方を向いた。
「街の住民みんなを守るなら、どこか1ヶ所に全員を集めるしかない。街の外れにある教会なら、全員が中で過ごせるスペースは十分にあるよ」
「教会にみんなを集めて、入口で敵を迎え撃つ。簡単そうだね」
フライドポテトが気楽な感想を漏らした。
「教会ですか……念のため、立地を見ておいてもいいですか？」
カフェモカはフライドポテトの言葉とは正反対に、いたって慎重だった。

ブリトーに案内されて、自分たちは街外れの教会に到着する。狭い街だ、街外れといっても街の中心部から歩いて5分もかかっていない。
「普段は誰も利用してないから、掃除しないとほこりっぽいけど……なっ」
ブリトーが入口の扉を開くと、言葉どおり埃が舞った。
教会の中はブリトーの話しどおりかなり広かった。この街の住人がどの程度かは分からないが、百人以上は余裕で入ることができるだろう。
「あのう……お客様ですか？」

声をかけられて横を向くと、気付くと自分の服が誰かに引っ張られていた。
「マッシュポテト、食べます？」
「……え？」
「食べるなら、今から作りますけど」
その少女はそう言うと、脇に抱えたかばんからジャガイモを1個取り出した。
「い、いや。お腹空いてないから、大丈夫だよ」
「……そうですか。ではお土産にしてください」
少女は手に持ったジャガイモをこちらに差し出す。その勢いに押され、自分はジャガイモを受け取ってしまった。
「この子はマッシュポテト。この街の住民の一人だよ」
ブリトーはその少女の肩に手を置くと、そう説明する。
「自分の厨力をポテトに変える能力を持ってる。日常生活では優秀だけど、戦闘では……役に立たないねえ」
「そんな能力を持ったキュイもいるんですか」
戦闘の役に立たない能力を持つキュイには始めて出会った。
とは言え、キュイはダークキュイと戦うために生まれてきた存在ではない。戦いに不向きなキュイがいてもおかしくはないだろう。
「ダークキュイが現れるまでは、むしろ戦闘に向いたキュイの方が珍しい存在だったんだけどね……」
ウィッチが、今まで聞いたことのないような暗い声でぽつりと呟いた。
その重い言葉で、自分も状況を察する。つまり、戦いに向かないキュイは今のキュイディメでは生き残れないのだ。
「そうか……」
自分はマッシュポテトからもらったジャガイモを改めて見つめる。
他者を傷つけない優しいスキルを持ったキュイが消えていく、そんな世界があっていいはずがない。
自分は改めてダークキュイに、いやダークキュイを生み出したこの世界への怒りが湧いてきた。

## メリケン05区―イーター―

D・バーガーカンが指定した日時は3日後の昼。とは言え、その言葉が守られる保証はどこにもない。

奇襲に備えて昼夜問わず誰かは常に街中を見張っていたが、バーガーカンが現れたのは予定どおり、3日後の昼のことだった。

3日前にバーガーカンが姿を消した時と同じ場所に、再び黒い楕円形の物体が浮かび上がる。

おそらくはこれがバーガーカンの転送陣なのだろう。根拠があるわけではないが、カフェモカはそう考えていた。

「ハロー！　お出迎えありがと～」

黒い転送陣からD・バーガーカンが姿を現す。

「って、随分と人が少なくなーい？」

バーガーカンはこちらの様子を見て首を傾げた。無理もない、今この場所でバーガーカンと対面しているのはカフェモカと白ご飯、二人だけだ。

「あなたが指定した時間と場所に素直に現れるとは思いませんでしたからね。分散して街全体を見張っていました」

カフェモカはそう嘘をついた。

ウィッチいわく、転送をするには別の次元との間に門を開く必要がある。その門は気軽に開閉できるものではなく、開けるも閉めるも多大な労力を使うそうだ。

そしてこの3日間で、ウィッチにはこの街にいくつ『門』があるか調べてもらっている。

ウィッチの調査を信じれば、このカリフォルニアの街には門はふたつ。ウィッチの開いた転送陣と、おそらくはバーガーカンが開いたこの場所だけだそうだ。

つまり、バーガーカンが現れるのは十中八九この場所である。

それを知っているカフェモカは、今現在は仲間のキュイに街全体を見張らせてはいない。この場に姿こそ見せていないが、仲間のキュイの大半は近くの家に隠れていた。

「ふ～ん。それで……私と一緒にデスバレーに来てくれる決心はついたかな？」
「今の状況が答えになっていると思いますが」
カフェモカがそう伝えると、バーガーカンは笑みを浮かべる。
「あなたの言葉を信じることはできません。あなたがこの街を襲うと言うなら、その前にあなたを倒します」
「ワオ！　今から戦うつもりなの？　あなたたち二人だけでどうやって？」
バーガーカンはこちらが宣戦布告をしても全く動じる様子がない。
確かにバーガーカンの言葉どおり、カフェモカと白ご飯の二人だけでバーガーカンに致命傷を与えることはできない。
「仲間を呼んだらどうなの～？」
「……あなたこそ、一人では私たちを倒せないのでは？　ダークキュイでも呼び出したらどうですか？」
カフェモカは逆にバーガーカンを煽り返す。
仲間を呼ぶのは簡単だ。しかし、まずはバーガーカンの出方を伺ってからだ。敵の動きによって、こちらの最善手も変わる。
「言われなくてもそうするわよ～」
バーガーカンの周囲に負の厨力が集まっていく。スターゲイジーパイがダークキュイを生み出した時と同じだ。
「白ご飯、注意してください」
「は、はい！」
白ご飯は敵に向けて構えを取る。
バーガーカンの周囲に集まった負の厨力は次々とダークキュイに姿を変えていった。
十、二十。数え切れないほど多い。……しかし、見た目は小さく、一匹一匹の力はさほどでもないように見えた。
「ギュイイイ！」
生み出されたダークキュイの一匹が白ご飯に飛びかかる。
「こ、このっ！」
白ご飯は一歩も引かず、小さな身体でダークキュイの突進を受け止

める。そして、拳を正面に突き出した。
「……え？」
ダークキュイは白ご飯の拳を受けて吹き飛び、そのまま霧散する。当の白ご飯が思わず目を丸くするくらい、脆かった。
「ギ……ギギッ」
残りのダークキュイはその様子を見てかどうかは分からないが、白ご飯の方には向かわず、四方八方に散っていく。
その動きに戦術があるようには見えない。言うなら、蜘蛛の子を散らすように逃げていったように見えた。
「あら～。やっぱりこの街だと負の厨力が弱いから、弱いダークキュイしか生まれないわね～ショック！」
バーガーカンは両手を上げてみせる。その台詞はあまりにも嘘くさかった。
『ドーナツ。逃げていったダークキュイを始末してください。嫌な予感がします』
カフェモカは通信石を握り締めて、仲間に指示を伝える。
『ドーナツりょーかい』
ドーナツから返事が返ってくる。通信石でのやり取りは通信石を持ったキュイにしか伝わらない。
バーガーカンに伝わらないのはいいが、白ご飯に指示を伝えられないのが玉に瑕だ。
「仕方ない。今度はもう少し強いダークキュイを召喚しましょう～」
バーガーカンの周りに再び負の厨力が集まる。それは先程とは比較にならないくらい大きな力だった。
黒い厨力の塊が渦を巻き、周囲の小屋の屋根付近まで舞い上がる。そして、こちらの二、三倍は大きいであろう、巨体のダークキュイが姿を現した。
「カフェモカさん……！」
「ええ。二人では勝てそうにありません。一旦距離を取りましょう」
幸い、巨体のダークキュイは動きは鈍いようだった。そのダークキュイが戦闘態勢に入る前に、白ご飯とカフェモカは相手の射程外に

逃れる。
「あらあ？　逃げるの～？」
　バーガーカンは背を向けたカフェモカを揶揄するも、追いかけようとはしない。
『サーロインステーキ。バーガーカンから目を離さないように。クレープ。巨体のダークキュイに隙があれば、攻撃を加えてください』
　カフェモカはバーガーカンから逃げつつ、そう指示をする。
『さっちゃん了解！』
『クレープ了解』
　二人から返答が帰ってきた。
「さて……」
　カフェモカは足を止める。バーガーカンとの距離はかなり離れた。視界が開けた場所なのでバーガーカンの姿は視認できるが、相手の細かな動きまで窺い知ることはできない。
「ああやってダークキュイを召喚させて、バーガーカンの厨力を削る作戦……なんですよね？」
　白ご飯は不安そうにカフェモカに尋ねた。
「はい。今の所はこちらの思いどおりの展開なのですが……」
　そう呟いてカフェモカは顔をしかめる。
　バーガーカンにとってもこの展開は思いどおりなのではないか。そんな不安が先程から頭をよぎっていた。
「……あ！」
　白ご飯が声を上げる。
　バーガーカンの隣で待機していた巨体のダークキュイが鮮やかな色の厨力に包まれた。クレープの攻撃だ。
　遠目ではあるが、致命的なダメージを与えたようだ。ダークキュイのその巨体が地面に崩れ落ちる。
『ダークキュイ撃破！　バーガーカンにはまだこちらの居場所は気付かれてないみたい』
　クレープから連絡が入った。
　直接対決を避けつつ、こうしてバーガーカンの厨力を削っていく。

戦況はカフェモカの想定どおりに進んでいた。
『モカせんせー！　緊急事態！』
そんな時にドーナツから連絡が入った。
『逃げてるダークキュイが……段々と強くなってきてる！』
「強くなっている……？」
カフェモカはそう呟いて、少し間を置いてからその状況の恐ろしさを理解した。

「ほいっと」
ドーナツは前方のダークキュイに厨力の光線を撃つ。
それはダークキュイの左足に当たり、その部分を吹き飛ばした。
「ギュイイ！」
ダークキュイは足を失い動きを止める。
「ごめんね～」
ドーナツは再び厨力を撃った。それは次にダークキュイの頭部に当たり、同様にその場所を吹き飛ばす。
「ふう……」
ドーナツはため息をついた。
最初の数匹は一回の攻撃で全身が霧散するほど弱かった。
その後は、正確に狙いをつけて身体の中心部に当てないと倒せなくなった。
そして今では足を撃って動きを止めて、もう一撃を加えないと倒せなくなってきた。
最初にバーガーカンが召喚して、街のあちこちを逃げ回っている大量のダークキュイ。
そいつらはどうやら、時間が経つほど強くなる性質があるようだ。
つまり、早く始末しないと時間が経つほど厄介な存在になっていく。強さに際限がないとすれば恐怖だ。
あのダークキュイは一刻も早く倒さないとならない。
「ん～……」
しかし、ドーナツはその場で足を止めた。

ドーナツは天の邪鬼な性格だった。急ぐべき時ほど、あえてゆっくりと次の行動を考える。
キュイの強さとは即ち厨力の強さだ。つまりあのダークキュイは、逃げ回りつつ負の厨力を蓄えていることになる。
キュイは厨力を生み出すことはできない。つまりあのダークキュイは、この街に漂う負の厨力を吸収して身体に取り込んでいることになる。
そうであれば。あれだけ大勢のダークキュイが大量に負の厨力を吸収しているのであれば。この街の負の厨力など、既に枯渇していてもおかしくなかった。
そこまで考えて、ドーナツの首筋に冷たいものが走った。
この街に漂う負の厨力は、枯渇するどころか、一刻前より明らかに濃くなっていたからだ。
『この街の負の厨力が濃くなっている。バーガーカンが何かしているのかもしれない』
ドーナツは自分の推察を、通信石で皆に伝えた。

「負の厨力が……濃くなっている?」
カフェモカはドーナツからの通信を聞き、周囲を見渡す。
この場所ではバーガーカンの負の厨力が強すぎて、些細な変化は感じ取れない。
『ブリトー。そちらの負の厨力はどんな様子ですか?』
戦場から一番離れているブリトーに、カフェモカは負の厨力の状況を尋ねた。
『普段よりも負の厨力が強くなっていることは間違いないね。原因が何なのかは分からないけれど』
ブリトーからそう返事が戻ってくる。
『原因はともかく、相手の作戦も長期戦であることは間違いない』
『はい。それは間違いないでしょう』
パニーニの言葉にカフェモカも賛同した。
バーガーカンが積極的に戦おうとしない。敵のダークキュイが

段々と強くなる。街の負の厨力が濃くなっている。
状況証拠だけでも、敵が長期戦を想定していることは疑いがなかった。
『持久戦にしようとしたこちらの作戦は、結果論だが誤りだった』
パニーニの言葉に、カフェモカは少し間を置いて答える。
『……いえ。お互いに長期戦を狙っている状態は、戦術的には互角です。ここで慌てて短期決戦に作戦を切り替える方が、不利になりますよ』
長期戦を想定する場合は、相手が短期決戦を挑んできた場合の対応策も考えておくのが基本だ。
ここで無闇に短期決戦に作戦を切り替えることは、それこそバーガーカンの思いどおりの気がしてならなかった。
『バーガーカンの作戦は、何らかの方法によりこの街の負の厨力を増大させ、召喚したダークキュイを強化すること、またはさらに強いダークキュイを召喚することだと仮定します』
カフェモカは敵の作戦をそう想定する。
『私カフェモカ隊、クレープ隊、ドーナツは召喚したダークキュイを倒しつつ、街の負の厨力が増大した理由を探しだし、それを除去します』
そして新しい作戦を皆に伝えた。
『負の厨力を増やす方法……想像つかないけど、ま、それが分からなかったら勝ち目ないよね～』
ドーナツが気楽な口調でカフェモカに賛同する。
『……それはそうね。負の厨力が増える前でも勝てなかった相手なのだから』
パニーニもカフェモカの作戦に賛同した。
『サーロイン隊は引き続きバーガーカンを見張ってください。ブリトー、ウィッチに負の厨力を増やす方法に心当たりはないか、聞いてみてください』
『さっちゃん了解！』
『わかった、聞いてみるよ』
少しの間の後、ウィッチから通信が届いた。

『負の厨力を増やす方法に心当たりはないけど……段々と強くなるダークキュイは、たぶん『イーター』じゃないかなあ』
『イーター？』
カフェモカにとってその名前は初耳だった。
『負の厨力を与えれば与えるほど強くなるダークキュイ。逆に負の厨力が少なくなると消滅しちゃう。正常な地域には生息できないから、知らない人が大半かも～』
ウィッチはそう説明する。
『それはありがたい情報です』
『そうね。バーガーカンが召喚したのがその『イーター』なら、負の厨力の増大さえ止めれば自然消滅することになる』
ウィッチのその情報でカフェモカの仮説が補強される。
『それでは各々、先程の指示どおりに行動願います』
カフェモカはそう伝えると、自らバーガーカンに背を向け、イーターと呼ばれるダークキュイを退治に向かった。

「あらあ？」
バーガーカンは背を向けて去って行くカフェモカの姿を見て、声を上げた。
カフェモカだけではない。姿こそ見せていないが、先程までバーガーカンを取り囲んでいたキュイの気配もなくなった。
「残ったのは……一人、いや二人かしら」
厨力の動きから、バーガーカンはそう予想する。明らかにバーガーカンを倒せる人数ではない。
それはつまり、バーガーカンを倒すことよりも重大な目的がキュイたちにできたことを示していた。
「なかなかやるじゃな～い？」
そのキュイの行動は、バーガーカンが想定していた中では最善の行動だった。
「まあ、どちらにしてもミーの想定の範疇だけど～♪」
バーガーカンはごきげんな調子でそう呟くと、離れたキュイたちは

追わず、別方向に歩き出した。

サーロインステーキと玉子焼きは、バーガーカンを追って街外れの荒野に足を踏み入れた。
「どこまで行くのかな……」
「に、逃げる気なんでしょうか……？」
二人の声には幾分不安が交じる。他の皆が戦っている街の中央部からはかなり離れてしまった。
「……たまちゃん！　隠れて！」
「ひゃあっ!?」
サーロインステーキは玉子焼きの腕を引っ張ると、近くにあった枯れ草の山の中に玉子焼きの身体を押し込めた。
「見て……井戸の前で止まった」
サーロインステーキは声を潜める。
遠くに見えるバーガーカンの姿は、井戸の前で何かをやっているように見えた。
様子を見守っていると、井戸の中から不思議な赤い光が放たれる。
「あれは、な、なんでしょうか……」
光を放っていたのは透き通る水晶のような物体だった。大きさ的にはバーガーカンと同程度。おそらく、井戸の底に隠されていたのだろう。
「第2ラウンド、スタート～」
バーガーカンがそう声を上げると同時に、水晶の放つ光はさらに強さを増した。
「!?」
サーロインステーキは突然身体中に強い圧迫感を覚える。
「なに、これ……」
それが桁違いの負の厨力によるものだと気付くのに時間はかからなかった。
「あ、あの石が……負の厨力を生み出している原因……!?」
「そうみたいだね……！」

サーロインステーキは歯を食いしばる。誇張ではなく、1時間もこの厨力を浴びていたら、自身の身体が消滅してしまいそうだ。
『玉子焼きですぅ！　負の厨力が増えた原因を、見つけたかもしれません～！』
玉子焼きは通信石で皆に呼びかける。
『こちらも厨力の増大を確認しました。街の西側で間違いないですか？』
『西側の、街の外の荒野、井戸のあるところですぅ！』
カフェモカの問いに玉子焼きはそう答えた。
『これはまずいよ……ブリトー！　街のみんなは!?』
続いてドーナツがブリトーに呼びかける。
『少し前からシェフに料理を作ってもらってる！シェフの生みだす正の厨力のおかげで、どうにかしばらくは持ちそうだよ。ただ、猶予はあまりないね！』
通信石越しのブリトーの言葉には強い焦りが見えた。
「そ、そうですぅ……私たちはともかく、厨力の弱い街の人たちは、この負の厨力を浴びたら……」
「……！　なら、少しでも早く止めないと！」
玉子焼きの言葉で、サーロインステーキも状況を把握する。
「とにかく、あの石を壊しちゃえばいいのかな？」
「そ、それはそうだと思いますけどぉ……ふ、2人だけじゃ無理ですよお……」
バーガーカンは3体のダークキュイ『イーター』を周囲に引き連れていた。
戦う云々ではなく、見つかったら逃げるしかない状況だった。
「私のスピードなら、攻撃を避けつつあの石のかなり近くまで接近できる。限界が来たら、たまちゃんは私にバリアを張って。バリアの効果が切れるまでの間に、あの石を殴りつけるよ！」
サーロインステーキはそんな作戦を玉子焼きに伝えた。
「で、でも……それ、上手く行ったとしても、その後どうするんですか……？」

「後はなるようになる！　とにかく、急がないと街のみんなも、私たちも死んじゃうよ！」
そう告げると、サーロインステーキは玉子焼きの返事も待たず枯れ草の山から飛び出した。
「ワオ！　ビーフ仲間のさっちゃんじゃな～い」
枯れ草から飛び出したサーロインステーキの姿を、バーガーカンはすぐに捉える。
「ダークキュイと仲間になったつもりは……ないよっ！」
サーロインステーキは身の丈ほどあるフォークを振り上げ、バーガーカンに突っ込む。
「何も考えず一人で飛び込んできても、やられちゃうだけよ～」
バーガーカンはサーロインステーキの突撃に全く動じない。
サーロインステーキは当初の作戦どおり、バーガーカンの目前で大きく横っ飛びした。
「そう。何も考えず、この魔法石を壊しに来たんでしょう～」
バーガーカンはそのサーロインステーキの動きを完全に見切っていた。
サーロインステーキの動きに合わせ横に体を動かし、頭についている金属のパンズを大きく振り回す。そのパンズは完全にサーロインステーキの胴体目掛けて振り回されていた。
しかし、パンズはサーロインステーキの身体に当たる寸前、黄色のバリアによって動きを阻まれる。
「よしっ！」
サーロインステーキはバーガーカンの横を抜け、振り上げたフォークをバーガーカンが魔法石と呼んだ謎の石に振り下ろす。
振り下ろした刹那、強い光と衝撃がサーロインステーキを襲った。
いや、玉子焼きのバリアに守られているサーロインステーキには衝撃は感じなかった。
ただ、相当の衝撃があったのであろうことは分かる。四散する魔法石に合わせて、周囲の小石や砂も飛び散っていたからだ。

「……！」
その時、サーロインステーキを守っていた玉子焼きのバリアが途切れる。
敵に囲まれた状態でバリアが途切れる。その後のことをサーロインステーキは正直あまり考えてはいなかった。
ともかく時間を稼げば他の仲間が来るだろう。最悪、自分はこのまま倒されても良かった。仕事はやり遂げただろうから。
サーロインステーキはフォークを改めて構え……目の前の光景に愕然とする。
自分を取り囲み、襲ってくるはずだったバーガーカンもイーターの姿も、そこにはなかったからだ。
「やあぁぁっ……！」
玉子焼きの悲痛な叫び声が周囲に響き渡る。
「……たまちゃん！」
状況を理解し、サーロインステーキは慌てて走り出した。玉子焼きは周囲をイーターに囲まれ、既に攻撃を受けている。
「これだけ優秀なバリアを張れる子を、一人にしちゃだ～め」
バーガーカンは薄く笑うと、玉子焼きに向けて金属のパンズを振り上げた。
「『モカアサルト』っ！」
その時、カフェモカの声とともに卵焼きの周囲にコーヒー色の厨力がばら撒かれる。
そしてそれは一斉に爆発した。
「遅くなりましたっ！」
カフェモカは玉子焼きと敵との間に割って入る。バーガーカンはそれを見て、こちらから少し距離を取った。
「た……玉子焼きさん……」
少し遅れてきた白ご飯は、玉子焼きの姿を見て息を呑む。
1箇所、2箇所、3箇所。玉子焼きの身体に決して小さくない穴が空いていた。それは下手をすると玉子焼きの存在自体が消失しかねないほどの傷だった。

ましてや、負の厨力があふれるこの場所にいては、数分と保たない可能性すらある。
「ごめんなさいっ！　私が……私が……！」
サーロインステーキが玉子焼きに駆けよる。
「サーロインステーキ！　今すぐ玉子焼きを抱えて、シェフのところに急ぎなさい！」
カフェモカが珍しいほど強い口調で命令した。
「え……う、うん！　絶対に助ける！」
サーロインステーキは少しの躊躇のあと、玉子焼きを背に抱える。そして一目散に駆け出した。
その間に、カフェモカの攻撃を受けその場に倒れていたイーターたちがひっそりと立ち上がる。
「ギュウウウ！」
イーターたちは声を上げてカフェモカに飛びかかる。
しかしそのイーターの身体は、カフェモカの後方から放たれた厨力の光線に貫かれた。
「モカせんせー。油断厳禁だよ？」
気付くと、カフェモカの後ろにドーナツもやってきていた。イーターたちはドーナツの攻撃がとどめとなり、身体を消滅させる。
「ドーナツ！　……失礼しました。モカアサルトですら一撃で倒しきれないとは……」
カフェモカはイーターの強さに舌を巻く。これ以上強化されたら、バーガーカンと遜色ない強さにすらなりかねない。
「その辺に転がってるあの石の破片がこれなんだけどさ」
ドーナツは親指大の小さな石の破片をつまんで、カフェモカに見せる。
「こうして厨力を当ててもあまり効果がない」
その言葉と同時に、ドーナツは厨力の光線をその石に当てる。ドーナツの言葉どおり、石は厨力を受けても何の変化も見られなかった。
「一方、物理的な攻撃には強くない」
ドーナツが指に力を入れると、それだけで石の破片はさらに細かく

砕けた。
「なるほど……私たちが利用している通信石と、似た魔法石のようですね。厨力を吸収し、放出するという役割は同じです」
カフェモカはそう分析する。
「サーロインステーキはおそらくフォークで直接魔法石を殴ったのでしょう。そしておそらくそれが、あの魔法石の効力を止める一番正しい方法です」
「でも、まだ完全には砕けきっていない、と」
ドーナツの言葉どおり、サーロインステーキの攻撃を受けた魔法石はひび割れ四散したが、魔法石の下半分はまだその姿を留めている。
そして負の厨力も、多少は落ち着いたが未だ濃い状態にあった。その負の厨力を消すためには、あの魔法石の残り半分を砕くしかない。
カフェモカもドーナツもそこまでは理解して、そこで考えが止まる。
「サーロインステーキは残しておくべきだったかもしれません……」
カフェモカはそう呟く。カフェモカ、ドーナツ、白ご飯。程なく合流できるであろうパニーニとクレープ。
残ったメンバーはいずれも直接攻撃できるような武器を持っていない。
「いや、モカせんせーの判断は正しいよ。1秒の差が生死を分けるかもしれない状況なんだ。一番足の速い子に任せる以外の選択肢はないよ」
ドーナツはカフェモカの決断をそう擁護する。
「カフェモカ！」
背後からパニーニの声が響いた。カフェモカが後ろを振り向くと、パニーニとクレープがこちらに駆け寄ってくる姿が見える。
「これで5対1。あの魔法石を壊すくらい、どうにでもなるよ」
ドーナツがカフェモカに向けて呟く。
「……そうですね」
カフェモカは頷いた後、通信石を握りしめ、皆に作戦を伝えた。
「行きますよっ！」

作戦を伝え終わると、カフェモカは号令をかける。カフェモカの声に合わせ、５人は一斉に走り出した。
「まあねえ。そうされたらお手上げね～」
バーガーカンはカフェモカたちの行動を見て両手を上げるそぶりをした。
バーガーカンにとって、５対１の状況は厄介ではない。自身の身体は生半可な攻撃では傷つかないからだ。
しかし魔法石はそうではない。こうやって四方八方から攻撃を仕掛け、誰かの攻撃さえ当たれば魔法石にダメージを与えられるのだ。
そして広範囲を攻撃できないバーガーカンには、全員の動きを全て止めることはできない。
単純だが、単純であるが故に破りようのない戦法だった。
「仕方ないわね～」
バーガーカンは薄く笑うと、近づいてきた内の１人に目線をやる。
「それなら厄介なクレープを、潰しちゃいましょ～ね！」
「……！」
クレープは咄嗟に足を止める。バーガーカンがこちらに突進してきたからだ。
バーガーカンはクレープに攻撃を仕掛けようと、金属のパンズを大きく振り上げる。
「……っ!?」
そこで、今度はバーガーカンが足を止める。逃げると思っていたクレープがあろうことかこちらの懐に入り、厨力を集中させたからだ。
「糖分のっ……対価！」
クレープは厨力をバーガーカンの至近距離で爆発させる。それはバーガーカンの胴体を完璧に捉えていた。
「やった……！」
魔法石に攻撃を加えつつ、カフェモカは声を上げる。
５人バラバラに攻撃を仕掛ければ、バーガーカンは必ずクレープに攻撃を仕掛けてくる。なのでクレープは魔法石を攻撃するそぶりを見せつつ、厨力を貯めておく。

眼前の光景は全てカフェモカの作戦通りだった。
「いった～い!!」
バーガーカンの大きな声が響く。
クレープの攻撃を受け、バーガーカンの身体は数十歩ほど離れた場所に吹っ飛んでいた。
「ミーとしたことが……油断したわ……」
バーガーカンはよろよろと立ち上がる。
「やっぱり、簡単には倒せないね」
クレープが皆の所に合流しつつ、呟いた。
バーガーカンの身体からはかなりの量の厨力が吹き出している。相当なダメージを与えたことは間違いないが、致命傷にはほど遠いダメージであることも明らかだった。
「ま、ともかく魔法石の破壊は終了っと」
ドーナツが最後に残った魔法石のかけらを足で踏み潰す。粉々になった魔法石からは急速に負の厨力が薄れていった。
「ふう……」
カフェモカは大きく息を吐く。
バーガーカンには随分と振り回されてきたが、ようやくこちらが優勢になった。後はこのメンバーでバーガーカンを倒すだけだ。
「やれやれ……シェフの生み出したキュイは、やっぱり厄介ね～」
バーガーカンは息を整えると、こちらに歩いてきた。
パニーニが、そして白ご飯が守るようにクレープの前に立つ。
「この街を壊滅させるつもりだったのに……2人だけしか倒せなかったなんて～」
「2人……?」
カフェモカはバーガーカンの言葉の意図が掴めず、思考を巡らす。そしてそれを理解した時、背筋に冷たいものが走った。
『サーロインステーキ！　無事ですか!?』
カフェモカは通信石を握り締め、サーロインステーキに呼びかけた。

サーロインステーキは、既にカフェモカの呼びかけに応えられる状態ではなかった。
1、2、3、4、5、6。全部で6匹のイーターに囲まれてしまっている。玉子焼きを背負った今の状態では、戦うことはできない。
この場の誰よりも素早いサーロインステーキなら、本来はイーターから逃げるのは容易なはずだった。
しかし玉子焼きを背負ったことでサーロインステーキの速度はかなり落ちていた。そしてそれだけでなく、イーターの方は負の厨力により速度も強化されていた。
サーロインステーキがイーターの速度を読み違えて逃げてしまったのが、この状況に陥った一番の原因だった。
「たまちゃん……」
サーロインステーキは背負った仲間の名を呼ぶ。玉子焼きは完全に意識を失っていた。いや、もういつ消滅してもおかしくない状況だ。
玉子焼きをここに置いて身軽になれば、逃げるのは難しくない。
サーロインステーキは悩んだ末に、玉子焼きを自分の背から下ろし、地面に横たえた。
そしてその上に、自分の身体を覆い被せた。
仲間を見捨てる選択肢は、サーロインステーキの頭には全く浮かばなかった。2人で助かる一番可能性の高い方法は、これだった。
『街の西部、酒場の裏で沢山の敵に襲われてる！助けて！』
サーロインステーキは通信石で呼びかける。
シェフたちのいる教会は遠いし、バーガーカンと戦っているカフェモカたちも助けには来れないだろう。
しかしこうやって玉子焼きを庇ってイーターたちの攻撃を受け続けていれば、いずれ助けは来るはずだ。
サーロインステーキは今にも消え入りそうな玉子焼きの身体を強く抱き締めると、敵の攻撃を待った。
ほどなく、イーターの攻撃が自分の背に当たる。後は我慢比べだ。
サーロインステーキは歯を食いしばり、ただ敵の攻撃を耐え続け

た。

それからどのくらいの時間が経ったのかは分からない。ただ、それほど長い時間ではなかった。

サーロインステーキの身体に冷たい水のような何かが降りかかる。その水からは負の厨力ではなく、正の厨力が感じられた。

「この哀しみは、存在すべきものではない……」

聞いたことのない、静かな女性の声が響いた。サーロインステーキは顔を上げる。

「まもなくシェフも駆けつけます。もう心配はいりません」

足元まで伸びた水の流れを思わせる青い髪、そして同じく青色のドレス。そんな姿の女性がサーロインステーキの前に立っていた。

「あなたは……」

「メキシコから参りました。ブルー・マルガリータと申します」

メリケン07区ーポップコーンー

「ブルー・マルガリータ？」
「助っ人として私がメキシコから呼んだ。メキシコは遠いから戦いに間に合うかは分からなかったけど……結果的には最高のタイミングで来てくれたよ」
ドーナツは突如戦場に現れたブルー・マルガリータについて、そう説明した。
「なるほど……結果的にはそのおかげで大変助かりました」
カフェモカは深く頭を下げる。
「あえて数匹のイーターは街中に残しておいて、一番手薄になったところを襲う手はずだったのよ～。まさか、そっちも手札の残りがあったなんてね～」
バーガーカンはまるで友人のように話しかけてくる。
「……それで？　あなたの手札はもう全部なくなったの？」
パニーニが静かながら深い怒りを込めた声で尋ねた。
「そうね～。事前に用意していた弾は全部使い切ったわ。あなたたちに致命傷を与えられなかったのは残念だけど、今日はここでお開きにしましょう」
「こっちはお開きにする……つもりはないわっ」
その言葉とともに、パニーニはバーガーカンに飛びかかった。少し遅れて、白ご飯も同じように飛びかかる。
２人はそれぞれ、バーガーカンの頭についている２枚の金属のパンズに掴みかかり、身体全体でそれを抱え込んだ。
「こうすれば……逃げられないし、クレープの攻撃もガード出来ないでしょう？」
「あら～」
バーガーカンは頭のパンズを振り回そうとするが、２人の力で押さえつけられていて、満足には動かせない。
その隙に、クレープの厨力がバーガーカンに向けて放たれる。
「ちっ……」

バーガーカンは防御態勢を取ろうとするが、まともに体が動かない。軽く舌打ちをすると同時に、バーガーカンの身体はクレープの厨力で爆発した。
「クレープ！　私たちのことは気にせず、全力でやりなさい！」
「私たちは正の厨力を受けても致命傷にはなりません！　心配しないでください！」
パニーニと白ご飯がクレープに向けて叫ぶ。今のクレープの攻撃は、パニーニたちが側にいたからか、普段より多少威力が抑えられていた。
「……分かった。全力で行くよ！」
クレープが次の攻撃の準備を始める。
「……仕方ないわね～。それなら私の最後の手札、切り札を見せてあげましょう」
「……!?」
バーガーカンの厨力が急激に増大する。
「ハンバーガー旋風～」
バーガーカンは身体を強く捻ると、反動をつけて勢いよく身体全体を回転させた。
「あっ……」
回転の力に負けて、バーガーカンを押さえつけていた白ご飯の身体がはじき飛ばされる。
「くっ……」
1人になってしまったパニーニもほどなくバーガーカンから弾き飛ばされた。
しかし、バーガーカンの回転はそこで終わらなかった。バーガーカンの回転は勢いを増し、まるでコマのように高速回転を始める。
「クレープ！　下がって！」
ドーナツは力を溜めていたクレープにそう言うと、クレープの返答を待たずクレープの体を後ろに引き寄せる。
その直後、バーガーカンから放たれた風のような負の厨力が、クレープの立っていた場所を襲った。

「これは……」
カフェモカは言葉を失う。クレープの立っていた場所だけではない。バーガーカンの周囲一帯を、竜巻になった負の厨力が切り裂いていた。
「パニーニ！　白ご飯！」
クレープがバーガーカンの起こした竜巻に向けて叫ぶ。
竜巻が収まった後、そこに残されたパニーニと白ご飯の身体は、全身も何十回も切り裂かれていた。
「パニーニ……！」
クレープがパニーニに駆けよる。カフェモカは白ご飯の元に急いだ。ドーナツはただ一人、バーガーカンを睨みつける。
「この技、終わった後に目が回るから、あまりやりたくないのよね～」
バーガーカンは身体をよろめかせながら、そう呟いた。
「この攻撃は……スターゲイジーパイの攻撃以上です……」
カフェモカは白ご飯の身体を確認して、絶句した。
致命傷ではないが、数時間は起き上がれないだろう。主食のキュイでこのダメージなら、それ以外のキュイなら一撃で倒されてもおかしくない。
そんな攻撃を、あれだけの広範囲に起こせるのだ。バーガーカンは攻撃力はさほどでもない、という前提が音を立てて崩れた。
「では改めて、今日の戦闘はこれでフィニッシュ～」
バーガーカンはふらつきを抑えると、そう宣言した。もうその言葉を否定できるキュイは、その場には残っていなかった。
「……そうね、今回邪魔されたから次はメキシコを舞台にしましょ～。1週間後のお昼に、今度はメキシコを襲うことにするわ」
「1週間後……？」
「お互いダメージも大きいし、準備時間もそれなりに必要でしょ？それじゃあね、シーユー！」
バーガーカンはそれだけ伝えると、こちらに背を向け歩き出した。
「くそっ！」
クレープは溜めていた厨力を、最後に苦し紛れにバーガーカンの背

に向けて放った。
しかし、その厨力はバーガーカンのパンズに阻まれ、何のダメージも与えられなかった。

バーガーカンがカリフォルニアの街を去ってからほぼ丸一日の間、シェフである自分はひたすら料理を作り続けていた。
食材については街の備蓄が沢山あり、ユウも郵便船で宅配してくれたので、困ることはなかった。
全く休まず料理を作り続けた経験もないわけではない。
ただ、料理を供給し続けないと人が死ぬ、という経験は当然今までしたことがあるはずもない。
「カリフォルニアの街の皆はもちろん……パニーニも、白ご飯も、サーロインステーキも、玉子焼きも、状態は快方に向かい始めた。最悪の事態は免れた」
集まったキュイの仲間に報告した途端、途轍もない強さの疲労が身体を襲った。しかしまだ、休むわけにはいかない。
「自分はバーガーカンとの戦闘が始まってから、ずっとキッチンで調理を続けていたから、何が起きたのか把握できていない。カフェモカ、簡単に状況を説明してくれないか」
「……了解しました。それでは今回の戦闘についてまとめてみます」
カフェモカはその場に集まった仲間たちの顔を見渡して、話を始める。
「まず、バーガーカンは最初に『イーター』と呼ばれるダークキュイを数十ほど召喚しました。このダークキュイは非常に弱いですが、負の厨力を吸収して段々と強くなる性質があります」
「負の厨力が非常に強い地域にしか生息できないダークキュイだから、ほとんどの人は初めて見たんじゃないかな。カフェモカでさえ知らなかったんだし」
ウィッチがカフェモカの説明にそう付け加える。
「ウィッチの言葉どおり、このダークキュイは負の厨力がとても強い環境でないと力を発揮できません。そこでバーガーカンは、負の厨力

を増大させる魔法石を使用しました」
「バーガーカンの魔法石のかけらを分析してみたけど、厨力を注ぐとそれを蓄え、厨力を増幅させつつ増幅分を周囲に放出する効果があるみたい。正の厨力を注いだら逆に、正の厨力が強くなると思うよ～」
　ウィッチがまたカフェモカの説明に付け加える。
「魔法石を発見したサーロインステーキと玉子焼きが話せる状態ではありませんから想像になりますが……あの魔法石は戦闘が始まる以前から、あの場所に隠されていたのでしょう。あの大きさの魔法石を持ち運べるはずがありません」
「あの場所には枯れ井戸があった。その底に沈めておけば、そう簡単には見つからないと思うよ」
　ドーナツが隠し場所についてそんな考えを述べる。
「では、隠し場所が井戸の底だったと仮定して話を進めましょう。おそらくバーガーカンは、召喚したイーターの何匹かを魔法石の元に向かわせたのでしょう」
「なるほど。魔法石に負の厨力を注いだのは、イーターだったってことかい」
　ブリトーの言葉にカフェモカは頷く。
「戦闘が始まるまでは負の厨力の増大は確認できませんでした。そして戦闘開始からドーナツが負の厨力の増大に気付くまでは、バーガーカン自身はずっと私たちと対峙していましたからね」
　つまりバーガーカン以外の敵が魔法石を起動したことになる。カフェモカはそう言いたいのだろう。
「私たちはイーターを撃破しつつ負力が増大した原因を探すことにしました。バーガーカンはその私たちの動きを見て、作戦を変えたのでしょう」
「作戦を変えた？」
「バーガーカンの膨大な厨力を注ぎ込めば魔法石の効果は何倍にもなる。見つかることを覚悟で短期決戦に切り替えたってことだね」
　カフェモカではなくドーナツが自分の質問に答える。
「ええ。魔法石を隠し通してもイーターが全滅すれば意味がなくなり

ますからね。それならイーターが全滅する前にと、短期決戦に出たのでしょう」
　そしてカフェモカもドーナツの言葉に賛同した。
「サーロインステーキと玉子焼きの頑張りにより魔法石は破壊でき、バーガーカンの企みは破ることができました。しかし、その際に玉子焼きは深い傷を負ってしまいます」
　淡々と話していたカフェモカの口元がわずかに歪んだ。
「負傷した玉子焼きをシェフの元まで運ぶようサーロインステーキに指示したのですが、その運ぶ道中をバーガーカンに狙われ、サーロインステーキは複数のイーターに襲われました。……昨日の戦いの私の指示の中で、これだけは完全に私の判断誤りです」
　カフェモカはそう言うと、皆に向かって深々と頭を下げた。
「バーガーカンとの直接対決で有効打のない、私かモカせんせーのどちらかがさっちゃんに同行すべきだったね。ごめん」
　ドーナツも頭を下げる。
「ドーナツの言葉どおりです。ただ幸い、サーロインステーキの危機はブルー・マルガリータが救ってくれました。改めて感謝いたします」
　カフェモカは今度はブルー・マルガリータに向かって、改めて頭を下げる。
　ブルー・マルガリータというキュイと顔を合わせたのは、自分は今日が初めてだった。おそらく、その名前と同名のカクテルのキュイなのだろう。
「私やブリトーは前にメキシコにしばらくいたことがあって、ブルー・マルガリータはその時の仲間だったんだ。今回の決戦の際に力を借りたくて、私が呼んだ」
　ドーナツがブルー・マルガリータが突然この街に現れた理由を説明する。
「でも、メキシコからここカリフォルニアまでは急いでも3日はかかる。バーガーカンとの戦いに間に合わない可能性もあるから、みんなには話さなかった」

「むしろ、よく3日で間に合ったね。リータ」
ブリトーがそう言うと、ブルー・マルガリータは静かな笑みを浮かべた。
「私が1分でも早くカリフォルニアに着くことで、救われる哀しみもあるかもしれない。そう思って急ぎました。……本当にそのような状況になるとは、思いませんでしたが」
「ブルー・マルガリータがカリフォルニアに到着したとドーナツから聞き、サーロインステーキのことは彼女に任せることにしました。そして私たちはバーガーカンと直接対決したのですが……」
カフェモカは大きく首を振る。
「バーガーカンが全身を回転させて負の厨力の竜巻を作り出すという恐ろしい技を使い、パニーニと白ご飯が倒されてしまいました。主食のキュイさえも一撃で倒されてしまうとなると、正直なところ直接対決で勝つ道筋が見つかりません……」
そのカフェモカの言葉は、深く沈んでいた。
「でもさ、モカせんせー。そんな最強スキルがあるのに、あの土壇場まで使わなかったのはどうしてなんだろうね？」
ドーナツは普段同様の明るい声を変えずに話す。
「あれだけの厨力を放出するのですから、バーガーカン自身にも相当な負担がかかるでしょう。何度も気軽に使える技ではないはずです」
ドーナツの質問にカフェモカは自分の考えを述べる。その言葉を聞いて、ドーナツは首を僅かに傾げた。
「バーガーカンは去り際に、1週間後にメキシコを襲うと言い残して、その場を去りました。以上が昨日の戦闘の全てです」
「1週間後にメキシコを襲う……？」
最後の言葉が自分の中で引っかかった。一日経ったのだから、つまり猶予は後6日になっている。
「メキシコに行くのは3日以上かかると言うことだったが」
「はい。メキシコの街を助けるのであれば、早々にこの街を出発しないと間に合いません。なのでこれから皆で作戦を練ると言う状況です」

「そうか……」
　自分の身にさらなる疲れが押し寄せるのを感じた。キュイたちには一時の休息も許されないと言うことか。
「玉子焼きとサーロインステーキは1週間では回復しないだろう。パニーニと白ご飯は数日休めば戦えるようにはなるかもしれない」
「……そうですか」
　カフェモカは自分がそう説明すると顔を曇らせた。
「メキシコには私の他にもう一人、オーシャンスターという飲み物のキュイがいますが、戦力はそれだけです。……できれば、皆様の力も貸していただきたいです」
　ブルー・マルガリータは深々と頭を下げた。
「サーロインステーキと玉子焼きを救ってくれた恩人の街だ。助けないという選択肢はないだろう」
「ええ…もちろんです。しかし全員でメキシコに向かうわけにも行かないでしょう。バーガーカンが宣言どおりメキシコに向かうとも限りませんし、バーガーカン以外のダークキュイに街が襲われる可能性もあります」
　カフェモカのその言葉はもっともだった。サーロインステーキと玉子焼きはこの街から動かせない状態だ。その二人を置いてメキシコに向かえるはずもない。
「メキシコに戦力を集めたらこの街を襲うし、メキシコを無視したらメキシコを襲う。バーガーカンってそんな奴だと思うな～」
　ドーナツはそんな意見を述べた。
「それは…その可能性は高いでしょう。バーガーカン自身も、昨日の戦いでは手薄なところを狙ったと話していました」
　カフェモカもドーナツの意見に同意する。
「だから手薄なところを作らない方がいい。戦力を二手に分けることは、止めた方がいいんじゃないかな」
　ドーナツの言葉に、全員が沈黙した。ドーナツの話は正論で、否定することは難しい。しかし、戦力を分けないとは即ち、メキシコの街を見捨てると言うことだ。

「ねえ、シェフはどう思う？」
「え……」
　ドーナツは突然自分に話を振ってきた。
「自分は皆のように直接戦えるわけではないから、他人事のように聞こえてしまうかもしれないが」
　そう前置きして、自分は自分の意見を告げた。
「自分が生み出したキュイも、カリフォルニアのキュイも、メキシコのキュイも、みんな同じキュイだ。キュイたちを……見捨てるような選択肢は取りたくない」
「シェフさん……」
　ブルー・マルガリータが感極まったような声を出す。
「それじゃ、戦力を分割するしかないね～」
　ドーナツはなぜか笑みを浮かべながら声を上げた。
「……仕方ありませんね。ではメキシコに向かうメンバーとカリフォルニアに留まるメンバーを検討していきましょう」
　カフェモカのその声も、僅かに嬉しさが混じっているように聞こえた。
「あ。私とポップコーンはカリフォルニア居残り組にして？」
「へ？」
　ドーナツに自分の名前を出されて、ポップコーンは不思議そうにドーナツの顔を見た。
「この街でしかできない作戦を思いついたんだ。この街のことは私に任せてほしい」
「ドーナツがそこまで言うんだ。任せていいと私は思うよ」
　自信ありげなドーナツを見て、ブリトーはカフェモカにそう伝えた。
「ふむ。それではメキシコ組はブリトー、クレープ、私カフェモカ、ブルー・マルガリータ。カリフォルニア組はドーナツ、ポップコーン、フライドポテト。これでどうでしょうか」
　ドーナツの意見を踏まえ、カフェモカは案を出した。
「異議なーし」

ドーナツが手をあげて賛同する。
「わ、私は多少異議があるんだけどな」
ポップコーンはそう口を挟んだ。ドーナツの目論みが分からないのに、戦力として名指しで指名されたのだから、当然不安もあるだろう。
「大丈夫。ポップコーン先生には、マジックをやってもらいたいだけ」
「マジック？」
予想外の単語が飛び出し、思わず自分は声を上げた。
「ポップコーンはマジックが得意なんだ。あ、それとシェフも手伝ってくれる？」
「あ、ああ。それがダークキュイから街を守る役に立つなら、いくらでも手伝うが」
とりあえずそう返事は返したものの、全く話が見えてこない。
「面白そうな話だけど、私たちにそれを聞いてる余裕はないね。メキシコ遠征組はそろそろ出発しようか」
ブリトーがそう提案すると、カフェモカも頷いた。
「それではドーナツ。カリフォルニアの街と玉子焼き、サーロインステーキ。それとシェフのことは、任せますよ」
「任せといて！」
ドーナツは元気よく返事を返す。
不安は残るが、ドーナツにここまで自信があるなら、自分もドーナツを信じるべきだろう。
こうして自分たちは二手に分かれて、次の戦いを待つことになった。

# メリケン０８区ードーナツー

ブリトー、クレープ、カフェモカ、ブルー・マルガリータ、そしてウィッチ。５人がメキシコに出発して、１日が経った。

ウィッチはメキシコに転送陣を作るために同行した。メキシコに転送陣があれば、カリフォルニアとメキシコの間を即座に移動することができるようになる。

そうすれば襲われた街に援軍を送ることもできるし、逆に万が一の場合は逃げることもできる。

しかし、バーガーカンが転送陣の作成を邪魔してくる可能性も非常に高い。ウィッチがメキシコの街に無事に転送陣を作れる保証はなかった。

やはり、二手に分かれた状態のままでバーガーカンと戦う覚悟も持っておく必要がある。

「ふう……」

調理器具の洗浄が終わり、自分はキッチンの脇に置いてあるソファに腰掛けた。

ここ数日、自分の寝床はこのソファだった。理由は言うまでもなく、キュイの皆を守るためだ。

深い眠りにつくつもりもない。しかしそうは言っても、四六時中意識を保つこともできるわけがなかった。

結果として、自分はバーガーカンの襲撃を察知することができなかった。

「シェフ～！」

「……!?」

目覚めた自分は、何者かの手によって背後から抱き締められていた。

もっとも、それが誰であるかはすぐに分かる。

「バーガーカン……！」

「グッナイ～。シェフと合うのは3日前以来ね～」

バーガーカンは両手を上げてこちらを拘束から解く。

自分は振り返るとバーガーカンの顔を睨みつけた。その動きを見て、バーガーカンは薄く笑う。
「あらぁ……突然の訪問なのに、まるで驚きがないのね～」
「お前が再度この街を襲ってくる可能性も想定していたからな」
自分は努めて冷静に、そう答える。
「ただ、真っ先に自分を襲ってきた理由は分からない。……キュイを回復させる力を持っているからか？」
「ノンノン。回復が困るなら、回復させないような戦い方をするわよ～」
バーガーカンのその答えと似たような話をドーナツもしていた。
先日の戦いでこちらは相当の戦力を失った。……しかしその割に、結局誰一人として死んでいないのだ。
あえて戦死者を減らし、負傷者だけを増やして看護の手間を増やし戦力を削ぐ。そんな兵法があるらしい。
バーガーカンの狙いはそれではないか。そうドーナツは推察していた。
「では……何が目的で自分を狙う？」
「それは……」
「それは、シェフに会いたかったから～。じゃない？」
「……!?」
今度はバーガーカンが驚く番だった。いつの間にかひとつしかない部屋の入口に、ドーナツが立っている。
「もし私がダークキュイとして産まれたら、どうするかなって考えたの」
ドーナツはバーガーカンに向けて語りかける。
「自分の存在は消されたくないから、一人でキュイと戦い続けるんだろうね。で、そんな最中にシェフが現れる」
「……」
バーガーカンは狼狽えた表情をすぐに戻し、ドーナツの話を聞く。
「初めて現れた、敵ではないかもしれない存在。ゆっくり二人で話してみたい、と思うんじゃない？」

「……ふん。そこまで気が付いておきながら、シェフとミーの話に割り込んでくるんだから、ユーも相当なクズ野郎ね」
バーガーカンはドーナツを睨みつけた。
「だって～。今の私はダークキュイじゃなくて、仲間もたくさんいるキュイだし～」
ドーナツは不敵に笑ってみせる。
「……ま、いいわ。こんな奴にミーの心境を代弁されるのは腹立つけど～。シェフ、シェフはどうして私たちの味方にならないの？」
「……」
バーガーカンの質問に、自分は少し間を置く。
「自分の料理から産まれたのはキュイだった。その敵がダークキュイだ。キュイの味方、ダークキュイの敵になるのに、これだけの理由では不十分か？」
「あら～」
自分の否定の回答に、バーガーカンはなぜか歓声を上げる。
「それはつまり……自分の料理からダークキュイが産まれたら、ダークキュイの味方になってくれるってことね～」
「……なんだと……!?」
そのバーガーカンの返答は予想外だった。
「それがあなたの目的……ってこと？」
ドーナツが神妙な表情で問いかけると、今度はバーガーカンが不敵に笑った。
「あらあ？　シェフから産まれたキュイではないドーナツちゃん。あなたは仲間じゃないってシェフが言ってたけど、まだいたの～？」
「……！」
その言葉に、ドーナツは何も言い返せない。
「いや、ドーナツ、そんなことは……」
自分もうまい言葉が出てこなかった。自分の先程の回答は、確かに自分の生み出したキュイとそれ以外、という線を引いてしまったからだ。
「いやあ……ドーナツが口喧嘩で負けるなんて、世界は広いね～」

その時、ドーナツの背後から声が響く。
「……まあ、ね。言葉じゃ負ける。そう思ったから、ポップコーン先生の力を借りたかったんだ」
「そう言われたら仕方ない。稀代のマジシャン、ポップコーンのお出ましっ！」
ドーナツの背後からポップコーンが飛び出てくる。
「さてさて。前口上は終わり。シェフを巡る戦いを始めましょう、バーガーカン」
ドーナツとポップコーンはお互いに少し距離をとって、バーガーカンと相対した。
バーガーカンは二人の様子をしばらく伺ったあと、大げさに笑いだす。
「ワオ！　まさか二人だけでミーと戦うつもり⁉」
「シェフをダークキュイの魔の手から守ることはできると思ってるよ？」
ドーナツはバーガーカンにそう告げる。
「ふ～ん……まあ、シェフの手を引きつつ敵と戦うのは厄介ねえ～」
バーガーカンはドーナツの意図を察してか、迷った素振りを見せる。
バーガーカンの目的がシェフである自分ならば、当然自分から離れて戦うことはできないだろう。
自分自身が隙あらば逃げ出そうと企んでいるからだ。
近距離の攻撃手段が主なバーガーカンにとって、移動を制限されるのはかなり厄介なことのはずだった。
「バーガーカン。少なくとも自分は、この場でキュイたちを殺すような相手に、従うつもりはないぞ」
自分のその言葉は、バーガーカンの動きをさらに縛る駄目押しのつもりだった。
しかしバーガーカンは、その言葉を聞いてにやりと笑う。
「何言ってるのシェフ～。シェフがミーの言うことを聞いてくれれば、誰も死なないわ～」

バーガーカンは周囲を見渡す動きをする。
「一昨日の戦いで倒れた街の住人が、２０人くらい？　今もこの教会で休んでる。シェフの産み出したキュイもいるよね～。シェフが一緒に来てくれないと、酷いことになっちゃうわ～」
「……脅しのつもりか？」
「先に脅したのはシェフの方じゃな～い？　まあいいわ。シェフが一緒に来てくれないのなら、今この場で、ハンバーガー旋風～して、全部吹き飛ばしちゃう」
「そんなことをして……キュイたちを殺したら、二度とお前たちに協力する余地はないぞ」
「分かってるわよ～。ミーもシェフに嫌われたくないわ～。でもねシェフ。シェフが断ったら、この教会ごと破壊する。そう言われて、シェフは私のお願いを断れる？」
「くっ……」
もちろん、そう言われたら断れるはずがなかった。
「だからー。言葉じゃ勝てないよ～」
ドーナツが自分に向けてそう告げる。
「そこで私の出番。一世一代のスーパー脱出マジックをお見せします！」
ポップコーンはいつの間にか取り出したステッキをくるくると回した。
「今から3つ数えると、なんと！　この教会の中で休んでいる街の人たちが、みんな別の場所にワープします！」
そして、ポップコーンはステッキを高く掲げる。
「3！　2！　1！　イリュージョン！」
ポップコーンのカウントダウンが終わる。自分には何も起こったようには見えない。
しかし、バーガーカンの表情は明らかに変わった。
「確かに、あれだけあった厨力の反応が全て消えたわね～。面白いじゃな～い」
バーガーカンは軽く拍手をする。

厨力を感じ取れない自分には分からないが、このマジックのタネは事前にポップコーンから聞いていた。
事前にフライドポテトが作り出した厨力のポテトを各ベッドに寝かせておく。そしてタイミングを合わせて、そのポテトを一斉に消す。
バーガーカンが厨力の大小でこちらの様子を探っているのであれば、厨力の消失を『キュイの消失』と誤解する可能性があった。
「でもね～。これだけ広範囲に影響を与える転送なんてできるはずないのよ～。仮にできるとしても、何十人も別の場所に飛ばすよりミー1人を別の場所に飛ばした方が効率的だわ～」
「うっ……」
バーガーカンの指摘に、ポップコーンはうろたえる。
「で、では脱出マジック第二弾！　今度は私たちがこの場からワープします！」
ポップコーンは再びステッキを高く掲げる。
「3！　2！　1！　イリュージョン！」
ポップコーンの声とともに、ステッキの先から勢いよく煙が噴出された。
部屋中に煙が立ち込め、自分の足元すら見えないほど視界が悪くなる。
「ニンジャの煙幕みたいね～。でも、これに乗じて逃げようとしても、厨力でどこにいるかは……」
バーガーカンの言葉が止まった。しかし、もう遅い。
「厨力でどこにいるかはばればれだよね～。シェフ以外は！」
「シェフ！」
バーガーカンの足音が強く響く。おそらく唯一の出入口に向かって走り出したのだろう。
「サルート！」
ポップコーンはその隙を狙って、至近距離で自分のスキルをバーガーカンに当てる。
「ぐっ……！」

バーガーカンの鈍い声が響き、足音が止まった。
ポップコーンの1回の攻撃でバーガーカンを倒せるはずはない。しかし、足止めとしては十分に過ぎるだろう。
戦闘の最中、自分はキッチンを離れた。

ポップコーンの話によると、マジックの実行者がマジシャン本人であることは想像よりも遥かに少ないそうだ。
アシスタント。観客。黒子。マジシャンよりも警戒されにくい人物がタネを仕込んだ方が気付かれにくいからだ。
マジシャンの役目はむしろ、話術や意味深な行動で注意を引き、マジックの真の実行者から注意を逸らすことである。
そう言う意味ではポップコーンは素晴らしいマジシャンであった。
バーガーカンを倒す最後のマジック。その実行者が、キッチンから逃げ出したシェフ、自分だとは、流石のバーガーカンも気付けないだろう。
キッチンを出た自分は、隣の部屋から天井裏に上がった。
「あなたの目的がシェフなら、これでもうあなたの負けは決定ね」
隣室からドーナツの声が響く。
「……まあ、ミーの計画がうまく行かなかったことは認めるわ～。でも、負けてはいないんじゃない？」
「どういうこと？」
隣室の声に合わせて、音を立てないように移動する。
バーガーカンが厨力の大小で周囲の状況を把握しているのであれば、厨力を持たない自分の動きを、バーガーカンは認識できない。
しかし単純な視覚や聴覚で把握されてしまっては意味がない。
他の物音に合わせてゆっくりと移動する。これが最善の方法だった。
「ミーがシェフを探すことは難しくなった。でも、例えばユーを人質に取れば、シェフは自分から出てくるかもしれないわ～」
「私たちがおとなしく人質にされるとでも？」
「ものの例えよ～。人質は戦闘能力のないこの街のキュイでも、他の

街のキュイでもいい。さっきのシェフの話で確信したわ～。あのシェフは、どんなキュイであろうと、助けに来る」
「最低ね、あなた」
「ユーに、キュイにどう評価されようとミーはなんとも思わないわ～」
話に紛れて、自分は目標地点に到達した。
後は正面にあるロープを、懐に忍ばせたナイフで切るだけだ。
「残念だけど、私のマジックはまだ1つ残ってるよ！　最後はご要望にお答えして、バーガーカン、あなたを消します！」
ポップコーンの声に合わせ、自分はロープを切り落とした。

「な……何なの!?」
バーガーカンは思わず大声を上げていた。
キッチンの天井が崩れ落ちたからだ。部屋全体の天井が落ちたのでは、避けようがない。
バーガーカンは木材の山を頭から被った。それと同時に、金属製の何かが衝突したような音が響く。
「ったく、何なのよ～」
バーガーカンは頭のパンズを振り回し、頭に被った木材を吹き飛ばす。
「……!?」
バーガーカンの目に次に飛び込んできたのは、金属製の檻だった。
天井にしかけてあったのだろう檻が天井の崩落に合わせて落下し、バーガーカンの周りを囲んでいる。
「ポップコーン最後のマジック。バーガーカン捕獲！」
バーガーカンが無事に檻の中に入ったことを確認し、ポップコーンは声を上げた。
「……」
バーガーカンは無言のまま、檻の一部に近付き、頭のパンズを勢いよく振り回す。
鈍い金属の衝突音が響く。そして、バーガーカンのパンズの直撃を受けた檻の格子は、少し折れ曲がった。

「何回か叩けば、壊れそうね～」
バーガーカンは再びパンズを振り上げる。
ドーナツはバーガーカンの動きを見て、厨力の光線を指先から放出した。厨力は金属の格子の隙間を抜け、バーガーカンの身体に当たる。
「私たちは邪魔するけど、壊せるといいね～」
ドーナツはにやりと笑ってみせる。
「……ふ～ん」
バーガーカンは檻への攻撃を止めた。
「いつの間にか結構追い詰められてるわね～。仕方ない、ここは一旦引き上げましょう～」
バーガーカンはそう告げると、体を捻り回転を始めた。
バーガーカンの必殺技、ハンバーガー旋風。おそらくはそれで、檻ごと吹き飛ばそうと言うのだろう。
「ハンバーガー旋風。その技には致命的な弱点がある」
「へえ……どんな？」
回転しながら、バーガーカンは尋ねた。
「回転を始めたら技の発動が終わるまで止まれない。そして、その間はパンズで自分の身を守れない。要するに敵の攻撃に無防備になるんじゃない？」
ドーナツは自分の推察をバーガーカンに答えた。
「まあ、正解よ～。でも、無防備でユーの攻撃を受けても、たいしたダメージにはならないわ～。この場にクレープでもいれば、別でしょうけどね～」
バーガーカンの周囲に黒い厨力の渦が巻き起こり始める。ドーナツはバーガーカンの言葉を聞いて、笑みを浮かべた。
「バーガーカン。そうは言いつつ、あなたはクレープがこの場にいる可能性さえ想定している。クレープがいたとしてもその攻撃にさえ耐えられる自信があるから、ハンバーガー旋風を使ったんだ」
ドーナツの身体にも、桃色の厨力が集まり始める。
「臆病なあなたは、あらゆる可能性を検討して、少しでも危うい道が

あったら戦闘を避けようとする。そんなあなたを倒すには、あなたが冗談ですら思いつかないような方法で、倒すしかない！」
ドーナツの桃色の厨力はさらに大きく、濃くなっていく。それはバーガーカン旋風を使おうとしているバーガーカンの厨力よりも大きく見えた。
「拡・散・性、美味！」
ドーナツの周囲に集まった厨力は、ドーナツの声で一斉に収縮し、バーガーカンの足元に放たれる。
次の瞬間、その厨力は光の柱となりバーガーカンを包み込んだ。
その光の柱が異常なほどの威力であることは、誰の目にも分かった。正の厨力と負の厨力が衝突する時に起きる音と風が、他の攻撃より圧倒的に強かったからだ。
少しの時間を置いて、光の柱はその場から消える。
「本気の私は……冗談抜きで強いよ」
ドーナツはその場に倒れたバーガーカンの姿を見て、そう呟いた。

バーガーカンの全身からはしばらく黒い厨力が放出されていたが、やがてそれも治まる。そして段々と姿が薄れていった。
それがキュイの死であることは、パニーニの消失を見た自分にも分かっていた。
「やれやれ……ドーナツの言葉どおり、ミーは常に安全圏で戦うことを心がけていたのよ～……それなのにこんなに早くやられちゃうなんて、ショックだわ～……」
バーガーカンは消える直前になっても口が軽いままだった。
「切り札を見せた相手と、もう一度戦っちゃだめだよ～」
ドーナツもバーガーカンに合わせて、軽い口調で話しかける。
「ここまでの戦いで切り札を隠し続けたユーが正解ってことね～……来世があったら参考にするわ～……」
バーガーカンは自分の方に顔を向けた。
「シェフ。ミーは嘘つきで卑怯者で最低だけど～……最後のこの言葉だけは何の裏もない、ただのお願い……最後に一度だけ……抱きしめ

てくれない～……？」
「えっ……」
そう言われて、自分は思わずドーナツの顔を見ていた。ドーナツは何も言わず、ただ目を閉じて頷いてみせる。
「これで……いいのか？」
自分はバーガーカンの背中に手を回し、少し上体を起こす。
そしてどんな感情を込めて良いのかも分からないまま、バーガーカンの身体を軽く抱きしめた。
「ありがと～……嬉しいから、ひとつだけ『真実』を教えてあげる～……」
「真実……？」
「スターゲイジーパイの他に、ミーの仲間は後3人いるわ～……そして、そのうちの1人が『首謀者』よ～……」
「首謀者？　……何の？」
「ん～……残念ながらタイムアップ。それじゃシェフ、シーユー！」
その言葉を最後にして、バーガーカンの身体は完全に消失した。

## 和風島
## 箸休めー春巻きー

メリケン大陸での戦いが終わり、自分たちは次元ハウスに帰ってきた。
不眠不休の調理作業。そしてバーガーカンとの戦闘。
自分の身体に蓄積された疲労が、次元ハウスに戻ってきた途端、一気に襲いかかってきた。
やるべきこと、考えるべきことはいくつもあるが、ともかく今は身体を休めたかった。
「シェフも随分とお疲れね～」
ソファにもたれかかっている自分に、ウィッチが声をかけてくる。
「ブラックコーヒー淹れたよ。どうぞ」
「ああ……ありがとう」
自分はウィッチからカップを受け取り、中の黒い液体を口に含んだ。
「んっ……がはっ！」
口に含んだ瞬間、言葉では表現できない濁った味が自分の舌を襲う。
「な、何を入れた……」
「よりブラックにしたくて、黒酢とイカスミを入れたよ」
ウィッチは平然とした顔でそう告げる。
ウィッチの料理には最大限の注意を払っていたつもりだったが、それだけ疲れていたのだろう。つい油断して口に含んでしまった。
「まったく……」
こんな料理を日常的に作っていたら、それこそダークキュイが生まれそうだ。
そう思って、自分はバーガーカンの言葉を思い出した。
「なあ、ウィッチ。質問があるんだが」
「ん？　なに？」

「自分が次元ハウスで料理を作るとキュイが生まれることがあるだろう？　逆に、ダークキュイが生まれる可能性もあるのか？」
バーガーカンが尋ねた『シェフがダークキュイを生み出したら、シェフはそのダークキュイの味方をするのか』という質問。
その質問が、自分の心の中で少し引っかかっていた。
「可能性としてはあり得る。でも、あり得ないんじゃない？」
「……よく分からないな」
「次元ハウスに流れる厨力は正でも負でもない、周囲に何の影響も与えない力。私の身体もそのニュートラルな厨力でできている。人間の料理に対する感情によって、厨力は正にも負にも振れる」
ウィッチはコーヒーカップをゆらゆらと揺らしてみせる。
「シェフがプラスの感情を込めて料理を作れば、厨力は正に触れて、正の厨力の塊であるキュイが生まれる。逆に、シェフがマイナスの感情を込めて料理を作れば、厨力は負に触れて、ダークキュイが生まれる可能性もあるかも～」
「……なるほど」
「でも、シェフはマイナスの感情を料理に込めたりしないでしょ」
ウィッチはそう言って笑うが、自分はそれに合わせて笑えなかった。
そもそも、プラスの感情、マイナスの感情という表現自体が曖昧すぎる。
料理の最大の調味料は愛情と言うが、では愛情はプラスの感情なのだろうか。嫉妬、執着、偏愛。行き過ぎた愛情はマイナスの感情とも言える。
まして、自分自身が聖人君子ではない。何かの拍子で料理に暗い感情が宿ってしまい、ダークキュイが生まれる可能性は、ウィッチの話を聞く限りあり得そうに思えた。
「……そうか。そう言うことか」
「ん？」
「あ、いや、何でもない」
ウィッチに顔を向けられて、自分は言葉を濁す。

つまりニュートラルの厨力の塊であるウィッチは、料理にプラスの感情もマイナスの感情も与えられないと言うことだ。
だからこうして食べる人のことを全く考えない料理が出来上がる。マイナスの感情もないのだから、嫌がらせですらない。
ウィッチが料理を作れない理由。些細な発見のように見えて、なぜだか自分の中でそれが強く心に残った。

メリケン大陸で一緒に戦ったキュイたちとは、カリフォルニアで別れた。
バーガーカンを倒したとは言え、メリケン大陸は元々ダークキュイの多い地域だ。自分たちに同行してくれれば有り難かったが、無理に頼むわけにもいかない。
しかし、ただ一人だけ、自分たちと一緒にダーケストと戦いたい、と言ってくれたキュイがいた。
「シェフ！　いつもありがと～」
こちらの姿を見かけて、ドーナツは声を上げる。
バーガーカンにとどめを刺したメリケン大陸のキュイ、ドーナツ。本人の希望で、彼女はカフェモカのように次元ハウスの一員となった。
バーガーカンとの対決が終わった後、ドーナツは自分の本当の能力について皆に話した。
ドーナツは元々、自分の全ての厨力をたった一度の攻撃に注ぎ込む、一撃必殺の技を生まれながらに覚えていた。
しかしその技は、多数のダークキュイが生息しているメリケン大陸では使いにくい技だった。一度の攻撃で終わりでは、複数の相手に勝ち目がない。
ドーナツは自分の技の出力を極限まで抑え、かつ光線の中央部分に穴を開け、密度を薄くした。それがあのドーナツ型の光線……ドーナツビームだった。
「ん～！　シェフのドーナツは今日も美味しい～」
ドーナツは自分が持ってきたドーナツに舌鼓を打つ。

ドーナツの本来の一撃必殺スキル『拡散性美味』は、全力で使うと厨力を使い果たしてしまい、数週間は戦えなくなるという非常にハイリスクな技だ。
失った厨力の回復を少しでも早めるため、ドーナツは自分に同行することを望み、今は毎日こうして自分の作ったドーナツを食べて厨力を補給している。
それと、バーガーカンが最後に漏らした他のダーケストの存在。ドーナツの本来のスキルは、ダーケストのような強大な敵には非常に有効なはずだ。
厨力が一番早く回復する場所。自分のスキルが活躍できる場所。ドーナツは、その2つを理由として自分たちへの同行を望んだ。
「……」
しかし、本当の目的は他にあるのではないか。そう思ってドーナツの顔を伺うと、ドーナツもこちらを向いた。
「シェフも食べたい？」
ドーナツはそう言うとドーナツの片方を口にくわえ、もう片方を自分の顔に向けて差し出した。
「い、いや」
自分は思わず顔を背けてしまう。
「……ドーナツはどうして自分たちに同行しようと思ったんだ？」
「あれ？　前に話さなかった？」
「一度使うとしばらく戦えなくなるスキルなんて、自分だったら怖くて使えない。ドーナツの立場だったら、余程強い理由がない限り、ダーケストと戦おうとは思わないんじゃないか？」
自分はドーナツの目的を疑った理由をそう説明する。
ドーナツのスキルは一度使うごとに明らかに無防備な期間が生まれる。ある意味、使う都度命をかけると言っても言い過ぎではないだろう。
ドーナツが話した同行の目的は、スキルを使う覚悟と比較するとあまりにも軽かった。
「大好きなシェフの力になりたかったから……って理由じゃ、だめ？」

ドーナツはそう呟くと、肩と肩が触れ合うくらいまで、体を近づけてきた。
「い、いや」
ドーナツがからかっているのは分かる。しかし自分は、この手のからかいにうまく対応する力はなかった。
「シェフは、ルーサーバーガーって知ってる？」
ドーナツはそんな質問を投げかけてきた。
「パンズの代わりにドーナツで肉を挟んだバーガー……だったか？」
作ったことも食べたこともないが、名前だけは聞いたことがあった。
バーガーを作る際にパンズが切れ、ルーサーという人物が具材をドーナツに挟んで食べたという逸話を聞いたことがある。
「メリケン大陸のジャンクフード組は、シェフのように料理に敬意を持った人に作られるとは限らない。遊び道具にされることだってよくある」
「ドーナツ……」
自分はその言葉に反論しようとして、言葉を止めた。当のドーナツ自身の表情が明るかったからだ。
「でも、私たちはそれも悪くないと思ってる。料理としてはふざけていても、人を楽しませられるのならそれでいい。フライドポテトをフライドチキンで挟んでみてもいい。ホットドッグの早食い対決をしてもいい。……缶詰めに入ったバーガーがあってもいい」
そこまで言うとドーナツは立ち上がった。
「ダークキュイは敵。例え言葉を話そうと、それは変わらない。……でも、ジャンクフード仲間のハンバーガーをダークキュイにした『首謀者』がいるなら……私はそいつを、許さない」
「……よく分かった。ありがとう」
ドーナツの戦う理由はよく分かった。そして、それを皆の前で話さなかった理由もよく分かった。
それをブリトーやフライドポテトの前で話したら、自分に同行しなかった彼らは仲間思いでないことになってしまう。

だからこそ、ドーナツは嘘の目的を話したのだろう。
「本当に、ジャンクフードの仲間を大切にしているんだな」
そう言うと、ドーナツは笑ってみせる。
「さてさて。それじゃ私は次の戦いに備えて新しい切り札の練習をするから。シェフにも秘密だから、見ないでね」
「新しい切り札？」
「拡散性美味はもう皆に見せちゃったから、切り札にならないでしょ。新しい、誰も知らない新技を覚えておかないと、相手の裏をかけないよ～」
ドーナツはあっさりとそう答える。
「いや、しかし……そんな簡単に、新しい技を覚えられるのか？」
「ん～」
自分の問いに、ドーナツは首を捻る。
「最強のデザートのキュイは、触れようとする者全てを『何もせず』に倒すことができるの。そのキュイの技に憧れて、昔からこっそり練習してるんだ。ゼロからスタートするわけじゃないよ」
「それはまた……恐ろしいくらい強いスキルだな」
自分はそんな感想を呟いた後、ドーナツの話した『最強のデザート』が何なのか気になった。キュイの話ではなく、料理人としての純粋な興味だ。
「最強のデザート……何のデザートなんだ？」
「シェフの故郷のデザートだよ。『いちご大福』」
「いちご大福……!?」
予想外の名前が出てきて、自分は少なからず驚いた。当然洋菓子が出てくるものと思ったからだ。
「シェフがもしいちご大福のキュイを生み出せたら、間違いなく頼りになると思うよ～」
最後にそう告げて、ドーナツは自分に背を向け、川縁の道を歩いていった。
「……まあ、やはり無理か」

ドーナツの話を聞いて、自分は次元ハウスに戻りいちご大福を作ってみた。しかし案の定、いちご大福のキュイが生み出されることはなかった。
「シェフ、何を作ってるのだ？」
金色の髪の少女が、自分の手元を覗き込んでくる。
彼女は春巻きのキュイ。メリケン大陸からの帰還後、自分が新たに生み出した前菜のキュイだ。
揚げた春巻きの狐色の衣と、生春巻きの透明な衣が混じったような、薄い黄色の服が印象的なキュイだった。
「いちご大福だ。食べてみるか？」
「いただくのだ～」
いちご大福を受け取った春巻きは、それをそのまま口に頬張る。
「美味しいのだ～」
屈託のない笑顔を春巻きは見せる。彼女はのどかで天真爛漫な、まさに春のような性格をしていた。
「まだいっぱいあるのだ？」
「ん？　もっと食べるか？」
「さっちゃんとたまちゃんにもあげてくるのだ～。２人の春度を回復させるのだ～！」
そう言うと春巻きはいちご大福をさらに手に取ろうとする。
「二人に持っていくなら、ほら」
自分はキッチンペーパーを取り、苺大福をそれで包んだ。
「おお～。シェフは巻きの腕も素晴らしいのだ～」
春巻きは包んだいちご大福を受け取ると、どこかに走り去っていく。
メリケン大陸で一番の怪我を負ったサーロインステーキの傷も、今はもう十分に癒えた。
しかし厨力を使い果たしたドーナツのように、しばらくの間は厨力を放出するような行動はできないようだ。
日常生活を送るだけなら問題はないのだが、念のためと言って玉子焼きが四六時中付き添っている。

自分を守って大怪我をした相手に、少しでも恩を返したいという思いがあるのだろう。
「ふう……」
キッチンの片付けが終わると、また強い眠気が襲いかかってきた。
実際に戦っているキュイたちの前では口が裂けても言えないが、戦いの疲労が一番抜けていないのは、実は自分かもしれなかった。
ソファにもたれかかると、自分は程なくまどろみの世界に落ちた。

# 和風島０１区ー天ぷらー

暗闇の中、白い光が自分の目に飛び込んだ。
気付くと自分の目の前に、白装束に身を包んだ女性が立っている。
一部が赤地になっていて、巫女の装束のような印象もあった。
「……？」
その女性からは不思議な匂いが漂ってきた。
あまりにもその女性とは、そしてこの場所とは不釣り合いな匂いであったが、この匂いは間違いない。
「納豆……？」
自分が匂いの正体を呟くと、その女性は笑みを浮かべた。
「初めまして、シェフ。私はＤ・ナットーと申します。あなたたちの呼び名で言えば……ダーケストです」
「……！」
自分が警戒した様子を見せると、ナットーは悲しげに笑った。
「戦いに来たわけではありません。それに、ここはシェフの夢の中です。この中で私ができることは、精々こうして姿と声を伝えることくらいです」
ナットーは今の状況をそう説明する。
自分は今の状況が掴めていなかったが、夢と言われれば納得がいった。
自分自身の存在すら曖昧な、ふわふわとしたこの感覚は現実のものとは思えない。
どこか別の場所に転送させられたと言うよりは、夢や幻覚を見せられているという感覚の方がしっくりきた。
「想像どおり、いえ想像以上に、シェフの夢の中は美しいです。料理への愛に溢れています……」
ナットーは自分にとっては暗闇にしか見えない虚空を見上げて、そう呟く。
「自分の夢に入ってきて……何の用なんだ？」
自分がそう尋ねると、ナットーは少しの間沈黙した。

「お恥ずかしながら、実のところ大した要件ではないのです。そう……次元の魔女がダーケストを追い続けるのであれば、近い内に私とシェフは現実でも出会うでしょう」
　ナットーはそこまで言うと、自分に背を向ける。
「その時、あなたの傍らにはキュイがいるでしょう。そうであれば、シェフにとって私は敵にしかならないでしょう」
「……そうだな」
「でも今はまだ、シェフの隣にキュイはいません。……敵になる前のシェフに、一度きりだけだとしても会いたかった。用件はそれだけなんです」
　ナットーはそこまで言うと、再びこちらに振り向いた。
「自分には……その言葉に何と返せばよいのか、正直分からない」
　自分は心の内をそのまま、ナットーに答えた。
　ナットーの真摯な言葉に返事をするには、自分はキュイのこと、ダークキュイのこと、そしてキュイディメのことを何も知らなかった。
「ナットー。もし自分に伝えたいことがあるなら、敵ではない今の内に全て伝えてほしい。……そのくらいのことしか、自分にはできない」
　そう告げると、ナットーは目を閉じる。
「今のキュイディメは、年々負の厨力が濃くなっています。ダークキュイが増えたのも、私たちダーケストが生まれたのも、根本の原因は負の厨力が増大したからです」
　負の厨力が濃くなったという話は、キュイディメに来た際にウィッチからも聞いた記憶があった。
「次元の魔女はどうにか負の厨力を減らそうと、自分で料理を作り、キュイにダークキュイを退治させ、ついには人間界からシェフを呼び出したりと頑張っています。……しかし、それは愚かなこと」
「愚か……？」
「川の上流に毒物を垂れ流す工場があるのに、下流で毒を浄化し続けても無駄な努力にしかならないでしょう？　負の厨力が濃くなった

原因を無くさないで、キュイディメの負の厨力を浄化し続けても、何の解決にもなりません」
　ナットーのその話は、確かにもっともだった。
「負の厨力が濃くなった原因……ナットーは知っているのか？」
「把握しています。しかし、負の厨力が濃くなった原因が無くなれば、私たちダーケストは消滅してしまうでしょう。ダークキュイとして、その問いには答えられません」
　ナットーはその時初めて、自分に敵意を向けた。
　あまりの殺気に自分の心が震える。このダーケストは今までのダーケストより遥かに強い。それは厨力を感じない自分にすら分かった。
「まあ……バーガーカンは『首謀者』と話してしまいましたね。自然発生ではなく人為的な原因がある、と言うことは間違いありませんよ」
　そこまで話すと、ナットーの姿が希薄になった。
「それではシェフ。一時の夢でしたが、ダークキュイとしてこの世に生を受けてから、最も満ち足りた一時でした。……さようなら」
　ナットーの姿が薄れ、その場から消える。
「ま、待て」
　自分でもなぜそうしたのかは分からないが、ともかく自分はナットーを呼び止めた。
「……私は和風島の霊山に住んでいます。私に用があれば、いつでも来ていただいて構いませんよ」
　最後にナットーの声だけが響いた。

　目が覚めた自分は、ひとまず近くにいたカフェモカとウィッチに、夢の話をすることにした。
「う～ん。それは単なる夢なんじゃない？」
　ウィッチが冷たい一言を告げる。
　客観的に考えると、自分がまだ見ぬダーケストの姿を勝手に想像し、夢を見ただけにも見える。
　あのダーケスト……ナットーが確かに存在するという根拠は何も

なかった。
「夢の中に入るとはまたファンタジックな話ですが。例えば相手に幻覚を見せるスキルは存在するかもしれません」
　カフェモカは少し間を置いてから呟いた。
「ただ、ここは次元ハウスです。次元ハウスにまで影響を与えるスキルを使えるダークキュイがいるとは、考えたくありませんね」
「そうだよ～。仮に次元ハウスに攻撃できるダークキュイがいたら、今すぐにでも攻め込んでくるんじゃない？」
　カフェモカの言葉にウィッチも賛同する。
　確かに自分に影響を与える力があるのなら、次元ハウス内のキュイを攻撃することも可能そうだ。
　しかし次元ハウス内はいたって平和だ。つまりそんなダークキュイは存在しないとも言える。
　客観的には納得がいったが、しかしそれでも自分の感情はその答えを否定していた。
「もっとも、和風島に霊山と呼ばれる山は、確かにあります」
　自分の心情を知ってか知らずか、カフェモカは話の方向を変えた。
「シェフが気になるのであれば、和風島に行ってみても良いのではないでしょうか。他に手がかりもないのですから」
「個人的には、行ってみたいと思っている」
　自分は率直に自分の気持ちを伝えた。
「シェフが行きたいのなら付き合うよ～」
　ウィッチは軽い口調で賛同する。
「サーロインステーキ、玉子焼き、ドーナツの3人はまだ厨力が完全に回復していません。となると、和風島に向かうのはパニーニ、クレープ、白ご飯、春巻き、そして私、カフェモカの5人ですね」
「そ、そんなに大勢で行かなくてもいいんじゃないか」
　話が大きくなり、自分は思わず声をあげてしまう。大勢で行ってやはりただの夢でした、となるのは正直なところかなり恥ずかしい。
「……まあ、可能性は低いですが、シェフの夢に入れるダーケストがいるのなら、私たちが和風島に移動した隙に、次元ハウスを襲うかもし

れません」
　カフェモカは自分の言葉を聞いて、前言を翻した。
「パニーニとクレープには次元ハウスに残ってもらいましょう。情報収集だけであれば、私、白ご飯、春巻きの3人で十分です」
「あ、ああ。そうしてくれると助かる」
　自分の情けない言葉でカフェモカの意見を変えてしまい、申し訳ない気分になる。
　とは言え、あのダーケストが次元ハウスを襲う可能性は確かにゼロではない。次元ハウスにも留守番を置いた方が、安心はできる。
「それじゃ、出発は明日の朝でいーい？」
　ウィッチの言葉に、自分は頷いた。急ぐ旅ではない。今日慌てて出発する必要もないだろう。
　それに、自分にはもうひとつ考えるべきことがあった。
　和風島であのダーケスト、ナットーと再開したら、自分はナットーに何を話すのだろうか。自分はまだそれすらも分かっていなかった。

　翌朝。昨日の話どおり、自分はウィッチ、カフェモカ、白ご飯、春巻きと共に和風島に向かった。
　ウィッチの転送陣は、和風島では京都と江戸、ふたつの街に設置してあるらしい。
　自分たちは霊山に近い、江戸の街にまずは訪れることにした。
　和風島は、その名のとおり日本料理の厨力が集まる地方だ。自分にとってはある意味故郷に当たるのかもしれない。
　しかし、実際に来てみると、やはりそこは日本とは別の世界であった。
　木造の平屋建ての建物が並ぶ情景は、まるで時代劇の世界に迷い込んだような印象を受ける。現代の日本に暮らす自分にとって、その光景は懐かしみを覚えるものではなかった。
「ああ……懐かしい匂いがします～」
　白ご飯が歓声をあげる。
「江戸と言えば、白ご飯がもっとも流行した街だったな」

「そうですね～。食べ過ぎで身体を壊す人もいましたけど……皆さんにとても愛されていました～」
江戸では、白ご飯だけを食べ過ぎて脚気にかかる人が急増した。
キュイディメの江戸と人間界の江戸は同一の街ではないだろうが、それでも江戸の特徴を色濃く残した街であることに間違いはないだろう。
「さて、江戸に来たのなら街の名主に挨拶しておきましょうか」
カフェモカはそう提案する。
「名主って、なんなのだ～？」
「街のリーダーのことですよ。面倒見の良い人ですから、協力してくれるかもしれません」
春巻きの質問にカフェモカはそう答える。
「問題は、神出鬼没な人なので、どこにいるか分からないことですが……」
カフェモカは周囲を見渡す。そして、艶やかな着物を着た一人の女性に目を向けた。
「あれは……」
カフェモカはその女性に近付いていく。すると、その女性もこちらに振り返った。
「あら……カフェモカさん。それにウィッチさん。お久しぶりです」
着物の女性は薄く笑うと、軽く頭を下げる。そして、初対面である自分たちに視線を向けた。
「日本料理、天ぷらと申します。以後、お見知り置きを」
その挨拶はあまりにも優雅で、自分は返事をするのを忘れるくらいその動作に見惚れてしまった。
「白ご飯です。よろしくお願いします」
「春巻きなのだ～！　揚げ物仲間なのだ～！」
「え～と……自分はその、シェフだ」
白ご飯と春巻きに合わせて、自分も自己紹介する。
「やはりあなたがシェフ様でしたか。エウロパ大陸、メリケン大陸での活躍は聞き及んでいますよ」

「知っているのか？」
「ええ。この街には色々な情報が集まりますから」
天ぷらはそう言うと、笑みを浮かべる。
「天ぷらさんが名主さんなのだ？」
春巻きがそう尋ねると、天ぷらは首を振った。
「私は名主ではありませんよ。そう……強いて言えば、名主の友人です。皆様方は名主に会いに来たのですか？」
「ええ。ダーケストのことを知っているなら話は早い。その件で少し相談があるのですよ」
カフェモカは自分たちの用件をそう告げる。
「……なるほど。それでは案内いたしましょう」
天ぷらはそう答えると、こちらに背を向けて歩き出した。

# 和風島０２区ーオムライスー

江戸の街の名主、おでん。
頭にねじり鉢巻きを巻いたその姿は、名主という名称とは裏腹に随分と庶民的に見えた。
小さな背丈とも相まって、シャンパンやブリトーのような、街の代表としての威厳のようなものは殆ど感じられない。
「う～ん」
自分の夢の話を聞いたおでんは、大きく唸った。
「偶然じゃねえよなあ……天ぷら」
「ええ。霊山に何かが起きているのは、間違いないようです」
おでんの問いかけに、天ぷらはそう答える。
「何かあったのですか？」
「少し前に霊山の麓の集落から、数人のキュイが江戸に逃げてきたんだよ。霊山に大量のダークキュイが発生して、退治しきれなかったてえことだ」
そのおでんの言葉は、自分たちにとっても衝撃的だった。
「じゃあ……本当に霊山に、ダーケストがいるってこと？」
ウィッチがそう呟くと、おでんは首を振った。
「それは分からねえ。ただ、霊山にダークキュイが増えた原因が何かあるのは確かだ。シェフが来る前から、霊山の様子を見に行こうとは思ってたんだよ」
「……シェフの見た夢が偶然の産物、とは思えなくなりましたね」
カフェモカのその呟きに、皆も頷いた。
「しかも、予定では霊山に向かうのは明日でした。もしかすると……霊山のダーケストは、その計画も察知していたのかもしれません」
「あっしらの計画を知って……それでシェフのところに化けて出たってかい？　何のために？」
天ぷらの言葉に、おでんが疑問を投げかける。
江戸のキュイが霊山に向かう前日に、自分の夢に霊山のダーケストが現れた。それは確かに偶然とは思えない。

しかし、ダーケストが自分の夢に現れたその目的は、確かに想像がつかなかった。
「私たちも霊山に同行させて、一網打尽にする。留守になった次元ハウスに攻撃を仕掛ける。可能性として考えられるのはそのあたりでしょうか」
カフェモカは首を傾げながらそう答えた。
「う～ん。ピンと来ねえなあ」
おでんはカフェモカの言葉に首を振る。カフェモカも自分の発言に自信がなかったのだろう、おでんの顔を見て頷いた。
「霊山のダーケストがシェフの夢に現れたおかげで、私たち次元ハウスのキュイと江戸のキュイは顔を合わせて、事前に対策を話し合えているわけです。これは私たちにとってメリットにしかなっていない」
「つまり、霊山のダーケストにとってはデメリットにしかなっていませんね」
天ぷらがカフェモカの言葉をそう補足する。
「……一言だけいいか？」
自分は自分なりの考えを皆に伝える。
「夢で会っただけで、しかも僅かな時間話しただけではあるが……彼女、霊山のダーケストは策を弄するような人物には見えなかった」
バーガーカンのように煙に巻いた話し方ではない。ナットーの受け答えは、常に真摯だった。
「単純に、明日の戦いの前に自分と話したかっただけ……なんじゃないか？」
自分の中ではその目的が一番しっくりと来た。
「あっしに倒される前に、シェフに遺言を残したかったってえことか？」
「……いや」
ナットーからは死を覚悟した様子は全く見受けられなかった。
それに、ナットーはいつでも霊山に来てくれていい、と最後に答えたのだ。自分が死ぬことなど全く考えていないだろう。
「逆……だと思う。自分が、キュイを殺す前に……話したかったたん

じゃないか」
「……へっ。面白え」
おでんは自分の考えを聞いて鼻を擦った。
「ともかく、これ以上考えても仕方ねえな。天ぷら！　予定どおりあっしは明日、秋葉原のキュイを連れて霊山に向かう。留守は頼むぜ！」
「はい。承知いたしました」
天ぷらは深々と頭を下げる。
「秋葉原のキュイ？」
「ああ。あっし一人じゃ手が足りねえ。かと言って天ぷらを連れて江戸の街を留守にするわけにもいかねえ。なんで、隣町のキュイに助っ人を頼んだんだよ」
「なるほど……私たちも助っ人に加わっても良いでしょうか？」
カフェモカはおでんたちと自分たち、両方の顔を見てそう伝えた。
「ああ。こちらとしては願ってもねえ話だ。よろしく頼むよ」
おでんは頭を下げる。
「そうなると……次元ハウスで待機しているパニーニとクレープも呼んだ方がいいか？」
ダーケストの戦いでは、デザートの一撃が有効だった。ドーナツの傷は癒えていないが、クレープは元気いっぱいだ。
「……止めておきましょう。次元ハウスの留守を狙われる可能性も皆無ではありません。それに何より、戦力は十分です」
カフェモカは自分の提案を否定すると、おでんの顔を見た。
「おでんは、そう……シェフが今まで見てきたキュイの中では、おそらく一番強いキュイです。おでんが勝てないようなダーケストであれば、クレープを連れてきても勝てませんよ」
「そんなに……なのか」
自分は改めておでんの姿を見る。
今までの会話で、考え方のしっかりした良いリーダーであることは分かった。
しかし白ご飯や春巻きと大差ない背丈を見ると、やはり歴戦の戦士

のような印象は持てない。
「そんなに見るなよ～。照れる～」
おでんは自分の視線に気付くと、はにかんで笑った。
「あ、ああ。ごめん」
自分は女性に向けて失礼なことをしていたと気付き、頭を下げる。
「それでは皆様も今日はこの屋敷にお泊りください。お部屋はご用意しております。まだ日も高いです。街を見て回っても良いかもしれません」
天ぷらは話が終わったのを見て、皆にそう告げた。

翌朝。自分たちは秋葉原のキュイ、オムライスとかまぼこに合流し、霊山に向けて出発した。
オムライスは黄色地に赤い線の入ったエプロンで白い衣装を包んでおり、まさにオムライスのような格好をしている。
かまぼこはなるとのような赤い渦巻きのある白い衣装を着ていた。巨大ななるとの付いた魔法の杖のような武器が目を引く。
二人とも、江戸の街のキュイとは異なり明らかに現代的な格好をしていた。
二人の話によると、秋葉原の街は江戸とは違いかなり現代的な街だそうだ。同じ現代人である自分にとっては、そちらの方が懐かしさを覚えるかもしれない。
「秘剣・白滝！」
おでんは木刀程度の長さはあるおでん串を振り上げると、ダークキュイに向けて飛びかかる。
次の瞬間、おでんの前にいた何匹かのダークキュイは、まるで線切りをされたかのように身体が無数に裂けていた。
「二丁あがりっ」
おでんの言葉とともに、ダークキュイは消滅する。
「おでん～。私達の助け、必要だった～？」
かまぼこはそうおでんに声をかけた。
霊山に向かう道すがらダークキュイには何回も襲われたが、全ての

敵はおでんが一瞬で倒していた。
彼女はおでん串を剣のように振るって戦う。おでん串に刺さったおでん種によって剣の能力が変わるそうだ。
白滝はおでん串の先が無数の刃になり、一振りで何重もの剣撃を与えられる複数人相手向きの技だった。
そのような強力な技を、おでんはおでん種の数だけ持っているとのことだ。
「確かに、圧倒的な強さだな……」
自分は思わずそんな感想を口に出していた。
「おでんの強みは状況に合わせて技を切り替えられるところです。前菜のキュイですが、主食のようにも、副菜のようにも、飲物のようにも戦えます」
カフェモカはおでんをそう評価する。
それは戦いの評価であっただろうが、おでんという料理そのものの評価にも聞こえた。
料理の持つ性質と、キュイの戦い方はやはり似通うものなのだろう。
「さて、とりあえず霊山の麓まで辿り着いた。……これからどうする？」
おでんは皆に向けてそう尋ねた。
「この辺りのダークキュイは、やはり多くなっているのか？」
自分がそう尋ね返すと、おでんは首を振る。
「普段より多少は多いかもしれねえな。でも、集落を捨てて逃げ出すキュイが現れるほど、酷い状態にも見えねえ」
「ふむ……集落を襲ったダークキュイはどこに消えたのでしょうか」
「数日前まで大量のダークキュイがいたのは確かだ。となると、むしろ姿が見えねえ方が……厄介だな」
おでんはそう呟くと、周囲を見渡す。
「ん……あれはなんだ？」
おでんは視線を止めると、その方向を指差した。
その方向にはかなり傾斜のついた登り坂がある。おそらくは山に

登る登山道であろう。
おでんがその方向に歩いていったので、自分たちもその後ろについていった。
「何だ、こりゃ……」
おでんは登山道の脇に置かれていた、小さな石碑に目を向ける。いや、どうやら石碑そのものではなく、その石碑に貼られた紙の御札が気になったようだ。
「強い、負の厨力を感じます……」
白ご飯がそう呟く。自分には神社等によくある紙製の魔除けの御札にしか見えないが、どうやら負の厨力が込められているようだ。
「これは、たぶん……」
おでんの脇からウィッチがその御札を覗き込んだ。
「カフェモカ。ちょっと山に向けて、コーヒーを思いっきりぶちまけてくれない？」
ウィッチは後ろを振り向くと、カフェモカにそう伝える。
「こうですか？」
カフェモカはダークキュイを攻撃する時のように、手元のカップから登山道に向けてコーヒーを振りまいた。
「……！」
カフェモカのコーヒーは地面に落ちる前に、まるで見えない壁にぶつかったかのように止まり、その場で消失した。
「やっぱり……厨力を通さない結界が張られているみたい」
「結界……？　誰がそんなことを？」
オムライスはそんな疑問を口にしてから、思い直したかのように軽く頭を叩く。
「負の厨力なんですから、ダークキュイがやったに決まってますね」
「うん……そりゃそうだね」
かまぼこは軽い口調でオムライスの言葉に返事する。しかし表情は硬くなっていた。
普通のダークキュイは、結界を張るような高度なことができるはずはないからだ。

「どうすれば結界は解ける？」
「その御札を消滅させれば結界も消えるよ。御札に込められた厨力以上の厨力をぶつければ消える。ただ……結界が消されたら、たぶん結界を張った人物は、私たちがここにいることに気付く」
「なるほどねえ……鳴子ってことかい」
おでんはおでん串を構えると、皆の方を振り向いた。
「まあ、結界を解く以外の方法はないよなあ。皆、戦いの準備はいいかい？」
おでんの言葉に皆も頷く。
「喰らえっ」
おでんは御札に向けておでん串を振り下ろした。御札は真っ二つに切り裂かれたかと思うと、まるでダークキュイのように黒い厨力を噴出する。
そして少しの時間を置いて、御札は消失した。
「……」
カフェモカは無言のまま、再びコーヒーを登山道に向けて振りまく。今度は、そのコーヒーはそのまま、地面へと落ちた。
「来たっ！」
おでんは登山道に向けておでん串を振り上げる。
登山道の先に数匹のダークキュイの姿が見えた。こちらに向けてかなりのスピードで走ってきている。
「秘剣・牛すじ！」
おでんはダークキュイに向けて串を横払いする。
「ギュイイ！」
数匹のダークキュイはおでんの攻撃を受けて吹っ飛んだ。
「『モカアサルト』！」
倒れたダークキュイに向けて、カフェモカがスキルで追い打ちをかける。
「ギ……ギギ……」
ダークキュイの体から大量の黒い厨力が吹き出す。おそらくもう体を保つことはできないだろう。

「危ないっ！」
後方に立っていたオムライスが声を上げた。
「『オムレツ障壁！』」
オムライスが声を上げると、自分たちの周囲に黄色い薄い膜が張られる。
玉子焼きのバリアに少し似ている。と、次の瞬間その膜に衝撃が起こった。
いつの間にか後方にもダークキュイが現れている。一匹だが、他のダークキュイよりもかなり身体が大きい。
「ギッ！」
ダークキュイは拳で何度も黄色の膜を叩く。何度か衝撃が走り、やがてその膜はたち消えた。
「秘剣・昆布！」
おでんが串を頭上に掲げると、ダークキュイの周囲に巨大な昆布が現れた。その昆布はダークキュイに巻き付き、その身体を縛り上げていく。
「おお～！　ぐるぐるなのだ！　春巻きもぐるぐるするのだ～」
春巻きはおでんの攻撃を見て、手を振り上げた。
すると今度はダークキュイの周りに、春巻きの皮が現れた。そしてその春巻きの皮も、ダークキュイに巻き付いていく。
「手助けありがとよっ」
おでんは春巻きの方に手を置くと、ダークキュイに向けて大きくジャンプする。
「秘剣・大根！」
おでんの串はダークキュイの頭に振り下ろされた。
ダークキュイの身体はまるでおでんの大根を切るかのように、何の抵抗もなく真っ二つに切り裂かれる。
「他に敵は!?」
「……見当たりません」
カフェモカは周囲を見渡し、次に皆の顔を見渡し、そう告げた。
「ひとまず戦闘終了かい」

おでんは串を背中に差すと、呟いた。
「妙に強いダークキュイだったなあ……」
「私には圧勝したようにしか見えませんがね」
おでんの言葉に、カフェモカはそう突っ込む。
確かに今の戦いは、ほとんどおでんが一人で戦ったようなものだ。今まで会った中で最強のキュイ、というのも実感できる。
「攻撃の際の抵抗で、ダークキュイの負の厨力の強さは何となく分かるんだよ。みんな、ここからは十分警戒してくれ」
おでんの言葉に、皆は頷いた。
「さて……それでは結界の消えた登山道を進みましょうか」
カフェモカはそう声を上げる。
結界に守られており、結界を解いた瞬間ダークキュイが襲ってきた。
その結界の先には間違いなく、何かがある。
それは誰しもが理解したであろう。登山道に向かう皆は、覚悟を決めた真剣な表情をしていた。

# 和風島０３区ーかまぼこー

「そろそろ、頂上だ……」
おでんは声を潜めて、そう伝える。
「もうなのか？」
登山道に入ってからまだ1時間も経っていない。
途中二回ほどダークキュイに襲われたことも考えると、たいして高い山ではなさそうだった。
「頂上には神社がある。……誰がが身を潜めているとすれば、絶好の場所だ」
おでんの言葉に、皆が息を呑んだ。
坂道が終わると、一気に視界が広がる。その一角は木々がなく、地面は石畳になっていた。
そして正面には、小さな神社が見える。そしてその前に、一人の女性の姿があった。
それは間違いなく、夢で見たダーケストの姿だった。
「あれが……？」
「ああ。あれが……自分の夢に出てきたダーケスト、ナットーだ」
ナットーはこちらを向いている。当然、向こうにもこちらの姿は見えているだろう。しかし、彼女は動かなかった。
「ひとまず、あっしだけが行く」
おでんはそう呟くと、ナットーに向けて歩き出した。
「あんたが……ダーケストって奴かい？」
おでんはナットーからある程度の距離を取って立ち止まり、串を構える。
「汚らわしい……」
「あ？」
「何の苦しみもなく生まれて、何の努力もせずシェフの寵愛を受ける。そのことについて、なんの疑問も抱いていない、醜い存在」
ナットーは空を見上げ、そう呟いた。
「せめて死ぬ時は、苦しみなさい」

ナットーは刀を抜き、その場で刀を振り下ろした。
「……！　秘剣・蒟蒻！」
おでんがそう叫ぶと、おでんの前に巨大な蒟蒻の壁が現れた。
しかし次の瞬間、三日月形をした白色の衝撃波が蒟蒻の壁を貫いた。
それは蒟蒻を貫き、その後ろのおでんを貫き、それでも勢いが衰えず、自分たちの方に向かってくる。
「危ないっ！」
『オムレツ障壁！』
白ご飯が皆の前に立ち、オムライスは先程見せた黄色のシールドを展開した。
しかしナットーの白色の衝撃波はオムライスのシールドを貫き、白ご飯の身体を貫き、後ろにいた皆の身体を貫く。
「ぐはっ……」
その一瞬で、自分以外の全ての仲間が、地面に倒れた。
本来負の厨力の影響を受けないウィッチまでもだ。
「みんな！　だいじょーぶ!?」
ウィッチは即座に起き上がる。主食のキュイである白ご飯とオムライスはすぐに起き上がった。
遠目であるが、おでんも再び立ち上がっている。
「カフェモカさん！」
白ご飯がカフェモカに駆け寄った。カフェモカはぐったりとしたまま動かない。
致命的なダメージを受けたキュイは厨力を吹き出す。それがないため、致命傷ではないようだ。
しかし気を失っているのか、白ご飯の呼びかけに答えようとしない。
「かまぼこ！」
おでんが大声で叫ぶ。
「……！　分かった！」
かまぼこはふらつきながら立ち上がると、手に持った杖をくるくる

と回した。
「『渦巻の呪文』！」
かまぼこの杖から桃色の光線が放たれる。それはナットーに向けてではなく、ナットーの頭上に向けて放たれた。
桃色の光線はナットーの頭上で渦を巻き、やがてそれは巨大な蒲鉾のような形になる。
「秘剣・蒲鉾！」
おでんは飛び上がると、その巨大な蒲鉾に向けて串を突き刺す。
そしてそのまま、おでんは串に突き刺した蒲鉾を、ナットーの頭に向けて振り下ろした。
「くっ……」
ナットーは自らの刀を頭上に掲げ、その蒲鉾を受け止める仕草をする。
おでんとナットー。両者に挟まれた蒲鉾は大きく潰れ、その場に四散した。
「ちっ」
おでんは舌打ちするとナットーから距離をとった。
「江戸の名主、おでん。今の、かまぼこのキュイとの協力攻撃があなたの切り札であるなら……あなたに勝ち目はありません」
「へっ。ダークキュイにも名を知られているとは思わなかったな。でも、勝負はまだ分からねえ」
「……」
ナットーは再び刀で、空を斬る。
すると再び、白色の衝撃波がおでんを襲った。
「くっ！」
おでんはその場で横っ飛びする。白色の衝撃波はおでんの脇をかすめ、おでんの衣服を少し切り裂いた。
「その強烈な負の厨力の籠もった刀で……この空間の厨力そのものを切り裂いていると見たねえ」
おでんは鼻をこすると、にやりと笑う。
「負の厨力を飛ばしているわけじゃねえ。だから正の厨力と相殺され

ずに、触れたものすべてを切り裂いていく」
　おでんは傷のついた衣服を引っ張って見せる。
「ただ、避けりゃあ同じことだ。空間を切り裂くなんて大技、連発できるとも思えねえよ？」
「……ふっ」
　ナットーはおでんの言葉を聞いて、薄く笑った。
「そうですよ。避ければいいだけです。しかし、誰しもがあなたのように素早いわけでもありません」
「……！」
　おでんは慌てて後ろを振り向いた。
「おでんさん！　かまぼこと、春巻きさんが……！」
　オムライスが悲痛な叫びを上げる。
　先程の攻撃はまたもおでん以外の皆を貫いていた。
　オムライスと白ご飯はどうにか立ち上がれているものの、残りのキュイは起き上がれない。
「これが一対一の戦いであれば、確かにまだ勝負はついていないかもしれません。しかし、この状況下ではあなたに戦いを続ける選択肢はない」
「てめえ……」
　おでんはナットーを睨みつける。
「引きなさい、おでん。仲間の命を危険に晒してまで、戦うべき目的があるわけでもないでしょう」
「……くそっ」
　おでんはナットーを睨みつけながらも、ナットーから段々と距離をとっていき、自分たちのいる場所まで戻ってきた。
「すまねえ。あっしの力不足だ。癪だが……この場は一旦、引き返そう」
　おでんは皆に向けて頭を下げる。
「そこまで深い傷ではないと思います。休める場所まで帰れるのであれば……助かるはずです」
　白ご飯は倒れているカフェモカや春巻き、かまぼこの様子をうかが

いつつ、そう呟く。
「あっしが責任を持って送り届ける。あのダーケストが追ってこねえのなら……大丈夫」
おでんの言葉に釣られ、自分はナットーのいた場所に改めて視線をやった。
しかしそこにナットーの姿はなかった。自分がそのことに驚くとほぼ同時に、自分の首筋に何かが巻き付けられる。
「逃げるのであれば追うつもりはありません。ただ、シェフ……。あなたは別の目的があってここに来たのではないですか？」
気付くと自分の背後にナットーが立っていた。
ナットーは両腕を自分の首筋に回し、軽く締め上げている。強い力ではないが、振りほどけそうにはない。
「てめえ！」
おでんが再び串を構えた。
「おでん！　自分は大丈夫だ。それより、皆を安全な場所に……頼む」
「で、でもよう……」
「自分はキュイではない。ダークキュイに危害を加えられる心配はないんだ。気にするな」
躊躇するおでんに向けて、自分はそう告げた。
「白ご飯。よろしく頼む」
「……はい！」
白ご飯はそう返事をすると、春巻きを背中に背負った。
現時点で既に動けないキュイが半分だ。これ以上事を荒立てると、死者が出てもおかしくない。
「シェ、シェフ……」
「必ず江戸の街まで戻る。待っていてくれ」
不安そうなウィッチに向けて、自分はそう伝えた。
皆を見送った自分は、ナットーに手を引かれて神社の中にある一室へと連れて来られた。
その部屋は小さな和室で、中央に炉が置かれている。いわゆる茶室

であろう。
「夢の中だけではなく、現実でもお会いすることになるとは思っていました」
ナットーは最初にそう告げると、哀しそうな瞳でこちらを見つめた。
「ナットー……話したいことがある。聞いてもらえるか？」
自分はそう口を開いた。
ウィッチやおでんはダークストを退治する目的でここに来たのだろう。
しかし自分の目的は、ナットーともう一度会話することだった。
「……ええ。どのような話でも、構いませんよ」
ナットーはそう伝えると、自分から少し視線を外す。
「自分は人間界から連れて来られたシェフだ。キュイディメの世界では部外者だし、望んでこの世界に来たわけでもない」
「はい。存じています」
「ただ、自分が生み出したキュイは、家族と同じだと思っている。彼女たちを害する者がいるのなら、自分はその者を許せないだろう」
自分の生み出したキュイは自分の子のようであり、妹のようでもある。少なくとも、愛することに理由はいらない存在だった。
自分のその言葉を聞いて、ナットーの表情は曇った。
「ウィッチたちはダークキュイはキュイを害する存在で、倒すしかないと言っている。ただ……それに、自分は疑いを持っている」
「と言うと？」
「ウィッチが嘘をついていると言いたいわけじゃない。ただ、片方の話だけを聞いて判断するのは危ういと思った」
自分はずっと胸に引っかかっていた違和感を、そう説明した。
言葉を話さず、ただキュイに襲いかかるダークキュイが敵だと言うのはまだ分かる。しかしダークストは言葉で意思疎通ができるし、必ずしも好戦的でもなかった。
そのダークストを敵だと断定してよいのか。それは自分の中で常に胸に引っかかっていた。

「それで、ダーケストである私の話も聞いてみようと思った……と言うことですか？」
「そう言うことだ」
　ナットーの問いかけに、自分は頷く。するとナットーは大きなため息を吐いた。
「残念ながら……と言うべきなのか分かりませんが、キュイたちの意見と私たちダーケストの意見はおそらく同じです」
「戦うしかない、と言うことか？」
　自分の言葉に、ナットーは頷いた。
「むしろダークキュイの方がよりキュイに対する敵意は強いでしょう。キュイたちを倒さないと、自身が消失してしまうのですから」
「消失してしまう……？」
「はい。キュイディメの負の厨力はまだまだ少ない。ダークキュイは、この世界では長くとも1年程度で寿命が尽きます」
　ナットーのその言葉は、自分にとっては衝撃的だった。
「だからこそダークキュイはキュイを倒して、少しでも正の厨力の濃度を下げようとしています。私個人はそれを無駄な抵抗だと考えていますが、戦っている仲間を否定したくはありません」
　そう言うと、ナットーは大きなため息をついた。
「私たちダークキュイが生存できるほど負の厨力が強くなれば、今度はキュイが私たちと同じ立場になるでしょう。だからこそ……キュイとダークキュイはお互いに戦うしかないのです」
「……そうか」
　それは残酷な結論だった。ナットーの言葉は、キュイとダークキュイの共存を完全に否定していた。
　それはつまり、自分とナットーも共存できない関係である、と言うことだ。
「話してくれて感謝する」
　自分は心が割り切れないまま、話を終わらせる。
「……シェフ。私も少し話して良いでしょうか？」
　ナットーの言葉に自分は頷いた。自分の話に真摯に答えてくれた

恩もあるし、何より彼女の考えを聞くのは自分の義務にも思えた。
「シェフはキュイを家族だと言いました。同様に、キュイもシェフのことを家族だと思っているでしょう。そして……ダークキュイも、シェフのことは家族だと思っています」
「ダークキュイもなのか？」
「負の感情から生まれたとは言え、料理から生まれた存在なのです。シェフのことを生みの親だとは思っていますよ」
　ナットーのその話は、また自分の中でのダークキュイの印象を変えた。
「ただ……負の感情で生み出された私たちは、キュイほど素直にシェフへの愛を伝えられません。スターゲイジーパイやバーガーカンとお会いになったのであれば、分かるはずです」
「分からなくは……ないが」
　自分はスターゲイジーパイとはあまり話せていない。
　しかしバーガーカンは確かに自分に好意を持っていた。そしてそれを最後の瞬間まで自分にうまく伝えられなかったのだろう。
「しかし唯一。シェフに好意ではなく恨みを抱いているダークキュイがいます。それが、今回の事件の首謀者です」
「首謀者……キュイディメの負の厨力を増大させようとしているダークストのことか」
　自分がそう確認すると、ナットーは頷いた。
「彼女の目論見が成功すれば、近い将来大半のキュイは消失してしまいます。シェフにとっては最大の敵と言えるでしょう。しかし……」
　ナットーは立ち上がると、何故か自分の隣に座り直した。そしてナットーは手を自分の頬に伸ばす。
「シェフは先程、自分はダークキュイに危害を加えられることはないと言いました。しかし実は、そうでもありません」
　ナットーの白い指先が自分の頬から唇へと動いていく。
「厨力での攻撃は、厨力を持たないシェフには何の効果もありません。しかし、話せるし、触れられるのです。シェフを苦しめる手段は、いくらでもあります」

ナットーは自分の唇を何回か指でつまみ、弄ぶ。そしてで指を離すと、その指先を自分の唇に当て、官能的な笑みを浮かべた。
「正直なところ、殺される覚悟はできている」
自分はナットーから目線を外しつつ、そう答えた。
訳の分からない世界に引きずり込まれ、戦闘に巻き込まれているのだ。自分だけが安全圏にいるとは一度も思ったことはない。
一人でこの場所に残った時点で、最悪の場合は殺されることも覚悟していた。
「その覚悟はお見事です。しかし、私に勝てない程度の戦力で首謀者と戦っても、確実に皆殺しにされます。それを私は見過ごすことはできません」
ナットーは今度は両手を自分の頬に伸ばす。
「先程話したとおり、私もシェフを愛しています。シェフを失いたくありません。そして……ふふっ」
ナットーは薄く笑うと、両腕を自分の背中に回し、身体全体をこちらに倒してきた。
自分の身体はナットーの身体に押し倒されて、仰向けの状態になる。
「やはり私もダークキュイなのでしょう。素直にシェフを愛せそうにはありません。どんな手段を用いても、シェフが傍にいてくれればそれでいい、と思ってしまいます」
ナットーは自分の両腕を両手で掴む。身体全体も押し付けられており、簡単には身動きがとれない。
「シェフ。この場所で私と二人、キュイディメの行く末を見守りましょう。首謀者の目論見どおりキュイディメがダークキュイの世界になれば、私は生涯あなたにお使えします」
ナットーは自分の胸に顔を押し付ける。
「首謀者の目論見が失敗すれば、私も消えます。そうしたら、キュイの所に帰ればいい。それでよいではありませんか……」
そのナットーの言葉はまるで子供の泣き声のようで、自分はそれ以上抵抗する気はなくなった。